

## 埋蔵文化財調査報告書42

高蔵遺跡（第31次・32次・33次・立会）  
鳴海城跡（立会）

2002

名古屋市教育委員会

## 埋蔵文化財調査報告書42

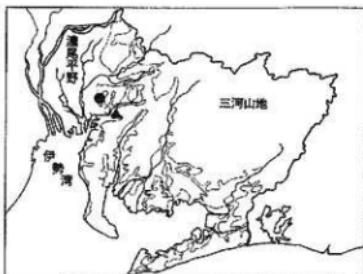
高蔵遺跡（第31次・32次・33次・立会）  
鳴海城跡（立会）

2002

名古屋市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、名古屋市教育委員会が発掘調査及び立会調査を実施した、市内5箇所の報告である。
2. 収載した遺跡は、高藏遺跡、鳴海城跡である。
3. 発掘調査に係わる調整事務は、市教育委員会文化財保護室が、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館が担当した。
4. 各調査の所在地、調査期間、調査原因、調査面積は巻末報告書抄録に記載した。担当者は、以下の通りである。高藏遺跡第31次（額頬茂・服部哲也）、高藏遺跡第32次（伊藤正人・伊藤厚史）、高藏遺跡第33次（額頬茂・伊藤厚史）、高藏遺跡立会調査（伊藤正人）、鳴海城跡立会調査（田原和美・額頬茂・伊藤正人）
5. 本書では基準高は東京湾平均海面を、座標系は建設省告示の第VII座標系を使用した。
6. 本報告書の作成にあたり、遺物の復元、実測、トレイス等下記の方々の協力を得た。  
佐々木佳子、山木雅代、小浦美生、福田望子、岡本敦子
7. 本書は各調査担当者の助言を得て、額頬、伊藤（正）、伊藤（厚）が執筆したほか、新美倫子氏（名古屋大学博物館）、岡本敦子氏にも玉稿を賜った。編集は伊藤（厚）による。執筆分担は日々次に示した。
8. 出土遺物や調査にあたり作成した実測図、写真類は名古屋市見晴台考古資料館で保管している。



●は高藏遺跡の位置  
▲は鳴海城跡の位置

## 目 次

第Ⅰ章 高藏遺跡第31次	1	第Ⅲ章 高藏遺跡第33次（伊藤厚）	56
第1節 位置と環境（伊藤厚）	1	第1節 はじめに	56
第2節 調査の経過（額頬）	2	第2節 造構と遺物	56
第3節 基本層序（額頬）	2	第3節 まとめ	58
第4節 遺構と遺物（額頬）	5	第Ⅳ章 高藏遺跡立会調査報告（伊藤正）	62
第5節 小結（額頬）	27	第1節 調査の経過	62
第Ⅱ章 高藏遺跡第32次	29	第2節 造構および調査状況	62
第1節 調査の経過（伊藤厚）	29	第3節 遺物	64
第2節 基本層序（伊藤厚）	30	第4節 小結	66
第3節 造構と遺物（伊藤厚）	31	付編	68
第4節 田中稔コレクション（岡本）	41	第Ⅴ章 鳴海城跡立会調査報告（伊藤正）	72
第5節 自然遺物（新美）	53	報告書抄録	78
第6節 まとめ（伊藤厚）	55	奥付	78

# 第Ⅰ章 高蔵遺跡第31次

## 第1節 位置と環境

名古屋のほぼ中央に位置する熱田区の地形は、交通の要衝地でもある金山から、熱田神宮までの洪積台地と、近世に開削された堀川より西方に広がる沖積地（近世の干拓新田）からなる。

近世の熱田は、名古屋城下の南に位置し、熱田社の鎮座する聖地であったほか、東海道五三次四一番の宿場でもあり、桑名への七里の渡し、海道の玄関としても賑わいをみせた。

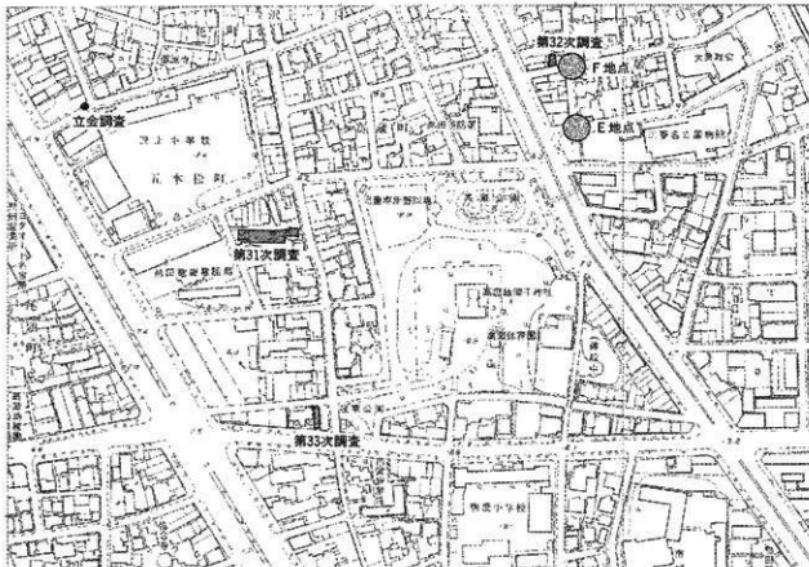
知多の海に

かすみたなびく あゆち渴

熱田の浦に 春立らしも 『尾張名所圖會』より

熱田区にある高蔵遺跡は、断夫山古墳と共に名古屋を代表する遺跡である。高蔵遺跡は、北は沢上一丁目、花町から南は夜寒町、東は外土居町から西は五本松町という南北約700m、東西約500mの範囲にひろがっていると推定されている。

明治40（1907）年、大津通の拡幅工事に伴う土取りの際、多量の弥生式土器が出土し、弥生式土器と石器が共伴することが学会に報告された。以来、考古学史上著名な遺跡として知られている。1980年代になって開発に伴う事前調査が多く行われるようになると、弥生時代前期の溝や後期の方形周溝墓が多数発見されるようになったほか、古墳の周溝や中世以降の遺構、遺物も出土し、貴重とも豊富な遺跡であることが明らかとなった。



第1図 調査位置図 ( $S=1:4,000$ )

## 第2節 調査の経過

第31次調査は、個人住宅4軒の建築に伴って平成12年11月20日より翌平成13年2月2日にかけて行った。調査途中、西側の隣接地点の建築計画の申請があり31次調査の追加調査として実施することになった。追加分の調査は平成13年2月5日から3月2日にかけて実施した。調査面積は当初の調査が約600m<sup>2</sup>、追加の調査区が約120m<sup>2</sup>である。本報告では3回に分けて調査した調査区の内、当初計画の600m<sup>2</sup>分を前半区、追加分の120m<sup>2</sup>を追加区とし、前半区をさらに西半区、東半区として呼ぶこととする。

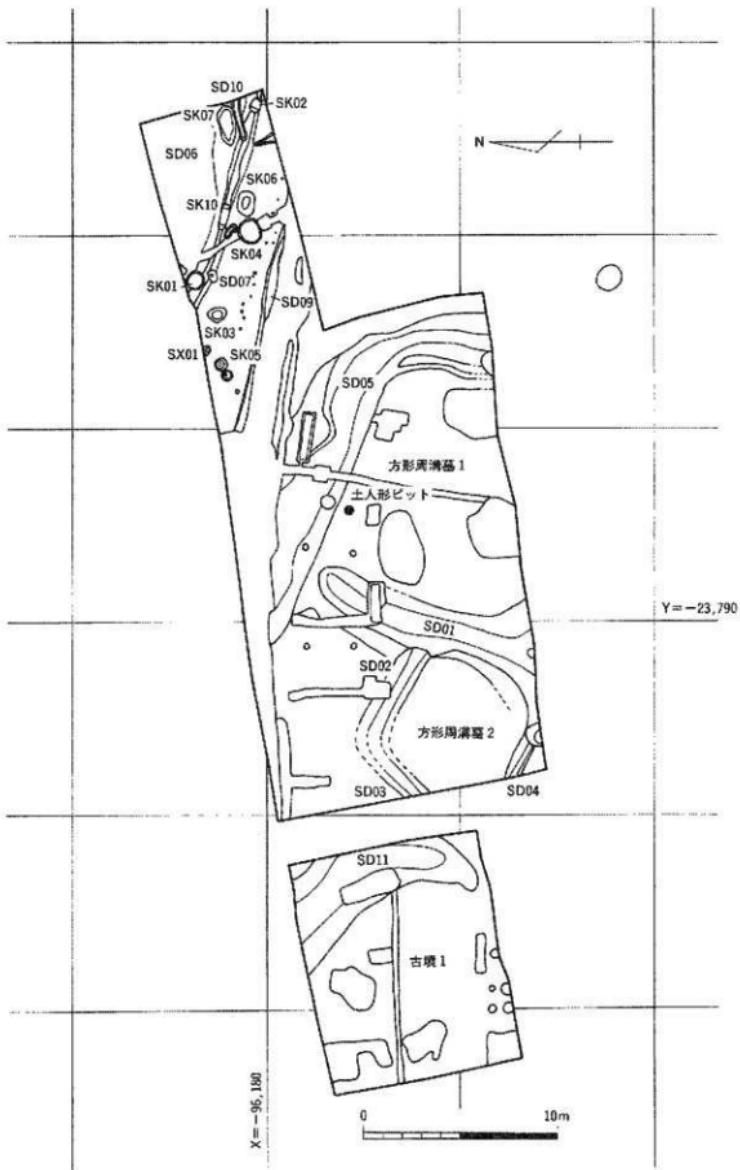
前半区の調査は11月21日より表土除去を開始し、方形周溝墓1及び2を検出した。その後包含層掘削と方形周溝墓の溝の造構掘削を並行して進め、12月14日までに掘削を終える。写真清掃を15日までに終え、写真撮影及び造構実測を進め、12月25日までに埋め戻しを終え、西半区の調査を終える。東半区は平成13年1月10日より表土除去を開始、溝を確認し造構掘削を進める。16日までの造構掘削と写真清掃を終え、造構実測作業後、1月25日までに埋め戻しを終え、前半区の調査を終える。

追加区の調査は、2月5日より表土除去を開始、古墳1(SDII)を検出する。溝の掘削を中心に作業を進め、2月20日までに完全に造構を掘りあげ、写真撮影を終える。造構平面図、土層図の作成後、2月26日に埋め戻しを行った。

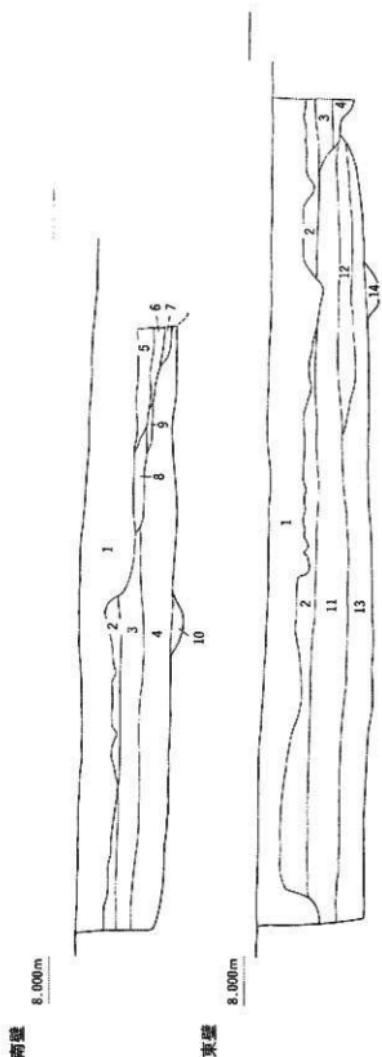
## 第3節 基本層序

本調査地点は、つい数年前まで戦前からの長屋建物が立っており、その建物が取り壊された後はしばらくの間、更地であったようである。調査区の北側に向けてやや微窪地状に下がっているが、その付近では表土直下10cmほどで地山の熟田層に達する。南側ではやや厚くなるものの、それでも溝以外の箇所では深い場所でも40cmほどで地山に達するため、基本層序を正しくとらえることは難しい。追加の調査区では特に浅く、前述のように、熟田台地上の起伏を削平したことによって、現在の平坦な面が形成されていることがうかがわれる。第3図に東半区の東壁、南壁を示した。東半区では調査区の南西部をおおきく近代のライフル線によって破壊されているが、溝が通っていたためか、中世遺物がかなりの量で出土している。やや赤黒い褐色土が中世の包含層ないし溝の覆土となっている。東半では特に包含層中に、地山ブロックが目立つ土層があり、中世以降この地点はかなり激しく土地改変されていたことが、うかがえる。包含層にあたる土層が、やや砂質がかった感じであるのも、地山土由来の性質である可能性がある。今回の調査地点において地山の熟田層は調査区全体で確認されたが、その性格は均質なものとはいえない。粘性の高い黄褐色部分と、粘性が低く砂質で白みがかった淡黄褐色の部分とが混じり合ったように認められる。調査区の大部分が地山熟田層の上面を削平されていたことも関連するであろうが、ばらつきが目立った。調査中、方形周溝墓の溝などを掘削中、現地表面から70cmから80cmほどの部分から水が浸み出し、降雨後はなかなか乾かなかった。こうした状況も熟田層の浸透層と不浸透層がいり混じった状況に起因する可能性があるといえよう。乾湿の変化が大きいと考えられる埋没環境は、方形周溝墓出土の遺物の遺存状況に大きな影響を与えていている。

本調査地点では中世以降の土地削平が盛んであったためか、包含層にあたる土層はほとんど残っておらず、溝の覆土の堆積状況が、失われた情報を得るための材料といえよう。



第2図 調査区全体図 ( $S = 1 : 250$ )



第3図 調査区土層図 ( $S=1:40$ )

1. 黒土：やや堅不透水性。
2. 黑褐色土層：やや堅不透水性。約1mm前後の炭化物を少量含む。粘性弱くサラサラ。
3. 河色土層：じかに土壌ではない。約1~2mmの層。多く2~3mmの炭化物をそれが少し含む。
4. 河色土層：層厚約1mm。層底に1mm程度の層。多く2~3mmの炭化物をそれが少し含む。
5. 黑褐色土層：全く含まない。
6. 黑褐色土層：約1mm前後の炭化物をやや多めに含む。粘性弱くサラサラ。
7. 黑褐色土層：6層に覆るがどちらに通みが深い。
8. 黑褐色土層：2~3mmの炭化物を少量含み、地山土が生えなくなる土層。
9. 黑色土層：2~3mmの炭化物を少量含む。粘性しまりともにやわらぎ。
10. SD100土層：約1~2mmの炭化物をやや多量に、約5~10mmの漂物を少量。約1~2mmの炭化物をこく少含む。
11. 黑褐色土層：約1~2mmの炭化物をこく少含む。やや砂質分が入り、粘性はめだが堅く。
12. 黑色土層：約1~2mmの炭化物を少量含む。約1~2mmの層入が多く、黄みがかった。
13. 黑色土層：約1~2mmの炭化物を少量含む。約1~3mmの漂物をこく少量。約1~2mmの炭化物を少量含む。粘性しまりともにやわらぎ。
14. SD100土層：

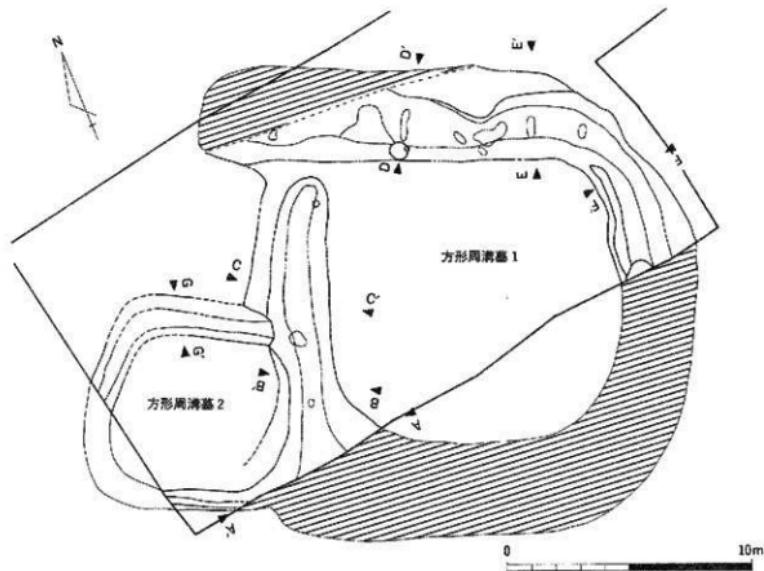
#### 第4節 遺構と遺物

今回の調査においては、弥生時代末の方形周溝墓が2基、古墳が1基など、弥生・古墳時代を中心に、近代までの遺構が検出された。時代を追って各遺構と遺物をみて行くこととした。

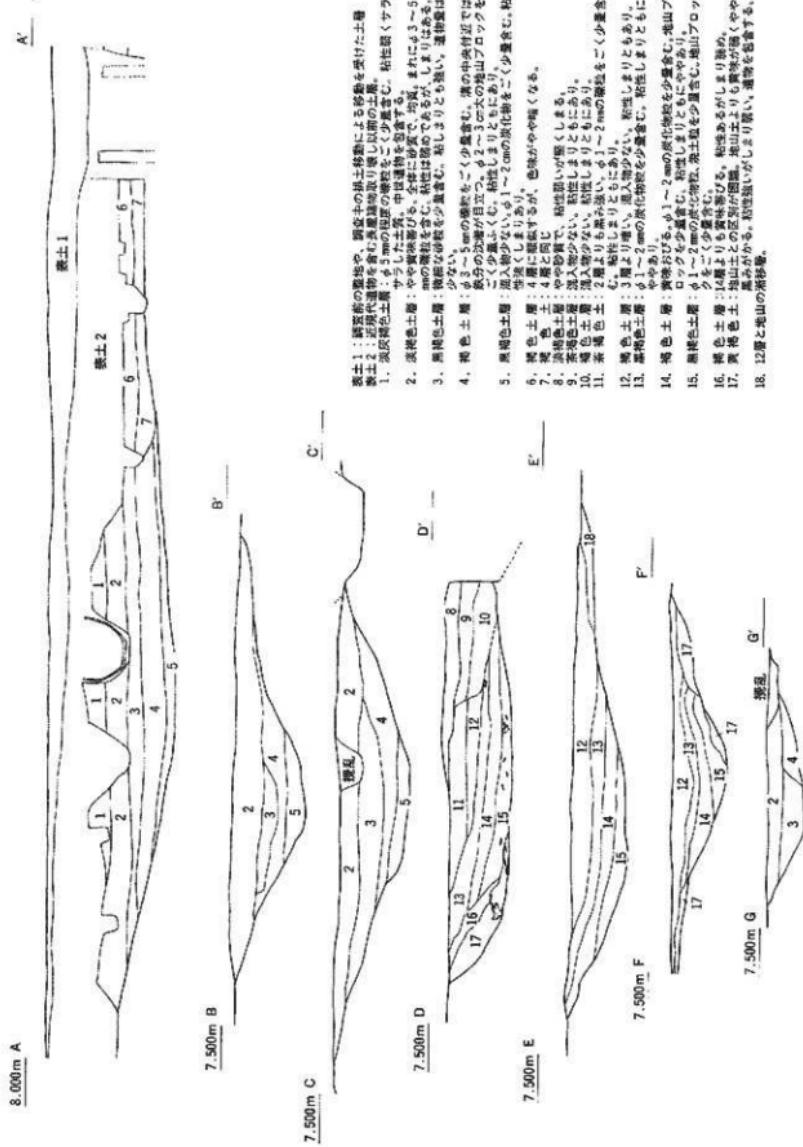
##### 1. 古墳時代以前の遺構と遺物

###### 方形周溝墓1（第4～7図、写真1～25）

方形周溝墓1は西半区の東側に位置する。西半区は表上面から約20cmほどで地山面に達するが、その地山上面において溝として検出した。北西隅で浅くなるため、西側をSD01、北側及び東側をSD05として検出した。南側部分は調査区外であり、北西部、SD05の端を上下水管やガス管の埋設溝によって擾乱されている。今回の調査で周溝墓全体の約1/2を調査したことになると考えられるが、北東隅コーナー付近が残存しており、隅丸方形のプランであることが判断される。北西隅のコーナー付近は、西辺にあたるSD01部分に対して、北辺にあたるSD05の溝が被さるように長くのび、周溝墓の北辺が西側に大きくのびるかたちとなる。北辺と西辺の接合部分は直接接合していないが、上層図D断面のすぐ西あたりでは、多少盛り上がりが認められることから、北西部の溝の張り出した箇所は隣接する別の周溝墓の溝との共有部分である可能性も考えられる。しかしながら前述の通り擾乱によって土の残りが悪く、切り合いの有無等は確認できなかった。西側の南半分を後述の方形周溝墓2と共に共有している。遺構の規模は残存部の東西方向で、溝の内法で12.0m、外法は18.4mである。溝の深さは地山上面から40cm強を測る。墳丘部分は完



第4図 方形周溝墓1および方形周溝墓2平面図 (S=1:200)



第5図 方形周溝墓1および方形周溝墓2土層図 ( $\Sigma = 1 : 40$ )

全に削平されており、主体部も検出することはできなかった。溝の形状はなだらかに立ち上がるものであるが、地山と漸移的に変化していく部分も多く、溝の底部の確認は比較的困難であった。東側の溝では部分的に掘り方が2段になっているところがあるが、「上層などの観察から掘り込みの時期の違いとは認められず、小テラス状の平場が存在する可能性があるが、溝の肩の部分が何らかの理由で削れたことも考えられ、断定はできない。想定される土軸は東に25度ほどふれる。

溝の覆土は大きく分けると4層に分層が可能であった。溝の最上面は砂質がかった褐色土で、中世遺物を含む土層である(第5図2層、12層)。その下位には黒みの強い褐色土が広がる(第5図3層、13層)。この面にも中世遺物が多い。さらにその下位には比較的遺物の少ない褐色土が広がっている(第5図4層、14層)、最下層、地山直上には黒褐色土が広がっている。この黒褐色土中から弥生時代末の土器片がまとまって出土している。この付近は比較的水分が集まつてくる地質のようで、周溝墓の南東隅ではなかなか水たまりが消えなかつたが、そうした状況を反映するように、下位の2層は粘性が高くしめつた感じの土壤であった。このためか最下層出土の遺物はかなりの量になるが、遺存状況はおしなべて悪いものであった。最下層の黒褐色土の下は基本的には地山となるが、部分的に地山が少し汚れた程度の土色で、地山との判別が非常に困難な土層が認められる(第5図17層)。地山上と比較すると柔らかく、多少黒みが強いこと、また弥生時代の遺物を包含することから地山と区別は可能であるが、漸移層との区別は困難である。最下層の黒褐色土とこの地山によく似た黄褐色土では、前後関係を前後関係を考えた場合、黄褐色土→黒褐色土の順が想定されるが、包含される遺物にそれほど時期差を認めることができないため、黄褐色土の堆積と黒褐色土の堆積時期にはそれほど聞きがないものと判断される。

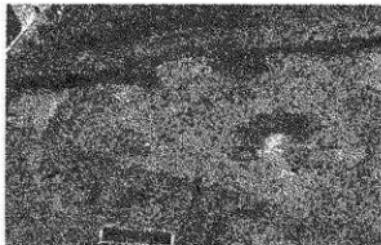


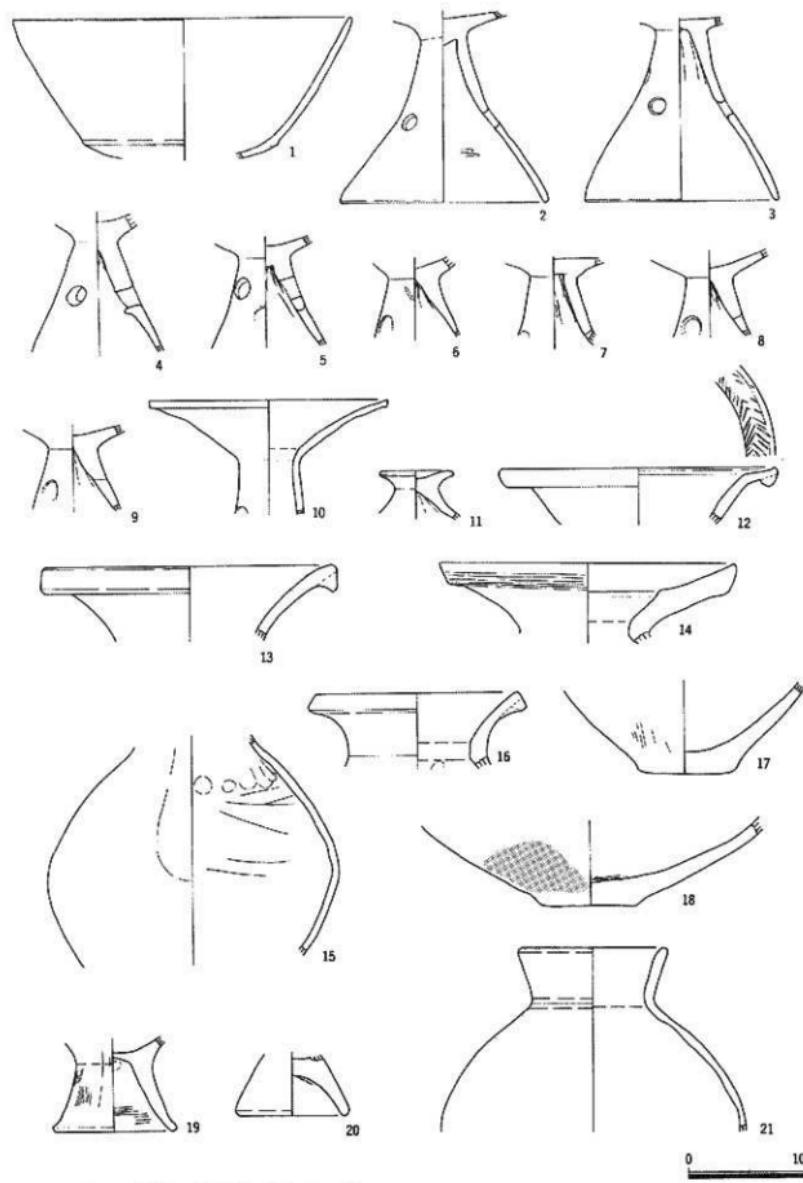
写真1



写真2



写真3 方形周溝墓1から高座結御子神社を望む



第6圖 方形周溝墓1出土遺物 ( $S=1:4$ )

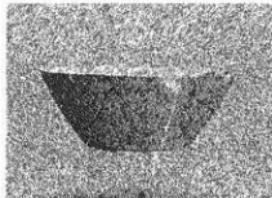


写真4

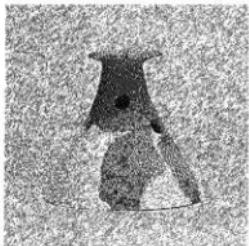


写真5

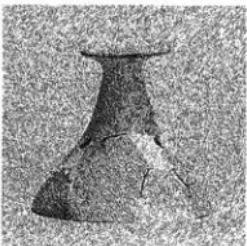


写真6



写真7

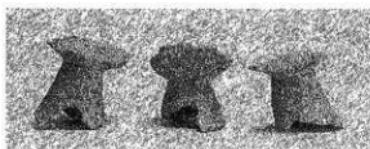


写真8

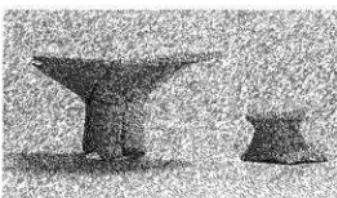


写真9

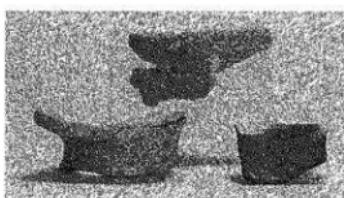


写真10



写真11

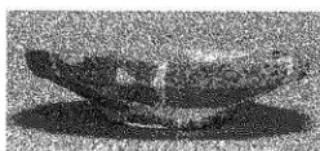


写真12



写真13

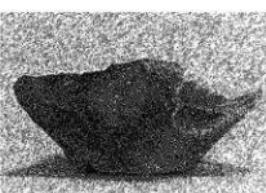


写真14

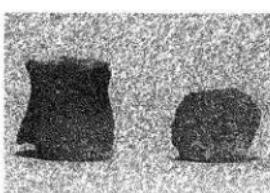


写真15

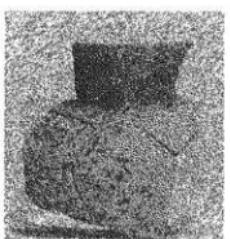


写真16

方形周溝墓1に伴うと考えられる遺物は、溝の最下層の黒褐色土と、地山との区別がつきにくい黄褐色土からの出土土器であると考えられる。溝からは高环や壺などを中心にかなりの量が出土しているが、前述の通り、埋没環境の影響から摩耗が進み接合作業も困難であった。第6図1~9は高环である。

1は唯一接合作業を進め、復元できた環部である。口径は27.6cmほどを測り、かなり器高もある。器面の荒れのため、調整の観察は困難であるが、磨き調整が施されているものと考えられる。高环脚部も数が多いがやはり器面の荒れが進んでいる。バレス壺について描文等の残りは良くない。10、11は器台である。12~21は蓋及び壺である。15、17、21は断面D付近の地山と区別のしづらい黄褐色土中から出土したものである。

方形周溝墓1は、比較的大規模な方形周溝墓といえる。後述するが、方形周溝墓2にきられている。溝の底部の遺物は、墳丘の内側の傾斜にかけて地山に後するようにまとまって出土しており、周溝墓構築直後の遺物と考えられる。バレススタイルの壺や高环が卓越する状況からも、墳丘に伴った遺物であることが理解されよう。遺物の時期は矢山段階、村木編年の弥生時代後期後半2期にあたると考えられるため、周溝墓の構築もその前後の時期に当たるものと考えられる。特に遺物の集中は方形周溝墓の北辺中央付近にまとまっており、何らかの墓前祭祀が行われている可能性がある。ただし現状の出土状態が遺物の原位置を表したものとは考えがたいことから、具体的な行為を復元することはできない。

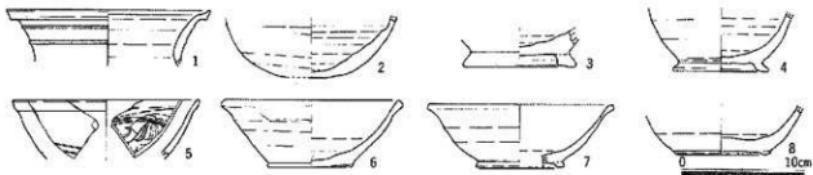
方形周溝墓とは直接関係はないものの、方形周溝墓1の溝埋土上層からは中世を中心とした遺物が出土している。主なものを第7図に示した。1、2は須恵器、3、4は灰釉陶器である。3は遺存状況は良くない。白く粉をふいたような状況である。4は遺存状況は良いが、焼成が悪いためか、釉の発色が良くない。5は龍泉窯系の青磁碗で、今回の調査で唯一の舶載磁器である。6~8は山茶碗である。山茶碗は、溝の上面の2層からまとめて出土しており、量的に多いのは南部系のものである。藤澤編年における6型式に中心があるようである。

文献1 村木 誠 1999 「名古屋市域における弥生時代後期土器と環濠集落の動向」名古屋市文化財調査報告40『瑞穂文化財調査報告書30 三王山遺跡(第1~5次)』名古屋市教育委員会

文献2 藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯址群1」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要1』



写真17 方形周溝墓1 遺物出土状況



第7図 方形周溝墓1、古代以降の遺物 ( $S=1:4$ )

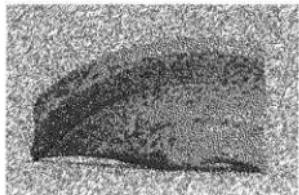


写真18

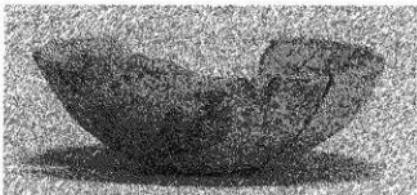


写真19

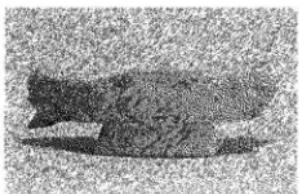


写真20

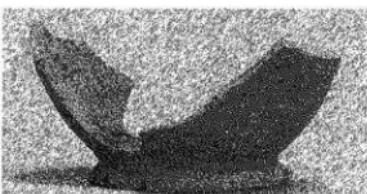


写真21

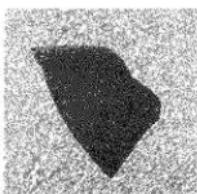


写真22

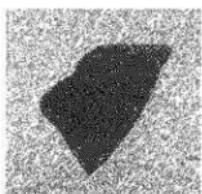


写真23

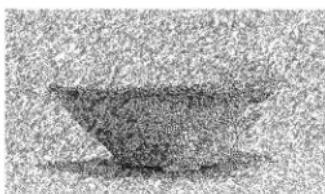


写真24

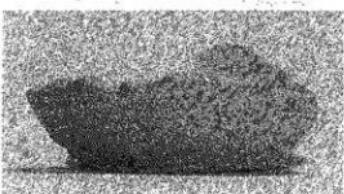
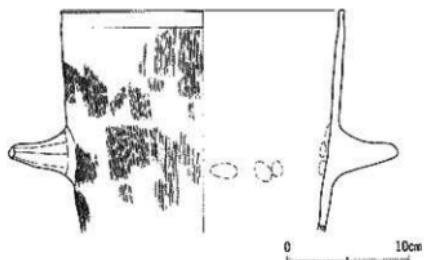


写真25

### 方形周溝墓2（第4・5・8図、写真26・27）

方形周溝墓2は方形周溝墓1の南西側に位置する。方形周溝墓1同様、地面上で検出した。この付近は長屋建物の取り壊しの際にゴミ穴として埋められた擾乱土坑がかなりの数認められることから、はじめSD02、SD03、SD04に分けて検出したが、掘削を進める中で同一の遺構として確認した。平均幅150cmほどで、方形周溝墓1と比較してやや小振りな方形周溝墓である。遺構の規模は溝の内法で約7m、外法で9m近くを測る。東側の溝は前述の通り方形周溝墓1と共有する。主軸についても同様に方形周溝墓1と並行している。方形周溝墓1との時期的な関係は方形周溝墓1→方形周溝墓2の順を調査区南壁の観察から判断した（第5図 A断面）。擾乱の多さから、方形周溝墓2の覆土はあまり残りが良い状況とはいえないかったが方形周溝墓1同様、中間の黒褐色土を挟んで、上下に分層が可能であった。ただし方形周溝墓1で認められた最下層の5層（第5図）は方形周溝墓2には認められなかった。方形周溝墓1では5層にまとまつた遺物の集中がみられたが、方形周溝墓2では5層の黒褐色土が認められないとともに、溝の最下層に遺物の集中は認められなかった。溝の覆土が方形周溝墓1と共に土質であることから、方形周溝墓1の溝が掘削された後、それほど時間をおく（5層堆積後）に構築された遺構であると考えられる。上部は削平されており、主体部などの施設は確認できなかった。

遺物についてみると、遺構の構築時期に近いと判断される遺物は認められなかった。先述のように5層にあたる土層が存在せず、上面に山茶碗などの中世遺物が散在するのみである。第8図に示したのは須恵器の瓶である。この遺物は方形周溝墓2の北辺の溝中より出土した。破片の大多数は方形周溝墓の溝を切る擾乱の中より出土した。擾乱内でありながらかなりの破片数が残っており、また接合も可能であったため、擾乱内の遺物も本来溝覆土の遺物と考えて良いだろう。7~8世紀代の須恵器とぞえられ、薄手の作りで叩き痕が明瞭である。



第8図 方形周溝墓2出土遺物（S=1:4）

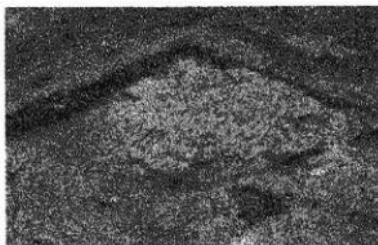


写真26 方形周溝墓2

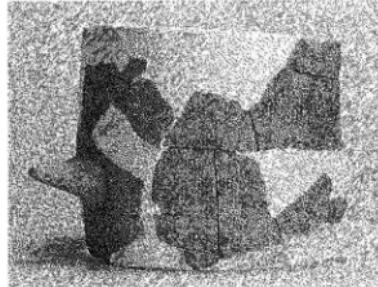
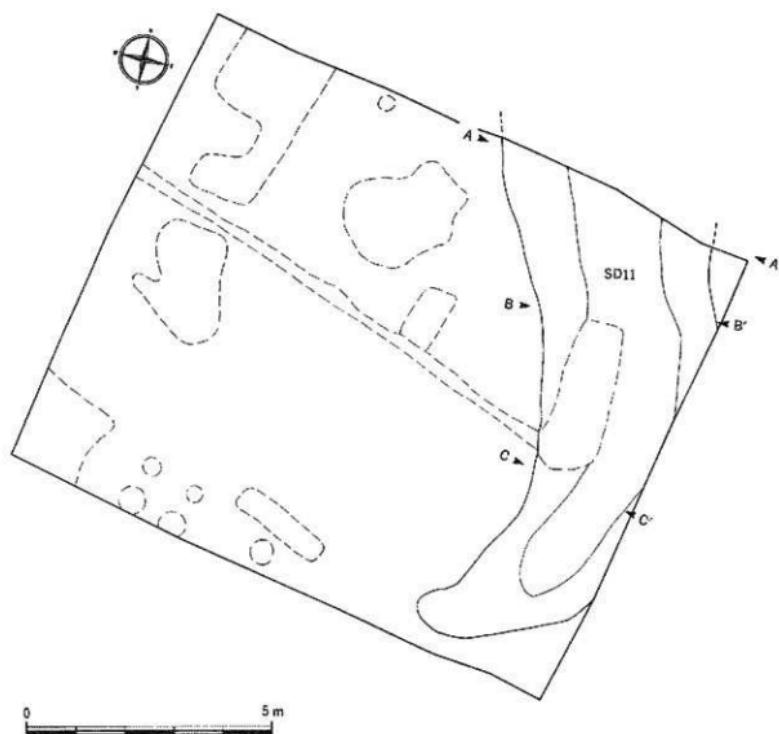


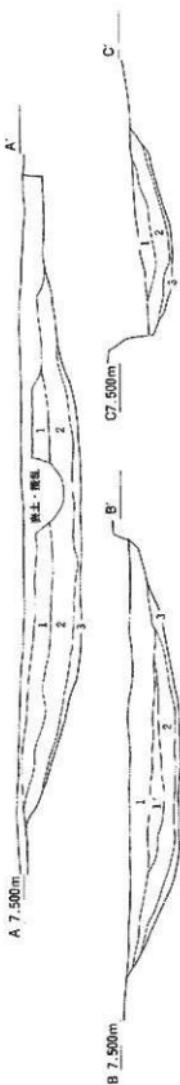
写真27 方形周溝墓2出土遺物

### 古墳1 (第9~14図、写真28・35)

古墳1は追加区の東側に位置し、浅い溝として確認した。調査時の遺構名はSD11である。溝の南東部分を検出しておらず、北側は調査区外であり、溝自体が浅くなり、確認はできないがおそらく南側も調査区外にのびることが想像される。緩やかにカーブする溝で、墳丘の形態については断定できない。ただし溝の底面から須恵器がまとまって出土しており、古墳であることは間違いないといえる。溝の規模については最大幅で360cmほどを測り、深いところで地山面から50cmほど掘り込んでいるが、古墳全体の規模は判断できない。溝より西側が墳丘であることは溝の曲がり具合から判断できるが、調査区の西半分から溝が確認できていないことから、墳丘部はそれよりも幅があることが考えられる。主体部やその他の施設については、確認できていない。南側については溝が浅くなり、地山面まで掘り込んでいないが、この部分が古墳に伴う施設であるのかの判断はつかなかった。



第9図 古墳1平面図 ( $S=1:100$ )



第10図 古墳1土層図 ( $S=1:40$ )

1. 棕色土層：約1mm前後の微細な少量化物を含む褐色土層。やや少量化があるが、粘土はあまりにややあり、乾燥と堅くしまる。
1. 淡黄褐色土層：油山土と称する、油山に近い外の部分は1層と認むわらな。
2. 黑褐色土層：約1mm前後の微細な少量化物を含む褐色土層。
3. 淡黄褐色土層：油山に近い土質であるが、繊維などの混入少なく、粘土層。

出土遺物の時期は大きく二つに分かれる。古墳の構築に比較的近い時期の遺物と中世の遺物である。まず古墳に伴う遺物(第11図、第14図5)をみてみることにする。古墳時代の遺物はほとんどが溝の最下層、底面に散らばった状況で出土している。1から5は全て須恵器である。第11図1、3、4は短頸壺、2は長頸瓶である。第14図の5は胴下半であり、器種は不明である。いずれの遺物も作りや焼成の雰囲気はよく似ており比較的近い時期に製作されたものと考えられる。これらの器種から詳しい時期比定について判断することはできないが、おそらくII-101~H-17号窯式、7世紀代の前半から中葉に位置づけられる遺物であろう。

遺物の出土状況を第12図~14図に示した。出土位置の記録は古墳1(SD11)の遺物についてのみ行った。ただし溝の中でも上層の遺物はやや大きめの遺物のみを取り上げ、作業の進行上、北よりもセクションベルトよりも南側の溝中の遺物のみであり、溝出土の遺物全てを記録したわけではない。記録は任意の基準線を設定し、その基準線からの位置をコンベックスで計測し、オートレベルで水準高を計測した。図に従いて遺物の出土状況についてみて行くこととする。

第12図は出土地点を記録した遺物全点を時期別に表したものである。断面Aと断面Bのエレベーション図に、平面図に示した長方形の範囲の遺物出土レベルを反映させてある。図を見ると古墳時代の遺物●が造構の底面に沿うように並んでいることがわかる。山茶碗をはじめ中世遺物は古墳時代造物と比較して出土レベルが20~30cmほど高く、中世段階での溝の埋没レベルを知る上で示唆的である。中世段階では十層図の2層付近まで溝が埋まっていたことがわかる。A断面をみると伊勢型鏡の集中が認められる。小破片となってしまい図示はできなかったが、明らかに同一個体の破

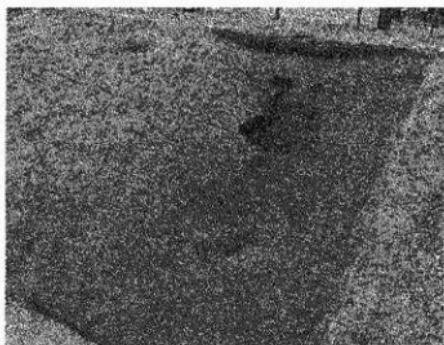


写真28 古墳1



写真29 作業風景

片が集中して出土している。この遺物の集中も山茶碗等その他の中世遺物と同一のレベルでの出土である。集中し、散らばらない状況から、完形に近い状況で古墳の溝に廃棄、または造棄したものであると考えられる。一方で下層には古墳時代遺物がきれいにまとまっており、その間に遺物の少ない層(2層下半か)が堆積している。古墳時代以降、生活域から離れた環境にあったことが考えられる。伊勢型鍋の反対側(東側)には山茶碗片がまとめて出土している。これらの遺物は上層から下層までまんべんなく散った状況が認められる。また直接破片同士の接合関係は認められなかった。これは伊勢型鍋の状況とは明らかに異なっている。おそらく調査時に検出できなかった古墳の溝を掘り込む土坑が存在した可能性が指摘できる。破片の広がりから言って、直徑1m前後の遺構が想定され、時期も中世後期の所産と考えられる。第13図、14図には接合関係の認められた遺物について示した。第12図に準じて図示してあるが、直接の接合関係にある遺物同士を直線で結んである。煩雑となるため、エレベーション図については一部をのぞいて接合線を結んでいない。古墳の構築時に近い段階の遺物と考えられる須恵器については、溝の底面近くにまとまって出土している。第13図に示した1、3の個体は、この付近は底面が広いこともあり、やや広がりを持つて分布し溝の軸に対して横方向の接合が認められる。一方、第14図の2、4については溝が狭いためかかなり細長い分布となっている。これらの須恵器は古墳の溝に密着した状況で出土しているが、接合線をみればわかるように、バラバラの小破片のかたちで出土し、また隣り合った破片同士よりもやや離れた破片同士が良く接合している。第14図の2は遺物の範囲の対局にある遺物同士が良く接合しており、その距離は1m以上ある。こうした状況は、溝の底面に置かれた状況とは考えにくい。おそらく破片化しながら溝の底に流れ落ちたものであろう。ただし一つ一つの遺物のブロックはあまり重なり合わないことから、墳丘の頂点と言うよりは、墳丘の裾、溝の肩にあたる部分にあった遺物が溝に転落したものと考えられる。破片であるが、接合作業を経て完形に近く復元できたことからも、設置位置があまり離れた場所でないことは判断される。墳丘裾に須恵器を並べるような祭祀が想定されよう。こうした状況から、古墳の構築時期も、須恵器の時代に近い、7世紀代の半ばまでの時期とする事ができよう。また遺物接合線が並ぶ方向が直線的であり、南よりの2点と北よりの2点が角度を違えることから、墳丘の形態も方墳である可能性が高いといえよう。

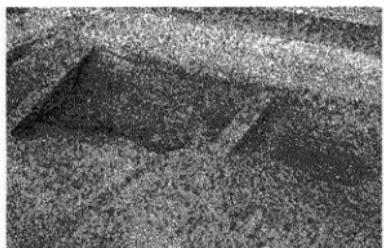
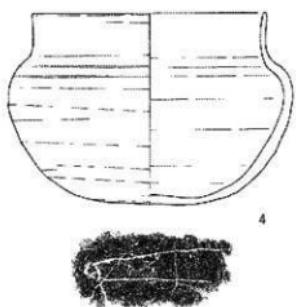
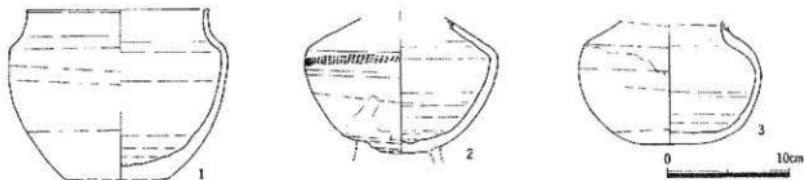


写真30 古墳1 遺物出土状況 1



写真31 遺物出土状況 2



第11図 古墳1出土遺物 (S=1:4)



写真32



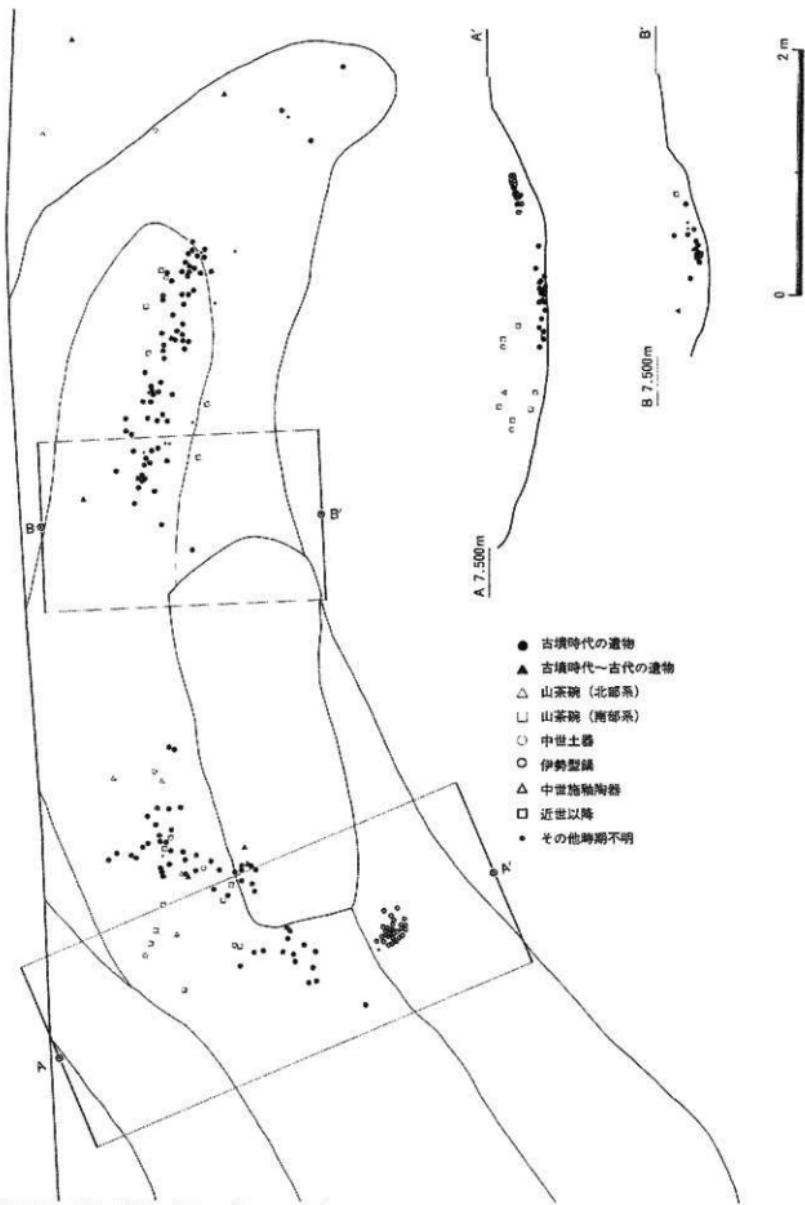
写真33



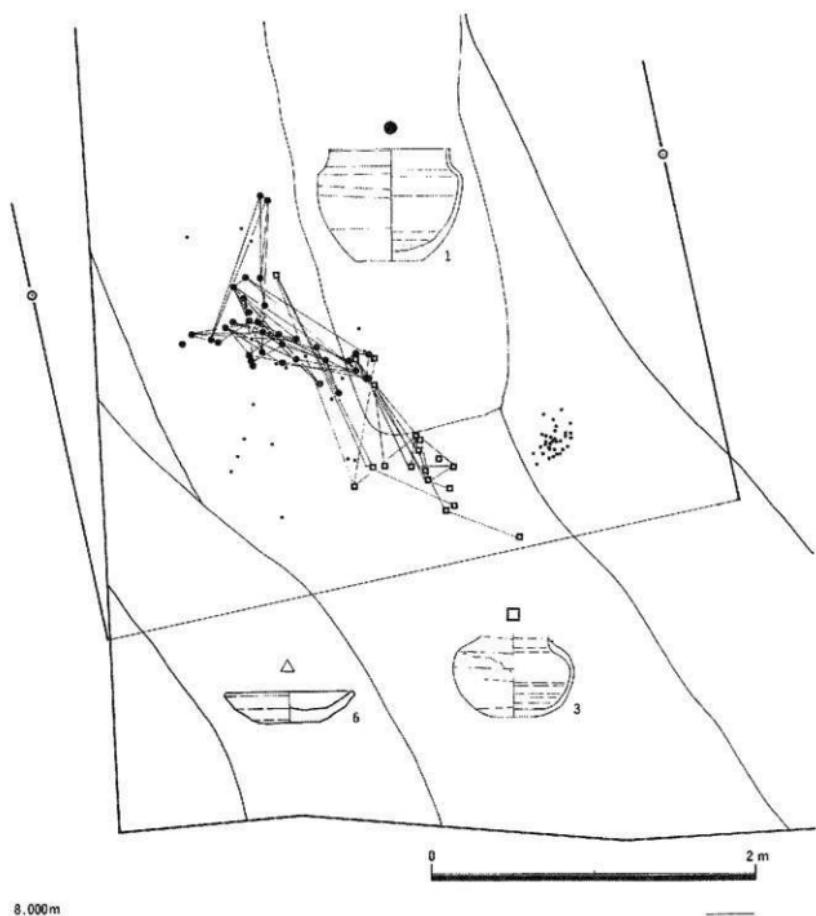
写真34



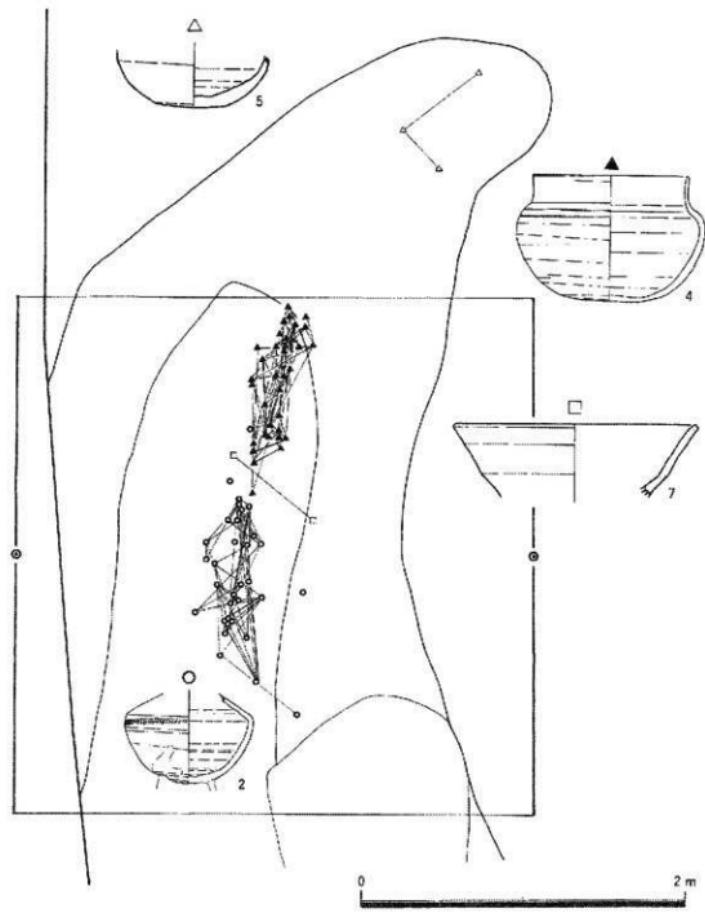
写真35



第12図 古墳I 遺物分布図1 ( $S=1:40$ )



第13圖 古墳1遺物分布図2 ( $S = 1 : 30$ )



第14図 古墳1 遺物分布図3 ( $\boxdot = 1:30$ )

### SX01（第2図、写真36）

SX01は東半区の北西壁際に位置する遺構で、同一個体と考えられる壺形土器を、胴部の中程で割り、隣り合わせに埋設した遺構である。写真36にあるように、胴部上半分は逆位に、胴下半分は正位になって、南北に並ぶように埋設されている。検出はほぼ地山上面であるが、掘り方の検出は非常に困難であった。覆土にあたる土自体、黄褐色土で地山土との区別が非常に困難であった。検出時にも地山の中から弥生土器が顕を出した様な状況であった。地山土と覆土の違いは、覆土の方がやや黒みが強く柔らかいと言う点のみである。胴上半部は調査区壁に一部がかかるように位置しているが、遺構の立ち上がりは確認できなかった。

埋設土器（第14図1・2）は弥生時代後期の壺であるが、方形周溝墓1出土遺物同様、地山土に接するような環境下におかれている期間が長かったからであろうか、器面の荒れがひどく、調整等の観察は困難である。胴部のふくらみのピークがかなり下方にあり、すっとぼまる。頸部から口縁部にかけてはやや開き気味に広がっている。おそらく欠山式期の壺であると考えられるが、詳細な時期比定は困難である。第14図の1・2とも同一個体であると考えられるが、直接接合関係は認められなかった。ほぼ同一の輪積みにあたる位置が残っているが、埋設位置が1が逆位、2が正位であったため、検出作業時等に土器を損なってしまった可能性がある。ただし欠損部分のすべてが発掘作業中に失われたとは考えにくく、埋設時にすでに失われていた可能性もある。

弥生時代以前の遺構は、方形周溝墓1・2の2基をのぞくとこのSX01のみである。時期的にも方形周溝墓1の溝底面出土の土器と近いものである可能性が高い。SX01の遺構の性格は不明であるが、方形周溝墓1の溝東辺の延長線上にSX01が位置するなど、両者の関係の中でその性格を考えてゆく必要があるといえよう。

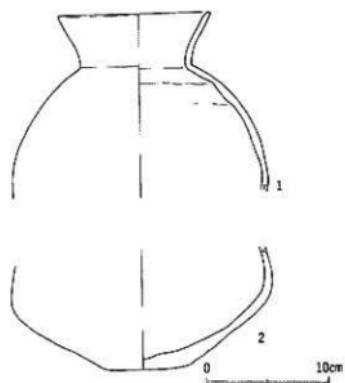


写真36 SX01

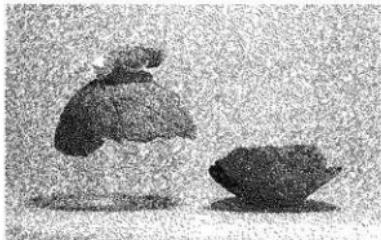


写真37 SX01出土遺物

第16図 SX01出土遺物 (S=1:4)

## 古代～近世の遺構と遺物

古墳時代以降の遺構はそれほど立たない。遺構について言えば中世に掘削されたと考えられる大溝が2本、調査区の東半区で検出されている。平行して近世溝も一部で認められている。

SD06（第2図、写真38）

SD06は東半区の南東から北西にかけてのびる溝である。溝の方向はほぼまっすぐにのび、幅は調査区の中に収まらないためはっきりとわからないが、少なくとも6m以上を測る。ほぼ東南東から西北西の方向にのびた溝である。地山の上面からは20cmほど掘り込んでおり、調査区の東壁の土層（第3図）の観察から、SD07に切られていることが判断される。覆土の中層に地山由来の黄褐色土が多い土層があり、SD07を掘削する際に、SD06が埋められた可能性も考えられる。

遺物は一部古代の須恵器等が認められるものの、大部分は中世の遺物であった（第16図、写真39～41）。なお中世遺物の年代観については瀬戸市の藤澤良祐氏にご教示いただいた。1は須恵器の高环脚部、2は



写真38 SD06及びSD07

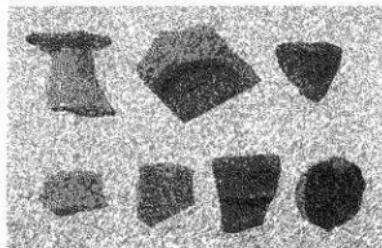


写真39

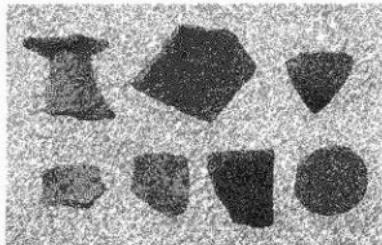
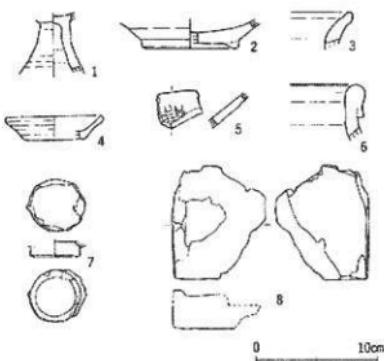


写真40



第16図 SD06出土遺物 ( $S=1:4$ )



写真41

山茶碗第3型式の碗、3は常滑の大甕の口縁部。4は山茶碗第6型式の碗である。5は古瀬戸の鉢皿で古瀬戸後期のIII～IV段階である。6も常滑の大甕の口縁部である。7は福建省産の天目陶の底部と考えられ、灰色色の胎土で重量感がある。9に付いては瓦質であるかやや焼成が悪い。端部が多少張り出しているが、全体の器形は判断が付かない。おそらく中世に帰属する遺物であろうと思われるが、性格は不明である。

#### SD07 (第2図、写真38)

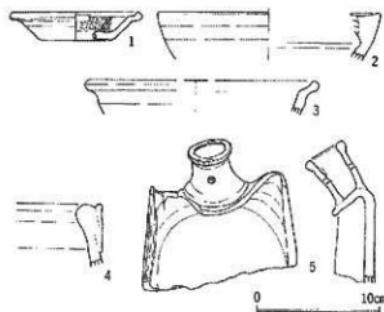
SD07はSD06の南側を平行するようにのびる溝である。南側を近世溝や近代の擾乱等によって壊されており、正確な溝の幅等については判断できない。SD06との間に地山が残っており、部分的にSK10などに切られるものの、幅50cmほどの畦状になっている。先述のとおりSD06を切り、また掘削土をSD06の埋め立てに用いていることも考えられることから、性格としてはSD06を掘りおしたものとも考えられよう。SD07築土には地山土が認められないことや、SD06とSD07がきれいに平行し、重複しないことからもうした状況が理解される。

遺物については第17図、写真42～44に示した。1は古瀬戸の折線小皿である。古瀬戸前期IV段階の製品である。2は花瓶で大甕の1段階の製品、3は折線鉢の口縁部で、古瀬戸中期II段階の製品である。4は常滑の大甕の口縁で16世紀代に下るものと考えられる。5はSD07として取り上げた遺物であるが、上面の近世の道路状構造の面とも近いため、混入の可能性が高い。近世の十能である。

SD06・07についても古瀬戸製品は多いもの人

窯製品は少ない。15世紀代までには埋没が進んでいたことが理解される。

その他にも中世遺構と考えられるものとして、SK06・07・10などが挙げられる。いずれも山茶碗の小片等を出土しており中世段階に掘り込まれた土坑の可能性が高いと考えられるが、その性格などを知る手がかりは得られなかった。



第17図 SD07付近出土遺物 (S=1:4)

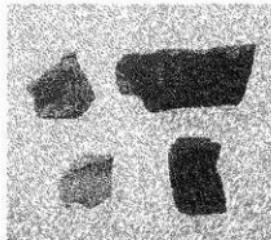


写真42

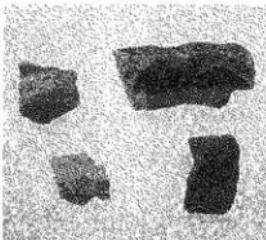


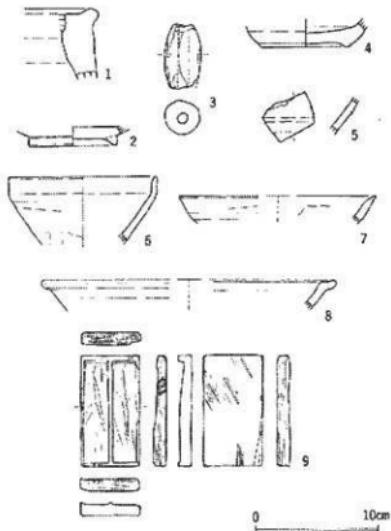
写真43



写真44

### その他の遺物

そのほか各調査区出土の土器を第18図に示した。1は近世後期常滑窯の大甕の口縁である。東半区の埋甕の口縁にあたるものと考えられる。2は山茶碗、3は瓦質の土鉢である。4は山茶碗、5・6は天日茶碗で5が古瀬戸後期I～II段階、6が古瀬戸後期III段階にあたる製品である。7は古瀬戸後期II段階の縁袖小皿である。8は古瀬戸後期III段階の製品で、東半区の包含層からの出土である。9は小振りな甕で、黒味が強く堅い石材でつくられている。使用後に砥石として転用されており、刃物を研いだ痕跡が残っている。中近世遺物はそのほとんどが古瀬戸段階以前のものである。大窯跡から近世については造形も少なく、遺物も多くない。



第18図 その他の古代～近世の遺物(S=1:4)

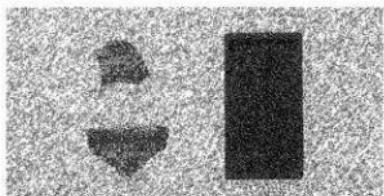


写真47

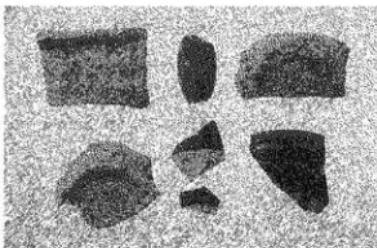


写真45

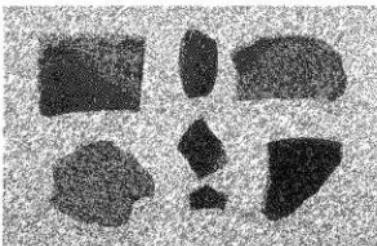


写真46

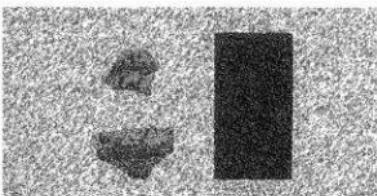


写真48

## 近・現代の生活痕跡

中世の生活痕跡と比較して近世の生活痕跡は少ない。再び調査区付近で生活痕跡が認められるのは近代になってからである。先述の通り調査区付近は長屋建物が建っていたが、その建物が取り壊されるまでは、SD06-07とはば同じ軸で長屋境内に道路があり、道路には近代以降のライフライン（ガス管、水道管、下水管など）が埋設されていた。長屋に伴う造構としてはピット類、防空壕、水溜、便所甕などがあり、表土直下から確認できた。全て取り上げることは紙数の関係でできないが、特徴的なものを取り上げる。

土人形ピット：調査の2日目、西半区の表土の除去作業中に重機の排土に土人形型がまとまってあることに気がつき、確認したところ、地山面にわずかに掘り込む深さのピットを確認した。ほぼ表土直下から地山までの深さに収まり、確認できたプランも50cm四方ほどの広がりであった。あまり大きな掘り込みを持たず、廐棄のためのゴミ穴を掘り、そこに土人形を埋めたようである。わずかに陶磁器も認められるが、ほとんどが土人形型である。製品の出土はみられなかった。土人形型は長さ10cm～15cm大のものが多く、製品にすると10cmを越えるものが少なくないやや大振りのものである。内面は精緻に加工されておりすべすべとしているが、外側は粘土を撫でた痕跡がそのまま残る。大部分の外側にはヘラ書きがこっており、「二」「治」の文字もしくは二つの文字に「やま」を表す記号が伴ったものである。ヘラ書きはこのほかにも製作者の名前などを書き込んだものもある（第19図6、写真55）。同様の情報を逆に製品に残るように加工してある型もある（写真56）。年代をヘラ書きしたものもあるが、いずれも明治32年の銘がある。胎土はクリーム色をしており、精緻な粘土を用いており、混入物も少ない。土人形型の製作は、粘土型の原型を作り、その原型に粘土を貼り付けて作るが、製品の土人形に直接貼り付けてコピーする事も一般的であったようである。今回の出土資料は人形の細部まで表現がされており、直接原型から型を起こしたものと考えられる。出土した土人形型は全部で9.7kgの量にのぼる。ほとんどの土人形型は破片になっていたが、接着作業によって器形が復元できたものを中心に図示した（第19図、写真49～62）。

1は「饅頭食い」であろうか。和服姿の背面の型である。2はモチーフの判断が付かないが、俵を肩に担いだ人物の背面である。3は「福助」の前面である。4、5はいずれも「大神」の型で4が背面、5が前面である。細かな表現まで成されており、5の前面には「梅鉢」の文様がある。7～9は鳩笛で、上面と下面に分けて作られており、下面には8のタイプと9のタイプの両者がある。9には先述の通り、製品に銘が入るように内面に突起状に文字が施されており、「……三十二年……三月……治太郎……造」と記されている。10は鯛、11は蝶、12は鶏をモチーフとしている。13は猫であろうか。14は蒸気船で、京都伏見人形などに特徴的なモチーフである。

防空壕：西半区や追加区については長屋の床下にあたり、かなりの数の防空壕が認められた。幅50cmほどのスロープ状の出入り口を持つもので、奥は多少広がるもの、深さは50cm前後とそれほど深くはない。長屋一戸につき一基築いたようで、スロープは床下を抜けて路地部分にのびるよう造られていた。

そのほか長屋時代のゴミ穴であると思われる擾乱土坑から瓶類がまとめて完形で出土している（第20図）。ソースやラムネ瓶に混じって、薬品瓶などが出土している。どのような理由でこうした瓶が完形のまま一括廐棄されたのかは不明である。



第19図 土人形型 (S=1:4)

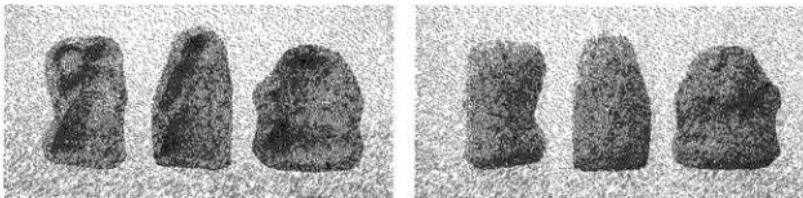


写真49 写真50

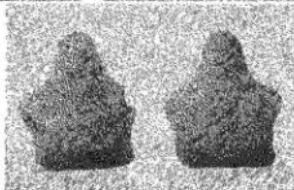
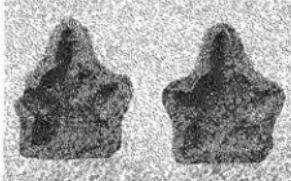


写真51 写真52

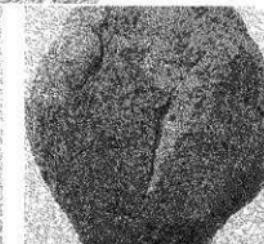
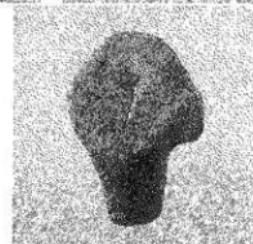


写真53 写真54 写真55

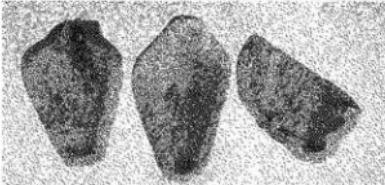


写真56



写真58



写真57

写真59

写真60



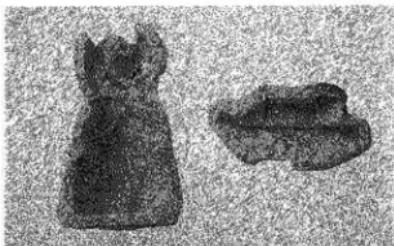


写真61

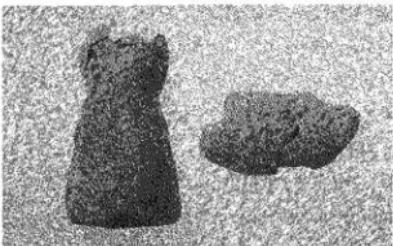
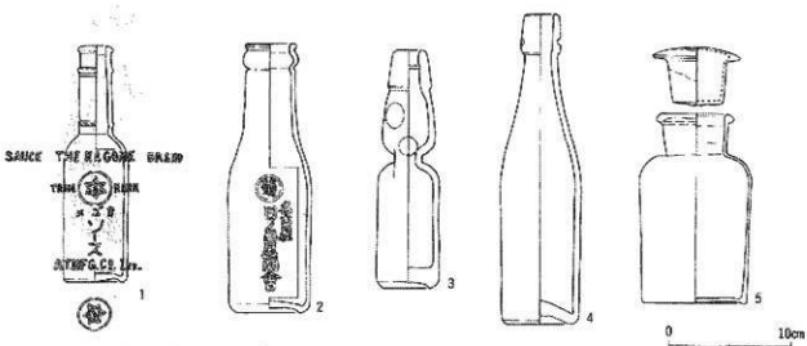


写真62



第20図 出土瓶類 (S=1:4)



写真63 出土瓶類

況は確認できなかった。古墳は高座結御子神社付近から高藏遺跡周辺にまとまっているが(第21図参照)今回の調査地点はやや西よりにあたり、古墳群の中では中央に近い位置を占める。調査付近地点よりも東側には古墳がくすくないように感じられるが、調査の少ない地点でもあり、今後の調査成果を待っての評価が必要である。古墳1は造存状況が余り良いものではなかったが、遺物の出土状況から古墳の埴丘祭祀の可能性を指摘することができた。

中世以降の遺構は大溝に代表されるが、方形周溝墓や古墳の軸と並行して溝が走ることは興味深い。中

## 第5節 小結

今回の調査では、2基の方形周溝墓と1基の古墳を検出した。方形周溝墓は造存状況はそれほど良好ではなく、主体部等は検出できなかった。方形周溝墓は高藏遺跡の西側に集中しているが、五木松町の荒木集成館調査地点でも集合した状況で方形周溝墓が検出されている。今回の調査で検出した二基の周溝墓も高藏遺跡の周溝墓群の一角を占めるものであろう。ただし二基が連結した状況で検出されているが、その周りに周溝墓が巡る状況は確認できなかった。

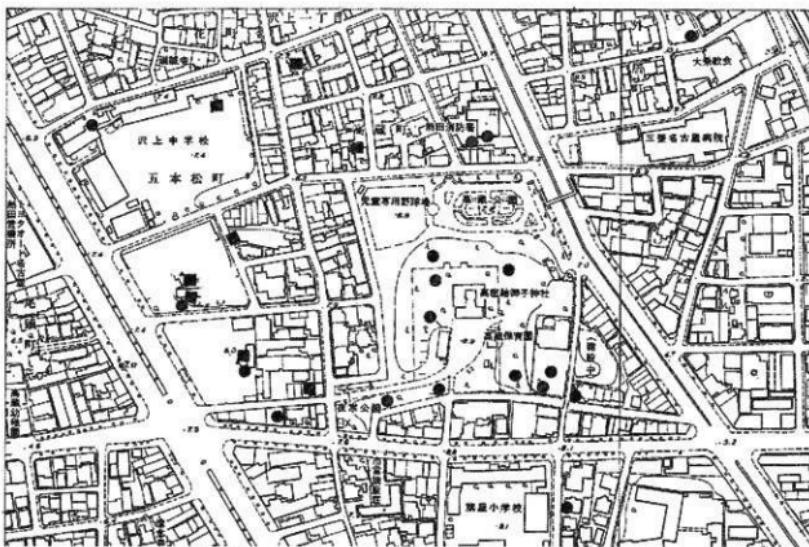
世で12世紀から15世紀にかけての段階に盛んに土地利用が認められる。大窓の段階以降には遺物の出土自体が少ない。古墳や方形周溝墓の溝はほとんどが、中世まで溝として残っていることが土層や遺物の出土状況からわかる。中世の中頃まで、高蔵造跡周辺の熱田台地上の景観に、方形周溝墓や古墳の溝が口を開けた状態であったことがわかる。中世末から近世にかけての時期には、遺構も遺物も少ない。わずかに近世の常滑窯の埋設や、中世溝の脇にある道路跡と思われる杭列などが認められたのみである。近代以降の生活痕跡は長屋に関連したものと考えられる。土人形型のまとまった出土は類例の少ないものといえよう。今回の調査では包含層が薄く、各時代の遺構が同じような面で検出されたが、今後、各時期の遺構を熱田台地の景観の中に位置づけて行く作業を続けて行かなくてはならない。



写真64 西半区



写真65 現地説明会



第21図 調査地付近の古墳・塚

## 第II章 高感遺跡第32次

### 第1節 調査の経過

第32次調査は、外土居町110番地で個人住宅の建設に伴い実施した。調査は、敷地全体約50mを調査対象とし、掛土置き場を確保する都合から3間に分けて行った。東側から西側にかけて第1区～第3区と呼称した。

第1区は、2月19日から始め3月1日まで行った。調査前から貝殻が散布していたが、一部に貝層が残り、遺構も検出された。第2区は、3月1日から3月5日まで、第3区は3月5日から3月16日まで行った。第2区、第3区は大半が擾乱を受けていた。

また、当地は、1953年～54年に田中稔氏が調査したF地点に該当する所と思われた。この時の調査は報告されておらず、調査位置等が明らかになっていたいなかった。その頃は戦災復興事業で区画整理が行われていたが、道路の拡張や家屋の移転、取り壊しは断続的に実施されており、調査時の建物位置ははっきりしない(住宅都市局事業監理課の話)。そのため土地所有者からの聞き取りと、名古屋市博物館に所蔵されている田中コレクションの図面類から調査地点の位置の比定を行った。発掘調査の結果と合わせてみると、F地点は当敷地内でも東端隣地境付近の可能性が高いことが推定されたが、明確な調査トレンチの痕跡を見出すまでには至らなかった。しかし、遺物の整理作業中に田中コレクション中の弥生土器片と今回出土した弥生土器片が接合したことは、近い位置であることを示している。

尾張地方の弥生土器編年の中では、弥生中期の指標となる外土居式は、南へ約60mの位置にあたるE地点の出土遺物から田中氏が設定したものであったが、F地点の調査資料が補強するものといわれていた。そのため、F地点の調査資料についても合わせて報告することにした。

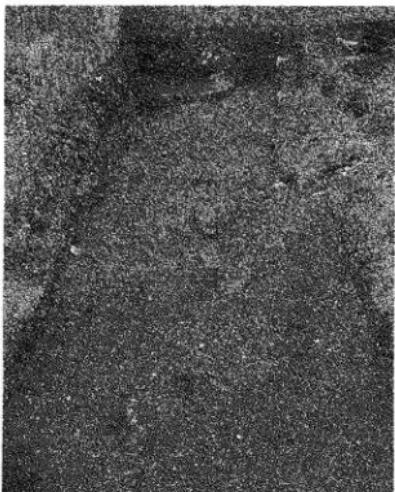


写真1 調査区2区（南から）



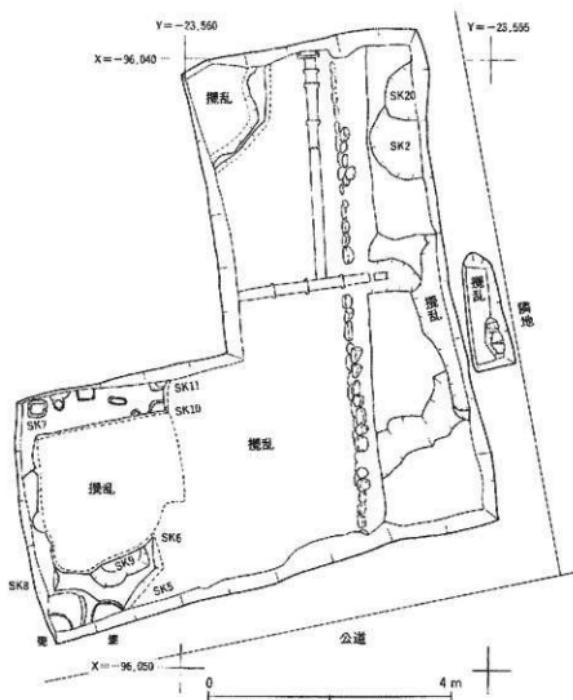
写真2 調査区1区完掘状況（南から）

## 第2節 基本層序

調査地は、既存の宅地であったため平坦地であったが、南接する道路は、東から西にかけて傾斜している。この傾斜地形の要因は、西側に小規模な谷が南に開いていることによる。調査で検出された石垣は、この傾斜地を宅地化するにあたり、段差を設けた際作られたものである。当地では既に埋まっていたが、道をはさんだ南側の宅地にはまだ生かされている。

調査地の東壁の層序を述べる。表土は約30cm、その下に砂質の強い黒褐色土が堆積している。その下位は黄灰色粘土質の地山である。地山の標高は約8.7mである。表土層中に貝殻が多く含み、遺構埋土中にはあまり貝は混じっていない。

貝層の中心は隣接する東側の宅地から南東にかけてと考えられ、当地は末端にあたると思われる。



第1図 遺構図(1) ( $S=1:80$ )



写真3 調査区3区（東から）

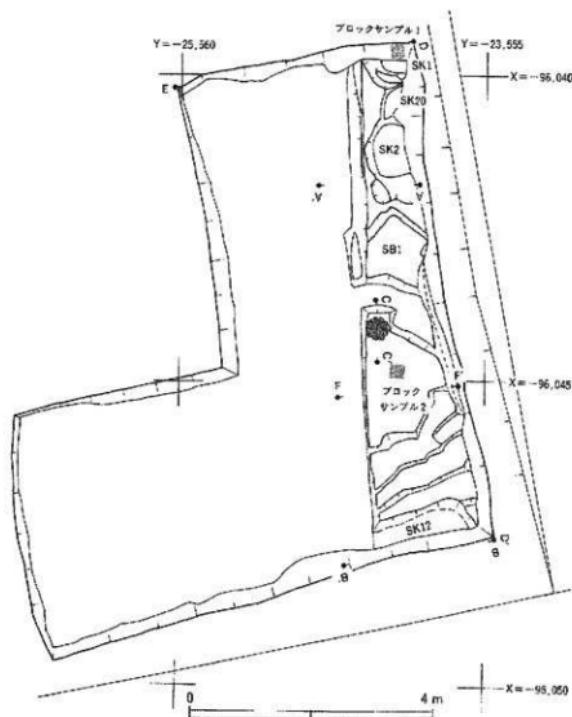


写真4 調査区東南部（西から）

### 第3節 遺構と遺物

第1区では住居跡、溝、小穴である。第2区はすべて擾乱、第3区も大半が擾乱でわずかに小穴が検出された。遺物は、その多くが弥生土器片である。ほかに石斧、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、上鍼がある。

SK1 第1区北端で検出した。東西約0.8m(検出分)、南北約0.38m(検出分)、深さ約0.52mを測る。埋土は2層に分かれ、上位層下部には貝が密に混じる。下位層には地山ブロックが混じる。貝層はブロックサンプリングで採集した(サンプル1)。出土遺物は、弥生土器(第4図1～4)がある。3は、広口壺で外面に櫛描文が施され



第2図 遺構図(2)( $\times=1:80$ )

SK7 第3区北西端で

検出した。埋土は、淡褐色土に地山ブロック混じる。出土遺物は、弥生土器(第4図8～9)、山茶碗(第4図10)がある。



写真5 SB1完掘状況(西から)

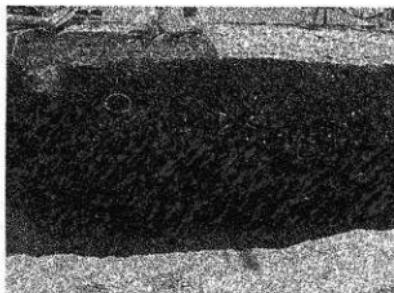
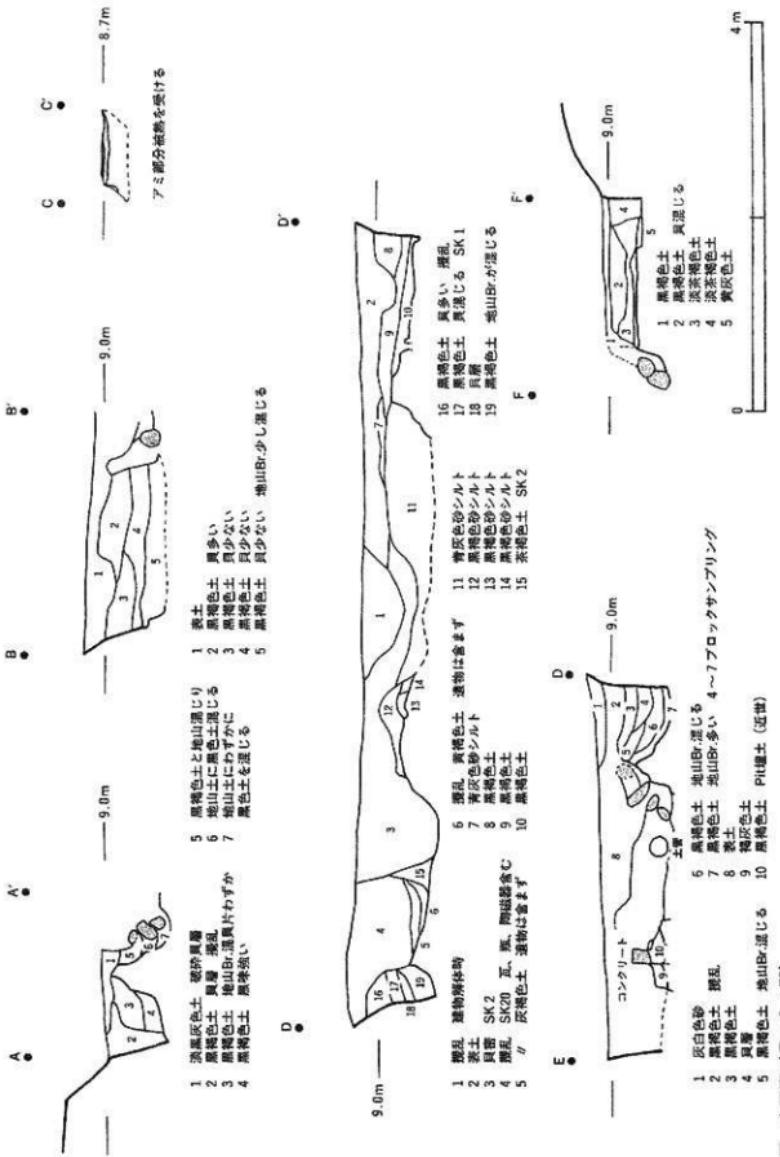


写真6 SK12断面(北から)



第3図 土壠圖(S=1:50)

SK9 第3区で検出した。埋土は、黒褐色土で硬く縮っていた。貝が少し混じる。

SK10 第3区北東端で検出した。埋土は、黒褐色土で貝が混じる。

SK11 第3区北東端で検出した。埋土は、淡褐色土。SK7、SK9、SK10、SK11の時期ははっきりしない。

SK12 第1区南端で検出した。南側は調査区外へ続く。掘り進めると、一段さらに深くなり別の遺構と重複しているようであったが、先後関係ははっきりしなかった。貝はわずかであるが上位層に含まれていた。埋土は黒色砂質土で下位層は黒味が強い。遺物は主に上位層から出土している。住宅基礎掘削深の関係で完掘していない。

P1・P2 住居跡を切るように検出された。排水溝が隣接してあったため背みがかっていたが、擾乱ではないようだ。P1を掘削すると底面でP2の埋土を検出した。北側と東側は擾乱を受けており規模は不明である。P1からは動物骨が出土した。

SB1 第1区で検出した。わずかに北コーナーを検出した。周溝及び地山面で焼土面を検出したことから住居跡の一部とした。埋土は、上位が黒褐色土で貝層を含む。下位が淡茶褐色土である。床面の一部には地山ブロック土が混じった土があり、貼り床をしているようである。深さは地山面から約20cmを測る。焼土は、上面が赤褐色を呈し、硬く縮っている。また約6cm下まで被熱により灰色となり硬く縮っている。貝層はブロックサンプリングで採集した（サンプル2）。遺物は弥生土器（第4図16、17）、動物骨が出土した。16は口唇部に刺突文が施される。

表土・包含層・擾乱等 SK2は、貝が密に含まれていたが、SK20を壊して掘り込まれていること、埋土中からレンガが出土したことから、戦後のものである。SK20は、瓦、ガラス瓶、陶磁器、火を受けたガラス塊等が出土した（写真7）。陶器徳利は、「アツタ 五本松（山）田酒店」と墨書きされている。磁器碗には、「865瀬」、「岐145」、「岐67」、「岐598」、磁器鉢皿には「68□瀬」とある。これらは、戦時下の統制令によって付けられた工場番号である。南北に検出した石垣列は、高さは約40cm、川原石3段分が残っていた。隙間は橙色の山土と石灰の混ざった漆喰で固めている。

SK8は、黒褐色土、地山ブロック土、褐色土ブロック土で貝が混じる。SK5は灰色土でふかふかであつ

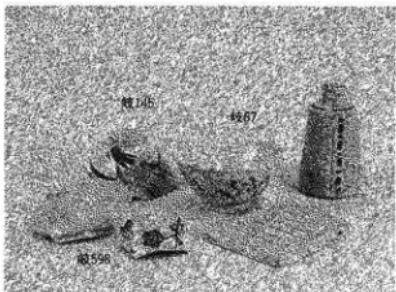


写真7 陶磁器 (SK20)

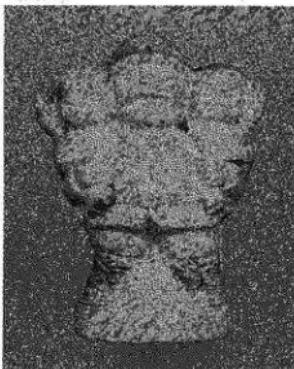


写真8 土人形 (2区)

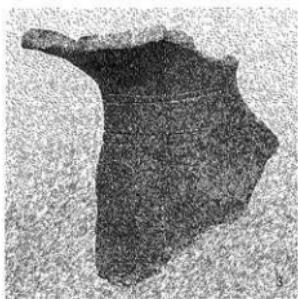


写真9 弥生土器壺 (SK 1)

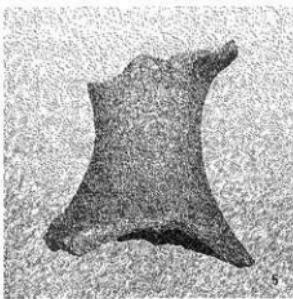


写真10 弥生土器壺 (SK 2)

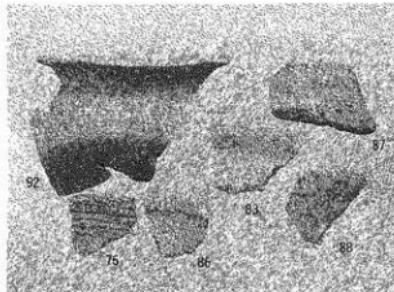


写真11 弥生土器

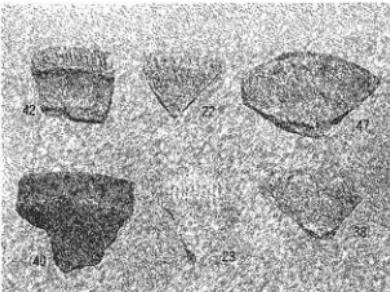


写真12 弥生土器

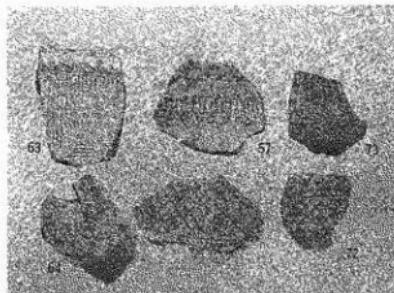


写真13 弥生土器

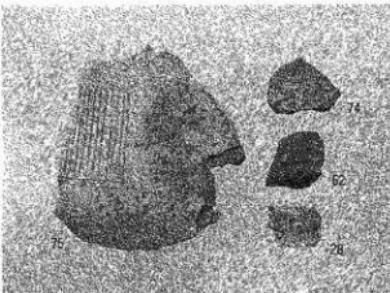


写真14 弥生土器

た。SK 6 は黒色土で灰色ブロック土、黒色ブロック土、貝が混じる。SK 5 に切られる。これらは一見古い造構と思われたが擾乱されたものであった。調査区の大半は擾乱されていたが、弥生土器がコンテナ数で 6 箱ほど出土した。細頸壺、広口壺、甕、台付甕、鉢、高杯等がある。第 8 図 130 (写真17) は、器形が不明である。壺、甕底部 (第 7、8 図 110~116・写真16) には木葉の押圧痕が付く。第 5 図 32 は、壺の体部で外側黄褐色、内面褐灰色を呈する。第 1 区石垣裏込めから出土したものであるが、田中コレクション資料 (1 貝上 N と注記) と接合した。33 は、壺の体部で、黒色を呈する。第 1 区アゼ 2 (F-F' 1 層)・第 1

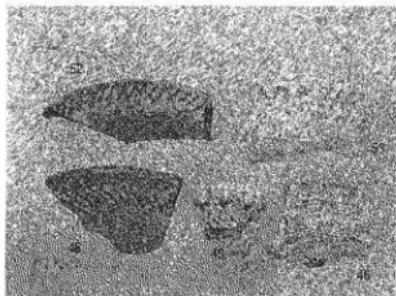


写真15 弥生土器

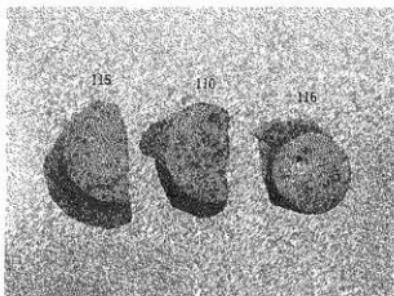


写真16 弥生土器

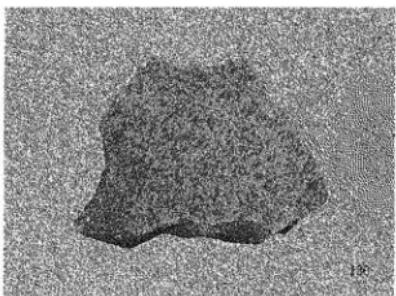


写真17 弥生土器（包含層上位）

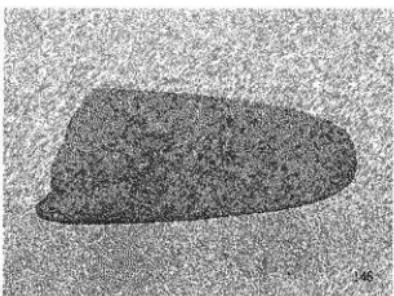


写真18 石斧（石垣裏込め）

区アゼ2南（包含層上位）から出土したもので、田中コレクション資料と接合した。中期の貝印町期から外土居式の破片が多いが、後期の土器も出土する（写真15）。

石斧（第8図146・写真18）は縄文時代のものと思われる。刃部は欠損している。石垣裏込めから出土した。そのほか、須恵器环身（140）がSK5、須恵器蓋（141）が第2区表土擾乱、須恵器有台坏（142）が第2区南半擾乱、灰釉陶器（143）が第1区擾乱、綠釉陶器（144）が第1区で出土している。土鐘（145・

写真19）は、全長9.4cm、孔径1.3cm、土師質で灰白色～浅黄褐色を呈する。第1区包含層上位の出土である。近現代のものとしては、丸善インク瓶、「水野小兒科院」薬瓶、カゴメソース瓶、土人形（写真8）等がある。土人形は、軟質な焼きあがりで胎土は白色を呈し、彩色が施されている。日本兵が子ども二人を抱きかかえ、笑みを浮かべているポーズをとっている。

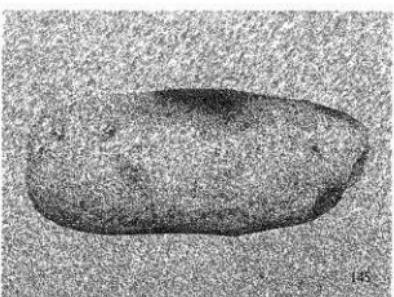
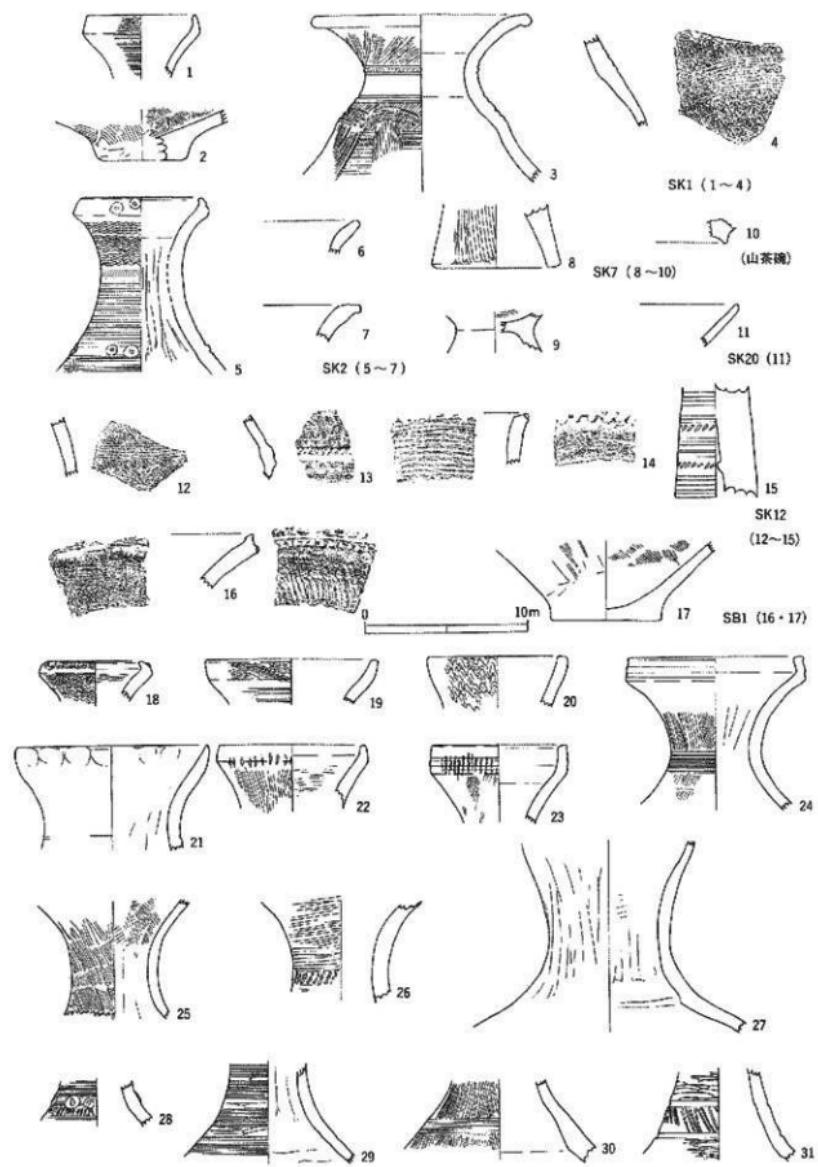
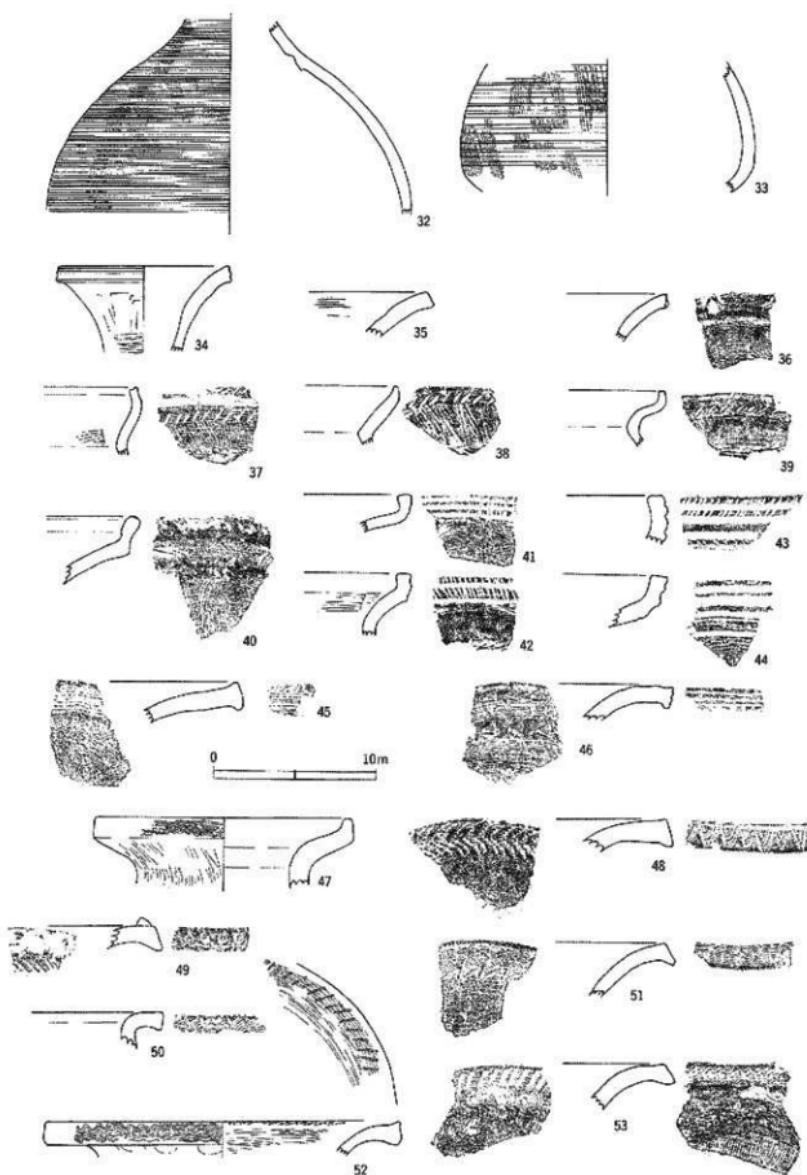


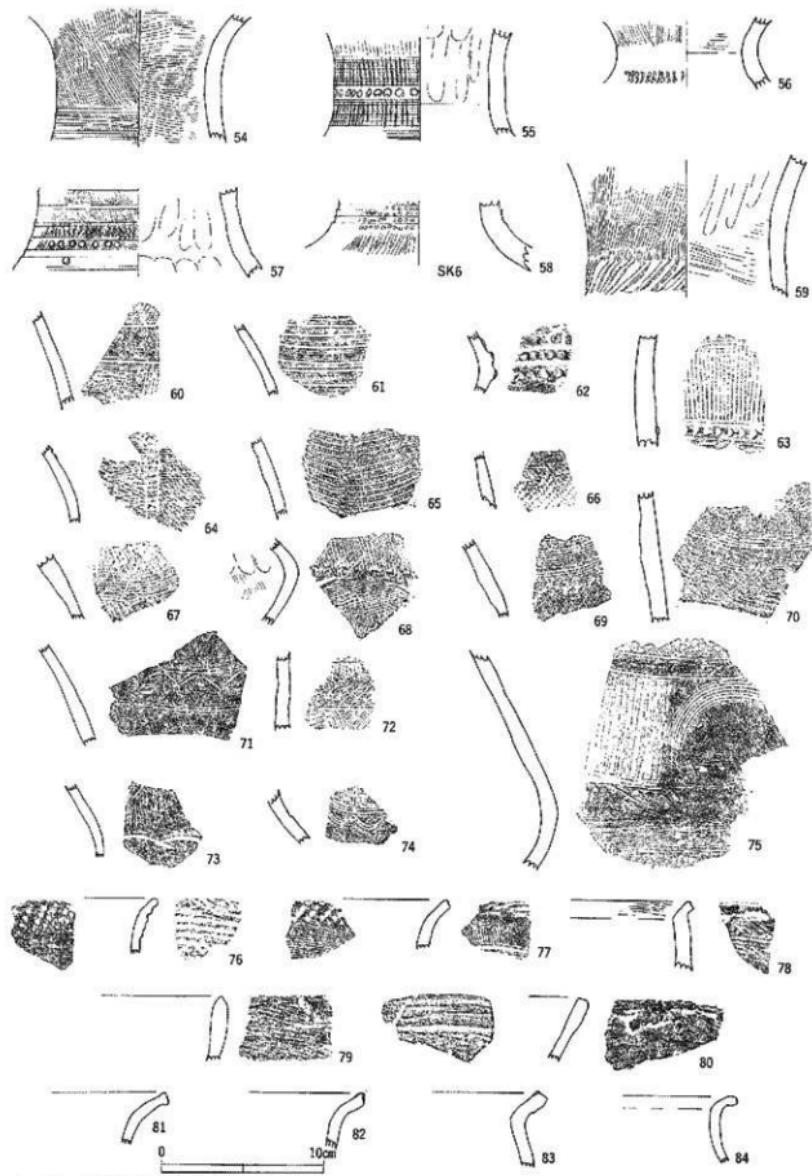
写真19 土鐘（包含層上位）



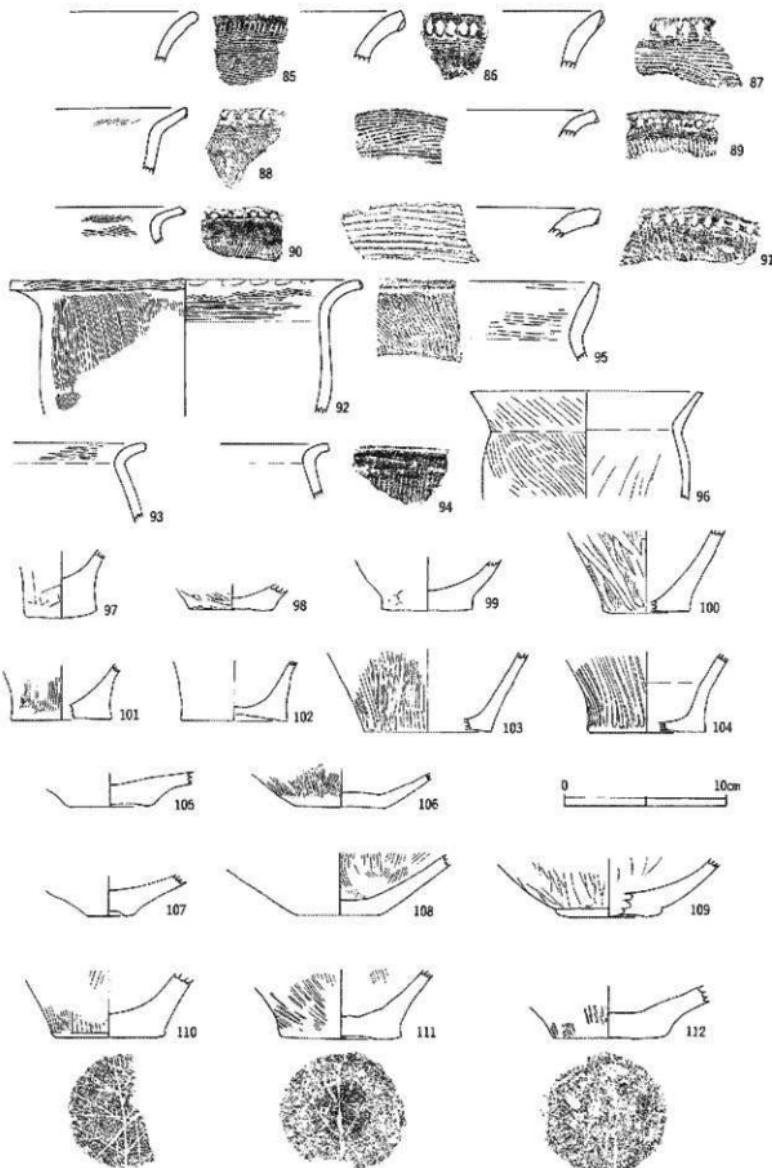
第4図 遺物実測図(1) ( $S=1:3$ )



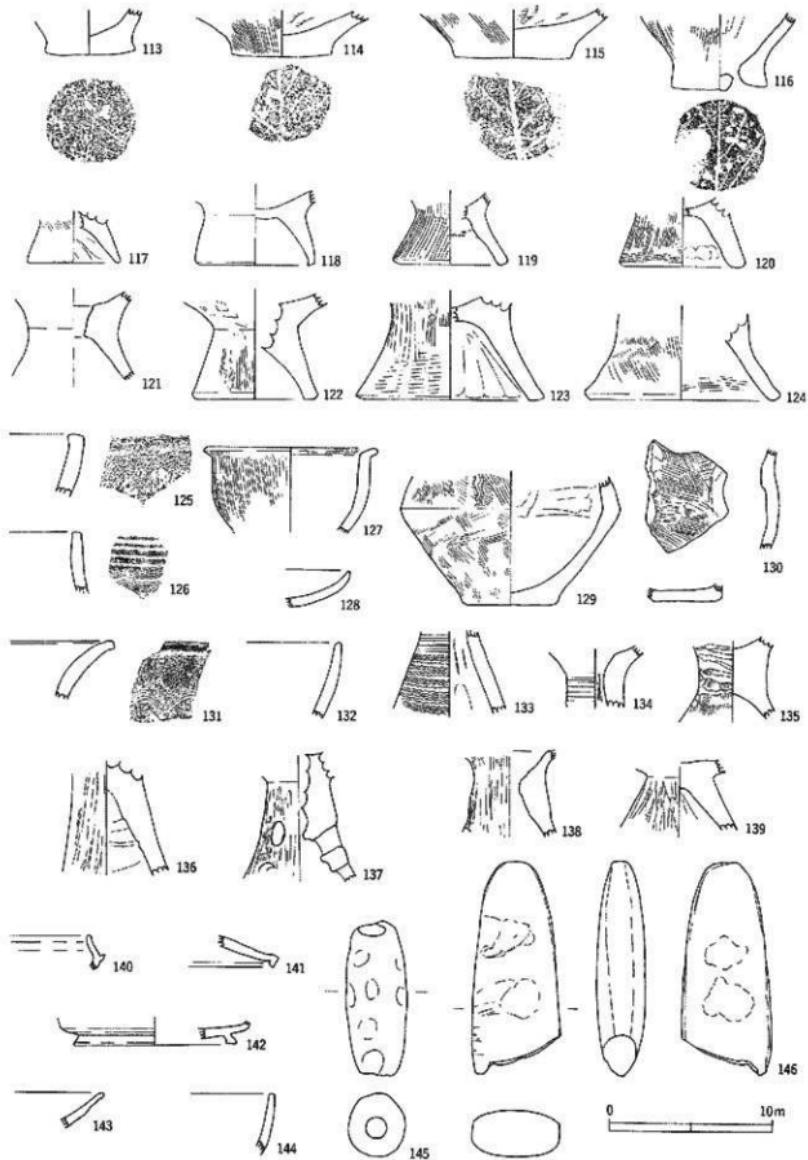
第5図 遺物実測図(2) ( $S=1:3$ )



第6図 遺物実測図(3)(S=1:3)



第7図 遺物実測図(4) ( $S=1:3$ )



第8図 選物実測図(5) ( $S=1:3$ )

## 第4節 田中稔コレクション

### 高蔵遺跡F地点調査資料整理報告

岡本 敦子

#### 1.はじめに

ここでとりあげる高蔵遺跡F地点の資料は、故田中稔氏によって昭和28年に発掘され、夫人である朝子氏によって平成11年、名古屋市博物館に寄贈された資料である。資料には田中氏による準備段階の原稿、調査時の造構図と土層図、出土遺物がある。一部はすでに論文等に発表されているが多くは未発表である。今回の整理は田中氏によって準備されていたF地点発掘調査報告の紹介を目的としたものである。

#### 2. F地点の発掘調査

予備調査（第一次調査）と正式調査（第二次調査）の二回行われている。第9図は調査時の平面図と土層断面図を可能な限り対応させたものである。

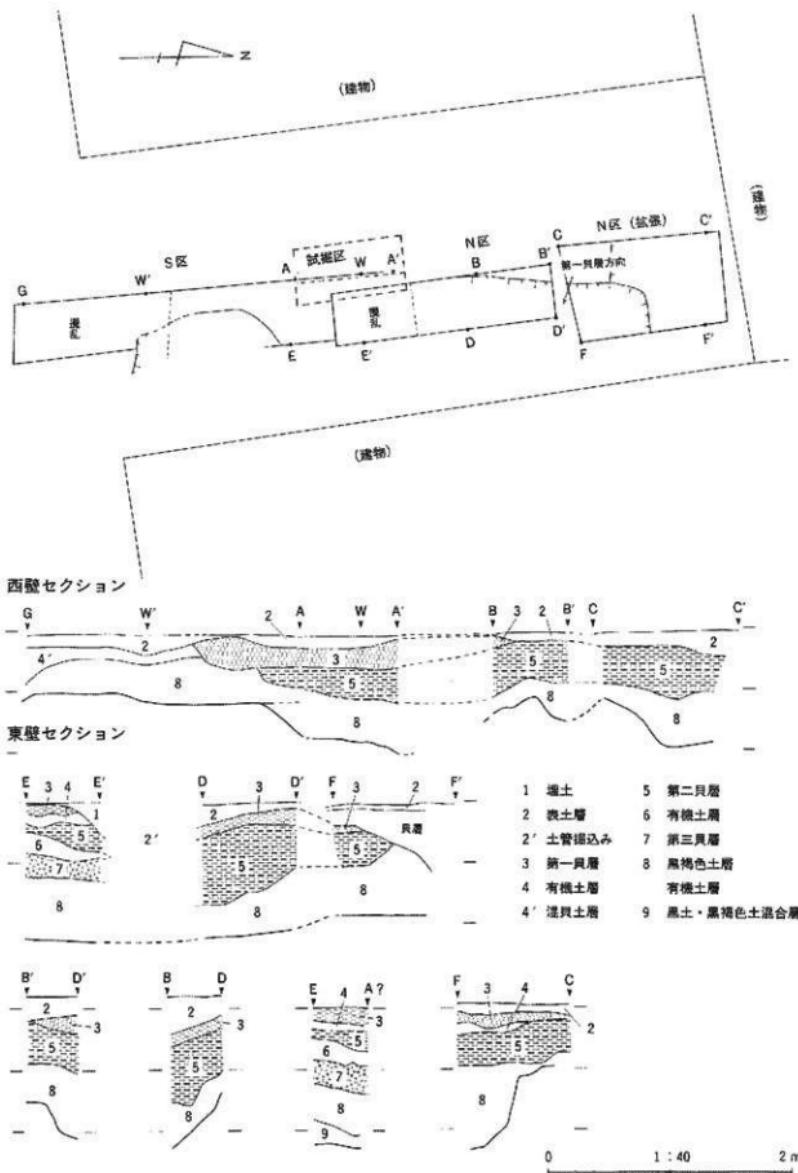
平面図をみると、中央のトレンチが予備調査のトレンチに相当し（試掘区）、試掘区に重複して三ヶ所設定されたトレンチが正式調査に相当すると推測される（南区、北区、北区（拡張））。造構については、田中氏の原稿に「トレンチの最下層にあらわれたビットを含めた黒色有機土層」という記述がある。しかし土層図や詳細な記録はなく不明である。また、平面図には北区の北部および、北区拡張においてなんらかの落ち込みの表現がされている。これが田中氏の原稿における「最下層にあらわれたビット」を指すのかは不明である。貝層については、上下2層の部分と間に有機土層を挟む3層の部分が確認できる。

#### 3. F地点出土遺物について

資料には弥生土器、石斧1点、骨の三種類がある。一方田中氏の原稿、出土遺物の数量表には弥生土器、石斧（S 2具出土）1点、軽石（N有、N 2具下鉢、S 2具、N表土出土）各1点、貝輪（S 1具出土）1点、須恵器（表土層、南区の擾乱層出土）各1点出土したという記述があるが存在しなかった。また、弥生土器についても、田中氏による実測図は存在するが実物がなかったものもあり、F地点の出土遺物は今回の資料が全てではない。

遺物の注記には大きく五種類に分類することができる。またその他数字のみ、漢字一字のみ、北区第2貝層などといった単語のものが確認できた。これらを対応させると、「F+数字（漢数字）」はF地点+出土した層位。「N (S) + 1 (2) + 貝」はN（北区）S（南区）+貝層+数字。例えば「N 2貝」は北区第1貝層を示す。「タ、K. + 数字」は高蔵+出土した層位？「N + 有（南）」「有+漢字（上・下・その他）」はN（北区）+有機土層+上位（下位）、と推定される。また遺物の中には注記のないものもいくつかある。これらは田中氏によって実測図が作成されているものもあり、実測図のメモから注記がわかったものもある。一覧表では（ ）付にした。また、すでに発表されている遺物実測図は遺物一覧表と第10図で対応させた。

田中氏によって寄贈された資料は、不明な点の多かった高蔵遺跡F地点の内容を知ることのできる貴重なものである。詳細な記録を残された田中稔氏と、散逸することなく資料を保管された田中朝子夫人、調査の指導をしていただいた名古屋市博物館学芸員梶山勝氏、実測等整理作業にご協力いただいた愛知学院大学考古学研究会OB 大杉規之、竹内弘光、水野義隆、水野梓、大橋寛幸各氏に末尾ではあるが感謝申し上げる。なお、紙幅の都合で掲載できなかった事項については、別稿にて発表を予定している。



第9図 F地点調査区平面図・土層断面図



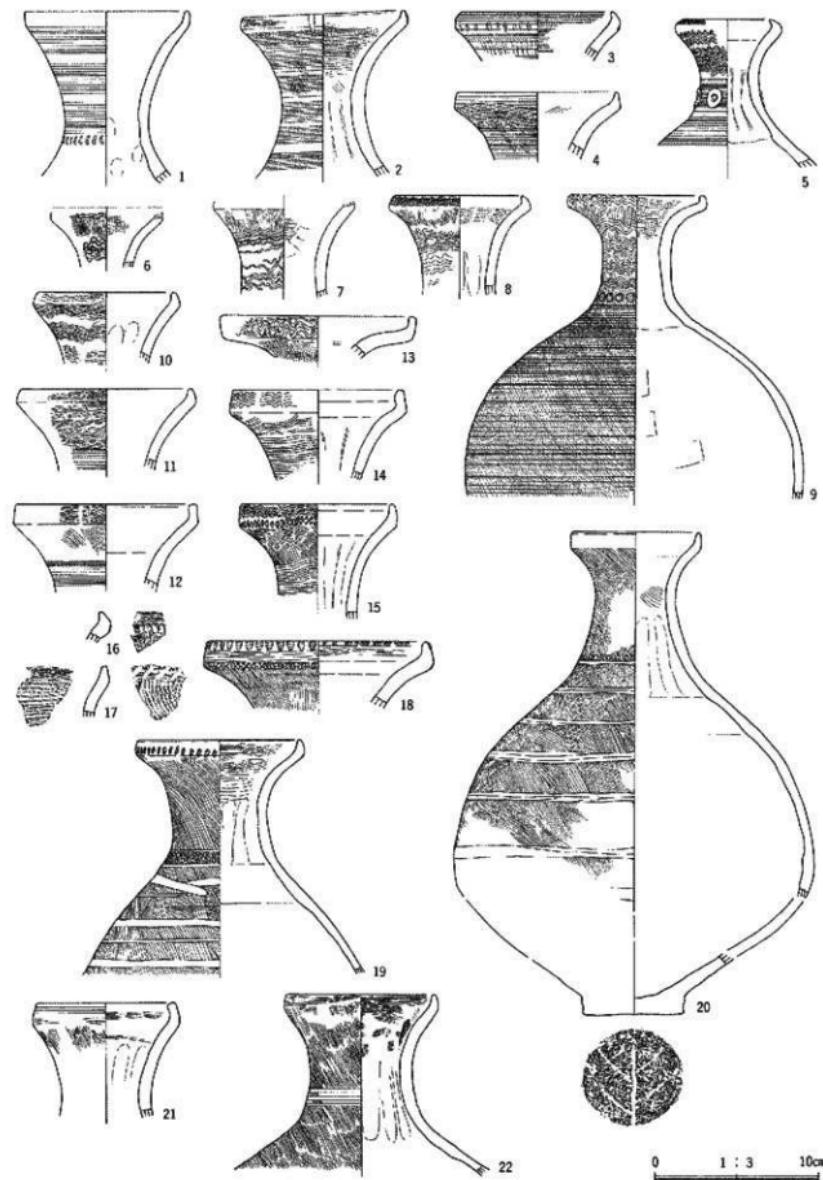
第10図 掘載実測図

地名	部屋番号	亡証	中和の日	遺言(4)	説明	前回回数	回	登録者名	性別	上層の持続	延長(6)	調査		地図	
												(1)	(2)		
1. 錦糸町	F3.511 上・K-2	第一只見	9.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	6	61	受付	なし	13.48	外西野田姫幸文、河原廣康とへ きなまつめの夫女が子供2名 の死後、夫婦で同居する。夫は 外西野田姫幸文、妻は河原廣 康。夫婦ともに精神障害あり。 夫はうつ病で、妻は躁うつ病 である。	2				
2. 錦糸町	タ-2-2 タ-3-4		9.7	外西野田姫幸文、第一只見 河原に有ナメ、内西野田姫幸 文と内西野田姫幸文。	4	13.48	62	受付	タ-2-2	外西野田姫幸文、内西野田姫幸 文と内西野田姫幸文。	5				
3. 錦糸町	P6	有機土造	9.7	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	63	受付	P7	第三只見	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2				
4. 錦糸町	H-2 K-3	有機土造	9.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	3	64	受付	P7	第三只見	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	3	②-①			
5. 錦糸町	S215	宿直 第二只見	8.1	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。内西野田姫幸文、 河原に有ナメ。	4	65	応接室	タ-2-1	13.2	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。内西野田姫幸文、 河原に有ナメ。	2	②-①			
6. 錦糸町	H11上	生区 第一只見		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	66	次回会	タ-2-1	13.2	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	5	②-①				
7. 錦糸町	P2	第一只見		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2	67	次回会	タ-2-1-3	22.2	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2	②-①			
8. 錦糸町	なし		(7.7)	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	68	応接室	なし	14.5	調整不適	1				
9. 錦糸町	タ-2-1-2 PASE- K-3-2-2 R-2-1		8.0	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	24	13.48	62	応接室	なし	14.5	1123番の遺言、外西野田姫幸文、 中野智啓文、河原に有ナメ。	1			
10. 錦糸町	2H-2-N	(8.1)		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	69	応接室	鳥取表	19.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
11. 錦糸町	2H-2-N	生区 第一只見	10.20	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	71	次回会	高崎表	19.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
12. 錦糸町	P4	有機土造	11.10	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	72	次回会	2H-2-N	19.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
13. 錦糸町	H-1N-1	生区 第一只見	11.20	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	73	次回会	P-	第一只見	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
14. 錦糸町	P6	有機土造	12.10	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	74	④-24	寮	なし	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
15. 錦糸町	P9	内西野田 第一只見	9.2	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	75	③-75	寮	P-、F1	内西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2				
16. 錦糸町	P6	有機土造		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	76	次回会	北区 第二只見 第一只見	24.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2	②-①			
17. 錦糸町	S10	第一只見 生区 第一只見		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	77	寮	タ-2-1	13.2	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
18. 錦糸町	S21	生区 第一只見	12.20	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	78	寮	有下S	西区 有下土造	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
19. 錦糸町	(生区第一只見 附)		9.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	6	79	寮	タ-2-1	13.2	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
20. 錦糸町	(生区第一只見 附)		11.20	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	15	13.48	136	寮	なし	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2				
21. 錦糸町	2		(7.2)	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	3	①-512	寮	2H-2-N	南区 第一只見	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2	②-①		
22. 錦糸町	(タ-2-2)		9.12	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	4	82	寮	S1只	生区 第一只見	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2			
23. 錦糸町	タ-2-2		9.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	3	③-513	寮	F1	生区 第一只見	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2	②-①		
24. 錦糸町	タ-2-2-1		9.2	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2	84	寮	F6	有機土造	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
25. 錦糸町	タ-2-K-2		10.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	85	寮	2H-2-N タ-2-4	第二只見	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2			
26. 錦糸町	タ-2-K-3		10.6	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	86	寮	F6	有下土造	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
27. 錦糸町	ドー	地上階	9.10	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	87	寮	石-15	有機土造	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
28. 錦糸町	タ-2-K-1		10.1	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	10	88	寮	(N2)H-2	生区 第二只見	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	6			
29. 錦糸町	(P.K.2-2)	第一只見	10.3	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	15	13.48	3-89	寮	P.N-2	第一只見	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	3		
30. 錦糸町	高塚区	五段	(9.8)	外西野田姫幸文、二段、一層	1	90	寮	S2只	生区 五段	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1			
31. 錦糸町	P7	高止ノ町		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	91	寮	S1只	第一只見	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1			
32. 新宿区	2-2-K-2			外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	6	92	寮	タ-2-1	13.2	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1				
33. 錦糸町	2H-2-N	北区 第一只見		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	93	寮	S1只	生区 第一只見	16.3-27.5	外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1			
34. 錦糸町	タ-2-K-2-2	第二只見		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	7	94	寮	2		ハケメ、口被服類み在住	3				
35. 錦糸町	F7	第三只見		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	95	寮	P6	有機土造	ハケメ、口被服類み在住	1				
36. 新宿区	タ-2			外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	2	96	寮	F-	埋土造	ハケメ、口被服類み在住	1				
37. 錦糸町	S2只	南区 第二只見		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	1	97	寮	W5上	南区 有機土造	ハケメ、口被服類み在住	1				
38. 錦糸町	FX-F62	高止ノ町		外西野田姫幸文、中野智啓文、 河原に有ナメ。	4	98	寮	なし	19.6	ハケメ、口被服類み在住	1				

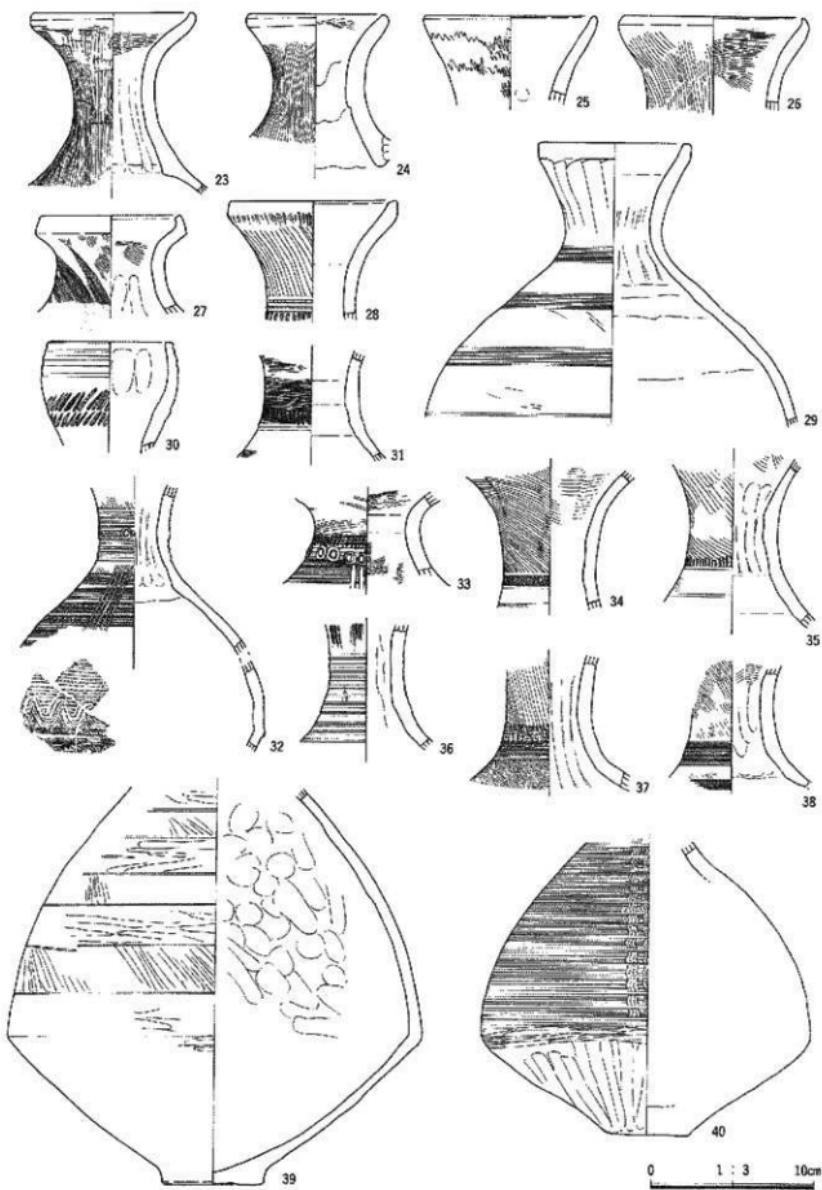
件番	部品名	記号	上層の地盤 目盛 位置	深度(cm) 位置 位置	測定		測定位置 目盛 位置	番号	生之	土の性状	剖面(?) 11号・12号	測定	地質 位置
					高さ	幅							
39 瓦	P1777.78			6.2	片側約1.5cm程の厚さ、一帯 のメタリックな、凹凸のある瓦	39	99	更	F3	第一販用		11号断続的延長、12号カタリ	2
40 帽	ZHN	第16 第二瓦器		5.8	有孔加工用ハケツ、底面は 内に海藻状物と、紀元前約1世紀 前後と、下端は木製の 頭部	38	100	佳	F. K.4			内表面剥離、コ樽剥離突出	1
41 瓦	L.P.K.4			外周縁は漆皮、裏面は灰土、 不均一による斜め矢子、テク	12	101	良	F-K-6			外周縁ハケツ(テクモカ)	1	
42 瓦	ZHN	第16 第二瓦器		有孔加工用ハケツ、底面は 内に海藻状物と、紀元前約1世紀 前後と、下端は木製の 頭部	12.2-23.2	102	佳	ZHN	古谷 第二瓦器		内表面丸みハケツ、複数點の 長いハケツ、口部剥離の位置	1	
43 瓦	F8			外周縁は漆皮、裏面は 内に海藻状物と、	1	103	良	2			内表面ハケツ、テクモ、口部剥 離の位置	1	
44 陶土壺	N.6	土区(即 角)、 有孔土壺		内面一面剥離、口部剥離底み み	1	104	良	江戸N.	南区 第二瓦器	38.2	外周縁ハケツ、ローリング底み み	22.2	
45 伝口壺	F5	第二瓦器		漆皮交織、口部剥離底み次文	1	105	良	なし			有孔土壺、一部剥離底み次文、 ローリング底み三辺	23	
46 伝口壺	F5	第二瓦器		漆皮交織、口部剥離底み次文	1	106	良	2			外周縁ハケツ、漆皮交織底み、 ローリング底み	2	
47 伝口壺	F5	第二瓦器		漆皮交織と、漆皮交織底み所、 即ち底み次文	1	107	良	S2R	南区 第一瓦器		漆皮交織と、漆皮交織底み所、 即ち底み次文	1	
48 伝口壺	F1	第一瓦器		ローリング底み次文	1	108	良	南	南区 第一瓦器	5.6	外周縁ハケツ、底みの漆 皮交織	1	
49 伝口壺	F7	第三瓦器		ローリング上壁剥離底み底、 底み次文	1	109	良	毛子S	南区 第三瓦器	5.0	外周縁ハケツ、底みの漆 皮交織	1	
50 瓦	F5	有孔土壺		ローリング上壁と下端に剥離火	1	110	良	2			外周縁ハケツ、底みの漆 皮交織	1	
51 瓦	F9	漆皮交織 漆皮底 有孔土壺		漆皮交織、口部剥離底 底み次文、次文	1	111	良	F3	第一瓦器		外周縁ハケツ、二次的剥離、 底みに剥離火	1	
52 瓦	F-	第七瓦		ローリング上壁ハケツ	1	112	良	S2R	南区 第七瓦		外周縁ハケツ、底みの漆 皮交織	1	
53 瓦	F6,F7			漆皮交織、底み、ローリング 底み次文、次文	2	113	良	2			外周縁底みハケツ	1	
54 瓦	F-	第七瓦		外周縁ハケツ、口部剥離 底み次文、次文	1	114	古付號	S2R	南区 第七瓦	33.7	外周縁底みハケツ、内蓋、落ヶケツ	1	
55 瓦	F-	第七瓦		ローリング底み、漆皮の底	1	115	ナ	ナ			ナゲ、落ヶケツ	1	
56 瓦	F.2	第一瓦器		日付にによる剥離、毛子Sとし て石と、和歌浦津川と、赤泥、 山森火炎文、山森火炎文、赤泥 と合併	1	116	ナ	ナ			外周縁剥離と、赤泥粘土、成都 漆皮底	1	
57 瓦	F3	第一瓦器 (即)、 第二瓦器		外周縁による剥離が、腰壁 と、テクハケツと、上壁剥離	2	117	赫	F3	第七、赤 漆皮底	11.3	外周縁剥離と、成城張裂 底の剥離火	2	
58 受口壺	F3	第一瓦器		口部剥離底み次文、漆皮底 次文とその上に剥離火	1	118	ナ	ナ	118	漆皮 底	33.2	外周縁ハケツ、底みの漆 皮交織	1
59 瓦	N.6	漆皮 底		外周縁底み次文、口部剥離 底み次文	1	119	不明	なし			口部剥離底み瓦瓶、紫漆底火	1	
60 伝口壺	JHN	底区 瓦器		外周縁底み次文、口部剥離底 底みに剥離ハケツ、口部剥離 底み次文	2	120	ナガラ	118上N	南区 第一瓦器		聯合窯跡のことを、煙突窯か セイタコロセイタツ	1	

参考文献

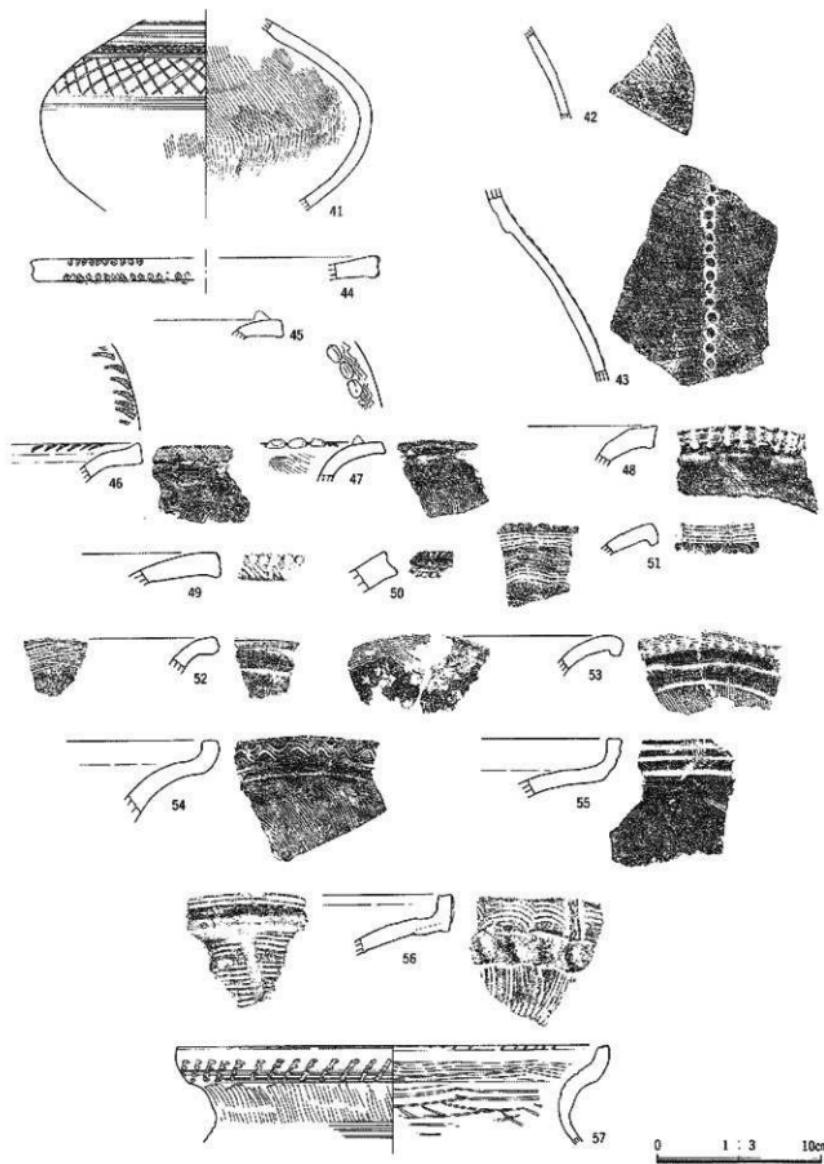
- 1954『高藏貝塚』田中稔編 豊橋市瓜郷遺跡調査会  
 1955『東海』『日本考古学講座 第四巻 弥生文化』久永春男 河出書房  
 1966『三 東海』『日本の考古学 III 弥生時代』久永春男 河出書房新社  
 1967『尾張における中期弥生式土器の研究 2・貝田町式土器について』田中稔『古代学研究』第51号  
 1983『高藏遺跡E地点溝状構造出土土器の再検討』石黒立人『マージナル』No.2  
 1984『再び「外土居式」をめぐって』石黒立人『マージナル』No.3  
 1990『森南遺跡』愛知県海部郡甚目寺町教育委員会  
 1990『阿弥陀寺遺跡』愛知県海部郡甚目寺町教育委員会  
 1996『YAY!』弥生土器を語る企  
 1996『埋蔵文化財調査報告書25 高藏遺跡(第8次・第9次)』名古屋市教育委員会  
 1997『埋蔵文化財調査報告書26 高藏遺跡(第12次~第15次)』名古屋市教育委員会



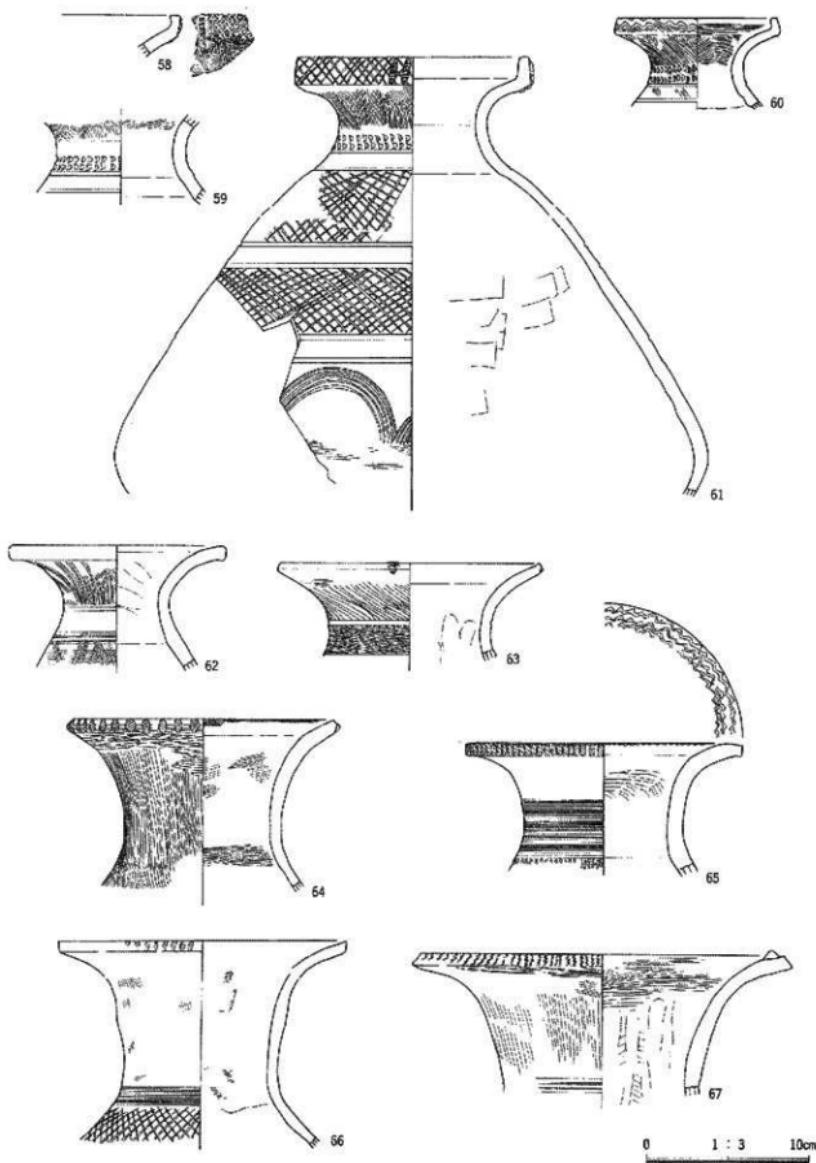
第11図遺物実測図 (6) ( $S=1:3$ )



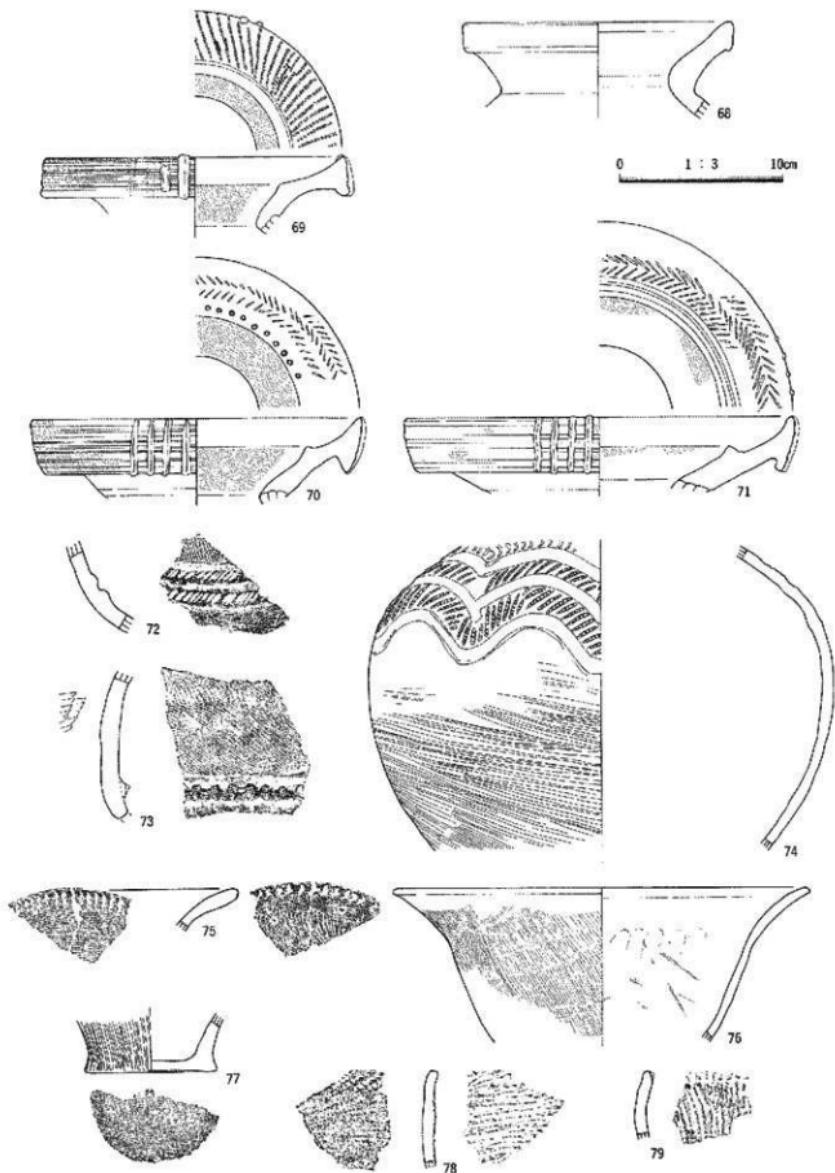
第12図遺物実測図(7) (S=1:3)



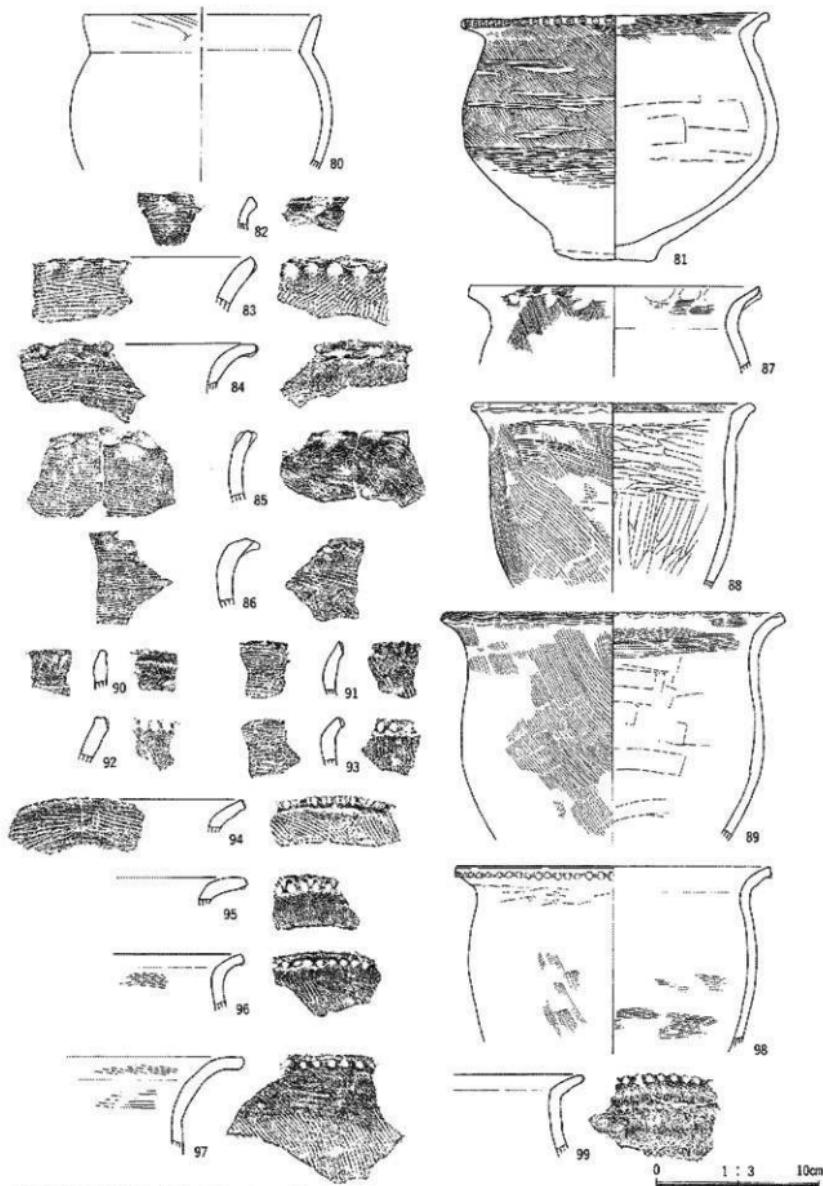
第13回遺物実測図(8) (S=1:3)



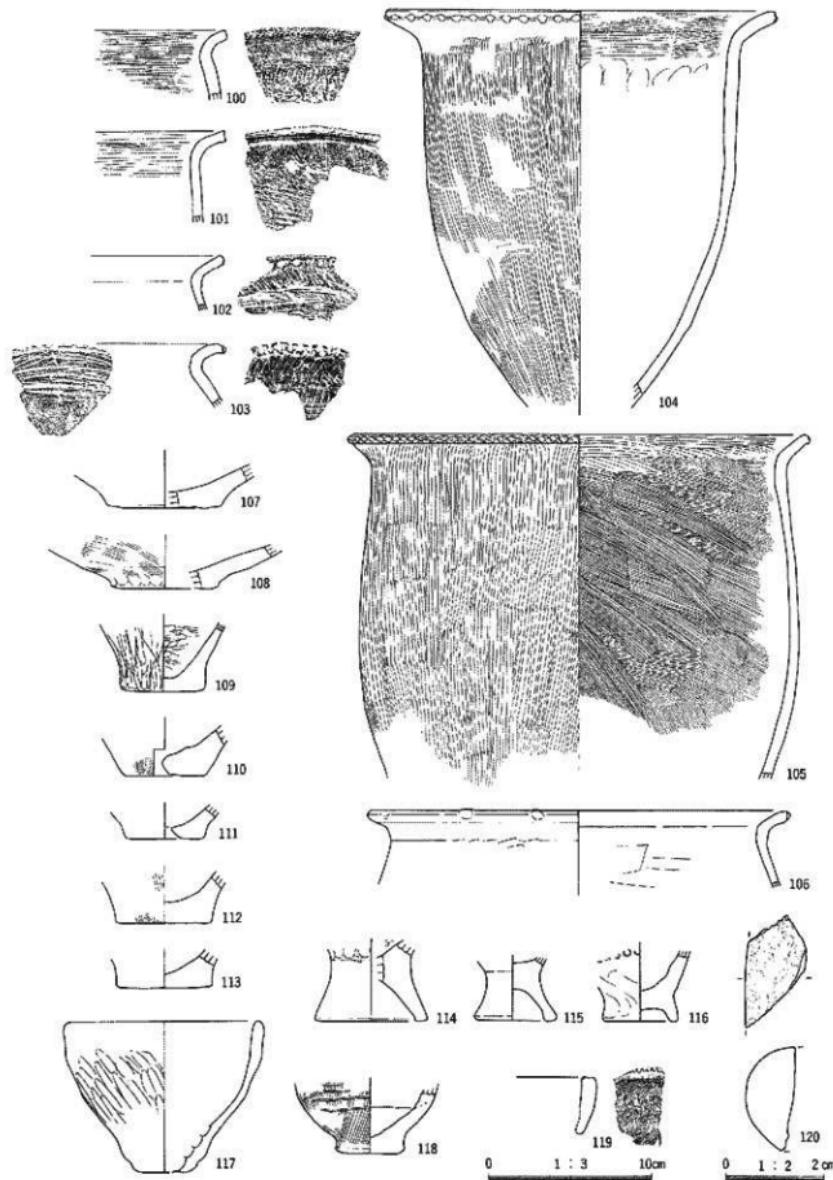
第14回遺物実測図(9) ( $S=1:3$ )



第15図遺物実測図 (10) ( $S=1:3$ )



第16図遺物実測図(11)(S=1:3)



第17圖遺物實測圖 (12) ( $S=1:3$ )

## 第5節 自然遺物

### 高蔵遺跡出土の動物遺体

名古屋大学博物館 新 美 倫 子

高蔵遺跡では発掘区の2カ所で柱状のブロックサンプルが採集され(第2図参照)、発掘時にも目に付いた獸骨が採集されている。柱状ブロックサンプル資料は、表2に示した体積の貝層をそれぞれ土ごと取り上げて1mm目のふるいにかけ、動物遺体を水洗選別したもので、その出土内容を表3・4に示した。表4には、発掘区の任意の数地点で貝層を採集し、同様に1mm目のふるいにかけて抽出した魚骨・獸骨の内容も、「その他」として示している。発掘時に採集された資料の内容は表5に示した。これらの資料は貝類が大部分を占めており、魚類・鳥類・哺乳類などは少量であった。資料の所属時期はいずれも弥生時代中期中葉と考えられる。ここでは、貝類についてはブロックサンプル資料を、魚類・両生類・爬虫類・鳥類については水洗選別資料を用いて、哺乳類については発掘時採集資料とブロックサンプル資料をあわせて動物遺体の内容を述べる。また、田中稔氏が当遺跡で昭和29年に採集された資料についても、表6にその内容を示し、あわせて報告することとした。

なお、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただいた。ここに感謝いたします。

#### 1. 貝類(表3)

貝類ではハマグリとオオノガイが多く出土している。サンプル1には最小個体数でハマグリ83個体とオオノガイ85個体が見られ、両者はほぼ同程度含まれているが、サンプル2にはハマグリが58個体とオオノガイ9個体が含まれており、ハマグリが多くオオノガイは少ない。いずれのサンプルにおいても、ハマグリは殻長4cm程度の個体から10cmを超える大型個体まで見られたが、大きな個体が多い。オオノガイはほとんどの資料が壊れているが、殻頂部の大きさから見てやはり大きな個体が多かった。アカニシも比較的多く出土し、サンプル1で4個体、サンプル2で8個体見られた。全ての個体が肉を取り出すために壊されており、殻高10cm以上と思われる大きなものが多い。これら以外の種の出土量は少なく、サンプル1・2をあわせてマガキが5個体、オキシジミが2個体、ヤマトシジミ1個体が見られた。マガキはいずれも殻長5cm程度と思われる小さな個体であった。他にはイボウミニナ・フトヘナタリ・ウミニナ類が見られた。

#### 2. 魚類・両生類・爬虫類・鳥類(表4)

魚類の出土量はわずかであり、カサゴ類の椎骨2点とイワシ類の椎骨1点、同定不可椎骨破片4点が出上している。カサゴ類は体長25cm程度の個体である。両生類はカエル類の上腕骨1点が見られ、この資料は現生エゾアカガエルよりひとまわり小さい。爬虫類ではヘビ類の椎骨2点が出上している。鳥類は種不明の指骨1点が見られた。

#### 3. 哺乳類(表4・5)

哺乳類の出土量も少ない。イヌ7点、シカ4点、イノシシ類4点、シカまたはイノシシ類1点、陸獣肋骨破片1点、陸獣骨破片28点、陸獣焼破片3点が見られた。イヌは全てブロックサンプルに含まれていた遊

離歯と歯の破片である。陸獣破片は大部分がシカまたはイノシシ類の四肢骨破片と思われる。

#### 4. 田中氏採集資料 (表 6)

田中稔氏が昭和29年に採集された動物遺体として30点の資料が保存されていたが、そのうち2点がそれぞれ他の資料と接合したので、資料総点数は28点である。イノシシ類が20点と多く、他にはシカ1点、ガン類1点、クロダイ1点、陸獣破片4点、ヒト破片1点が見られた。イノシシ類には四肢骨も含まれているが、頭蓋骨・下頸骨の破片や歯齒歯が多い。小さな破片資料が多いため、家畜のアタであるかイノシシであるかはよくわからない。シカは基節骨が1点だけ見られた。ガン類は現生ヒシクイよりも小さい小型種の鳥口骨である。クロダイは体長29cmの現生標本よりもひとまわり大きい歯骨であった。

サンプルNo.	長さ・幅・高さ
ブロック	No.1 40cm×20cm×10cm
サンプル1 (SK 1)	No.2 40cm×20cm×10cm
	No.3 30cm×10cm×10cm
ブロック サンプル2 (SB 1)	No.1 30cm×30cm×10cm
	No.2 30cm×30cm×10cm
	No.3 30cm×30cm×10cm

表2 ブロックサンプル体積

時期	種・部位・出土場	計
不明	シカ上顎左第2後臼歯1、中足骨左1脚 四肢骨片3、歯破片2	7
生糞時代中期	イノシシ頭骨右1、椎管1着 シカ頭骨左1、足根骨1 四肢骨破片1、歯片11	16
計		23

註：著：若葉、上：近位端、下：遠位端、焼：焼けた資料。

表5 発掘時採集資料

	ブロックサンプル1			ブロックサンプル2			計
	No.1	No.2	No.3	No.1	No.2	No.3	
ハマグリ	左 右	18 17	44 47	11 18	26 34	18 24	117
オオノガイ	左 右	10 12	57 61	12 8	7 2	2 2	88
アカニシ	3	1	—	—	—	5	12
マガキ	右	—	—	—	4	1	5
オキシジミ	左 右	1	—	—	1	—	2
ヤマトシジミ	右	—	—	—	1	—	1
イボウミニナ	—	1	—	—	—	1	—
フトヘナタリ	—	1	—	—	—	1	—
ウミコナ類	—	—	—	—	4	4	8
城不列島貝貝	3	—	—	—	4	—	7
計	65	211	49	86	56	467	

註：二枚目は較量部の残存する左脛・右脛の資料数を示し、愈員は左の残存する資料の数を示した。左：左脛、右：右脛。マガキは右脛のみを数えている。

表3 ブロックサンプル肉類出土量

サンプル	種・部位・出土量	計
ブロック	陸獣破片1	1
サンプル1	シカ or イノシシ類上腕骨破片1	1
	イヌ上顎左1、下顎右C、歯破片2	—
	イノシシ頭上腕左P1-P2、陸獣破片3	9
ブロック サンプル2	カサゴ頭骨右2、魚類同定不可複数骨破片1 地4明治頭骨1	18
	イヌ上腕骨11+13+P3 陸獣破片10、歯破片1	—
その他	イワシ類骨管1、魚類同定不可複数骨破片3 カエル頭上腕骨右下1、ヘビ類椎骨2	7
計		36

註：I：切歯、C：大歯、P：前臼歯、I-C-Pに作る数字は歯の発育度を示す。

表4 ブロックサンプル魚類・鳥類・哺乳類出土量

No.	種	部位・出土量
1	イノシシ類	下頸骨破片1
2	イノシシ類	大頭骨左中間部1
3	ガゼ類(小)	鳥口骨右下1
4	強烈	四肢骨破片1
5	イノシシ類	対脊右1
6	イノシシ類	肩甲骨右1
7	イノシシ類	頭頂骨破片1(頭頂骨左→後頭骨部分)、No.13と接合
8	イノシシ類	頭蓋骨破片1(頭蓋骨右→後頭骨部分)、No.15と接合
9	イノシシ類	頭蓋骨破片1(前頭骨右部分)
10	イノシシ類	後頭骨左1
11	強烈	破片1
12	イノシシ類	頭蓋骨破片1
13	イノシシ類	No.7と接合
14	シカ	坐尾骨1
15	イノシシ類	No.8と接合
16	イノシシ類	頭蓋骨破片1
17	イノシシ類	頭蓋骨破片1
18	イノシシ類	下頸骨破片1
19	ヒト	四肢骨破片1
20	陸獣	破片1
21	強烈	破片1
22	クロダイ	曲骨右1
23	イノシシ類	下頸右第1切歯1
24	イノシシ類	下頸骨左(M3)
25	イノシシ類	下頸左第2後臼歯(1/4欠損)1
26	イノシシ類	下頸左第2後臼歯(1/2欠損)1
27	イノシシ類	下頸左第4前臼歯1
28	イノシシ類	下頸左第1後臼歯1
29	イノシシ類	上頸右第1株臼歯1
30	イノシシ類	下頸右第1後臼歯(1/4欠損)1
計		28

註：表2多箇、M3：第3後臼歯、( )は歯骨があることを示す。

表6 田中氏採集資料

## 第6節 まとめ

本調査地点は、昭和28~29年に田中稔氏が調査したF地点に該当する。田中稔氏は、高巣遺跡の踏査により貝層の散布地を明らかにし、A~J地点と名づけ図示した。さらにE地点の調査成果を公表した。今日、高巣遺跡は広範囲であり、なつかつ調査が頻繁に実施されているため、A~J地点という名称は使用することはなくなったが、その成果は、今日においても弥生時代研究の基礎となっている。

さて、F地点の調査成果は、これまで未公表で一部の実測図は『日本考古学講座4 弥生文化』(1955年・河出書房)、『日本の考古学III 弥生時代』(1966年・河出書房新社)等に掲載されていたにすぎなかった。これらの資料は1999年に名古屋市博物館へ寄贈され、「身近なまちの考古学 第22回収蔵品展 鈴村秋一・田中稔・廣瀬栄一コレクションから」として公開された。こうした経緯から、F地点の資料について本報告書に掲載し、研究の便宜をはかることとした。

今回の調査では、弥生時代の住居跡1基、土坑6基等を検出した。住居跡は、わずかに北コーナー及び焼上面を検出したにすぎず、また土器もわずかであったため、時期を確定するには材料に乏しいところであるが、中期中葉と推定される。遺物の大半は、戦後の擾乱土中から出土した。その多くは弥生土器で、時期は中期中葉であるが、後期の土器をはじめ須恵器、灰釉陶器等も若干出土した。また绳文時代のものと思われる石斧も1点出土した。

調査前、敷地には貝殻が散布している状況であったが、調査の結果では残存する貝層はわずかであった。東側隙地では家庭建築の際、貝殻が散乱していたとのことであり、貝層の中心は東側台地上に存在するのであろう。

貝類は、ブロックサンプリングした貝層中では、ハマグリ、オオノガイが大半を占め、アカニシがこれに次ぐ。マガキ、オキシジミ、ヤマトシジミ等他の貝類はわずかであった。貝類以外では、シカ、イノシシ類、イヌ、カサゴ、イワシ、カエル、ヘビ等がある。概して種類は乏しい内容である。

1991年、E地点の立会調査の際検出した溝1は、弥生時代中期のものと思われるが、この溝1から出土した貝類は、アカニシ、ハマグリ、マガキが多く、他にイボウミニナ、フトヘナタリ、イワガキ、サルボウ、ハイガイ、オキシジミ、オオノガイ、ヤマトシジミ、シオフキ等があった([埋蔵文化財調査報告書34] 2000年)。今回の調査出土資料と近似した内容である。いずれも内湾水域で採集される貝類である。

## 第III章 高蔵遺跡第33次

### 第1節 はじめに

第33次調査は、個人住宅の建築に伴う調査である。調査地点は、熱田区五本松町1004-4である。調査面積は約60m<sup>2</sup>で、排土置き場を確保するため調査区を東と西に分けて実施した。調査期間は、平成13年4月2日から4月20日までであった。

東半区では表上下に中世の包含層を検出し、中世の土坑、溝等を検出した。西半区では、表土掘削をしたところ、石垣を検出した。この石垣は西面し、その西側は南北方向の溝が走っていた。溝の掘削は、建築基礎掘削深まで留めたが、近代の遺物を大量に含んでいた。北端では、近世の土坑を検出した。

### 第2節 遺構と遺物

検出された遺構は、溝状遺構8条、土坑3基等、遺物は中世陶器、瓦、近世陶磁器、近代陶磁器である（第4図5、30~32は包含層出土）。

#### SD01

SD05を覆う第9層（黄褐色砂シルト）内で検出した。南北方向に延びる。検出長約1.6m、幅約0.36m、深さ約0.12mを測る。遺物は美濃系山茶碗（第4図1、2）、土師皿が出士した。この面ではほかにP1、2、3、4を検出した。

#### SD05

調査区南東端で検出した。地山は、西から東に傾斜することから溝の西肩を検出したと思われる。南壁土層を観察すると、埋土は5層に分層される。上位層は、地山を掘り返した黄褐色シルトで覆われている。その上位層は、灰褐色砂シルトで中世の包含層である。検出長約9m、幅1.5m以上を測る。北側ではやや西に振れているため、深さは南端では約70cmであるが、北端では約1mを測り、灰青色シルトが厚く堆積していた。山茶碗（第4図3）が出士したが、溝の掘削時期は不明である。

#### SD03・SD04

東西方向に延びる。検出長約1.6m、幅約1.5m、深さ約0.2mを測る。南側はさらに深く、別の溝が重複していたのでSD04とする。SD05埋土を掘り込んで作られ、底面は地山面に達していない。埋土は黄灰色砂シルトである。SD03では山茶碗（第4図4）が出士した。

#### SD06・SD07・SK02

検出長は約1.4mである。いずれもSD05埋土中で検出した。SD06、SD07は南北方向の溝であったが、くぼ地程度のものである。埋土は黄灰色砂シルトである。SK02は、深さ約0.3mを測る。埋土は、褐灰色土である。遺物は山茶碗（第4図6~17）、陶器四耳壺（18）、陶器壺（20）、土師器皿（19）が出士した。

#### SK01

西半は石垣掘り形で壊される。直径約3m、深さ0.8mまで掘削した。底部まで掘削していない。埋土は、上位層は灰褐色シルト、下位層は青灰色土である。遺物は、山茶碗（第4図21~23）、中国青磁碗（26）、中国影青（28）、古瀬戸瓶類（24）、陶器四耳壺（25）、瓦（29）、土師器羽釜（27）が出士した。

#### SK03

北端地山面で検出した。検出長は約1.6mを測る。幅約0.7m、深さ約0.4mを測る。埋土は灰褐色土であ

る。遺物は近世末の陶磁器が出土した。

#### SK04

北端地山面で検出した。幅約0.9m、深さ約0.9mを測る。埋土は灰褐色土である。遺物は、近世末の陶磁器（第4図33～35）が出土した。35は涼炉である。

#### SD08

南北方向に延びる。検出長約9.0mを測る。幅約1.1～1.4mを測る。東側に石垣を伴う。石垣は川原石積みで縦4石分が残り、高さ約1.2mを測る。石垣の下には、厚さ約8cmの板を置き、前面に長さ約1.5mの板を横渡しにして、杭で押さえている。杭間は、約0.55～1.5mと一定していない。掘り形埋土は粗砂であった。また溝埋土は、上位層は暗青灰色土で、近代の陶磁器が大量に出土した（第4図36は碍子）。下位層は未掘である。

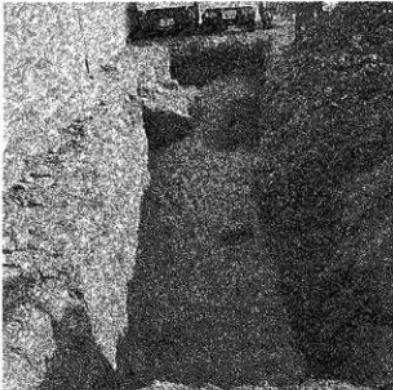


写真1 東半区全景



写真3 西半区石垣・SD08



写真4 SK03・SK04

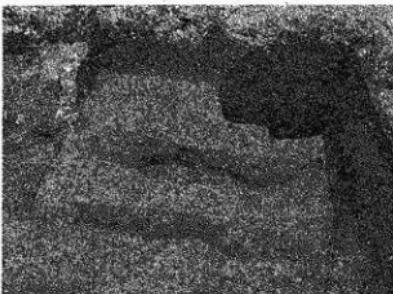


写真2 SD01

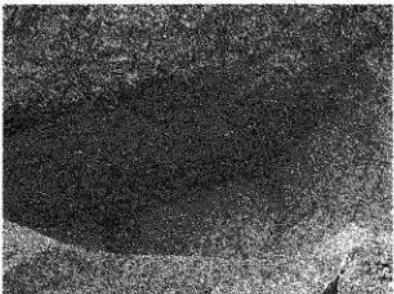
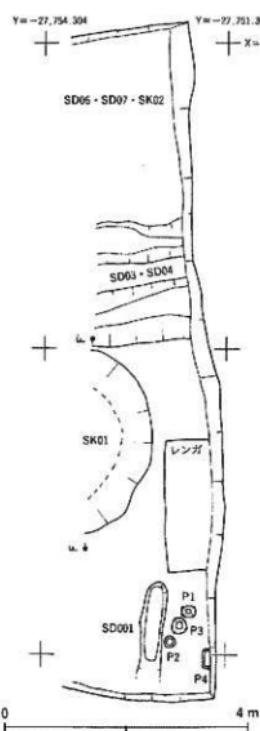
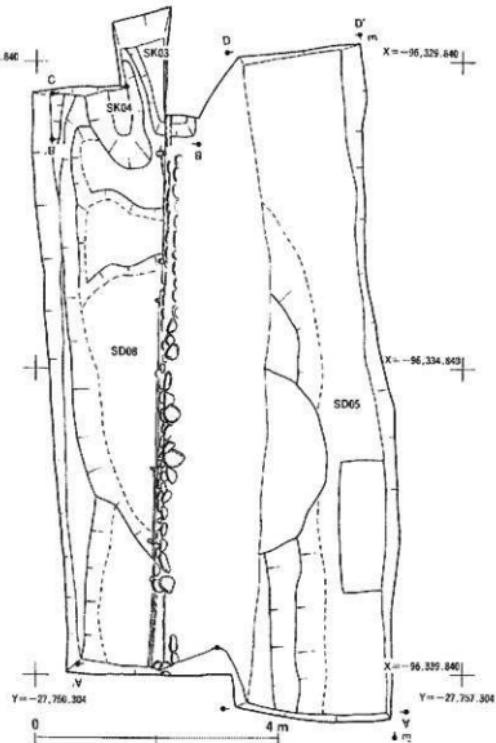


写真5 SK01



第1図 遺構図(1) ( $S=1:80$ )

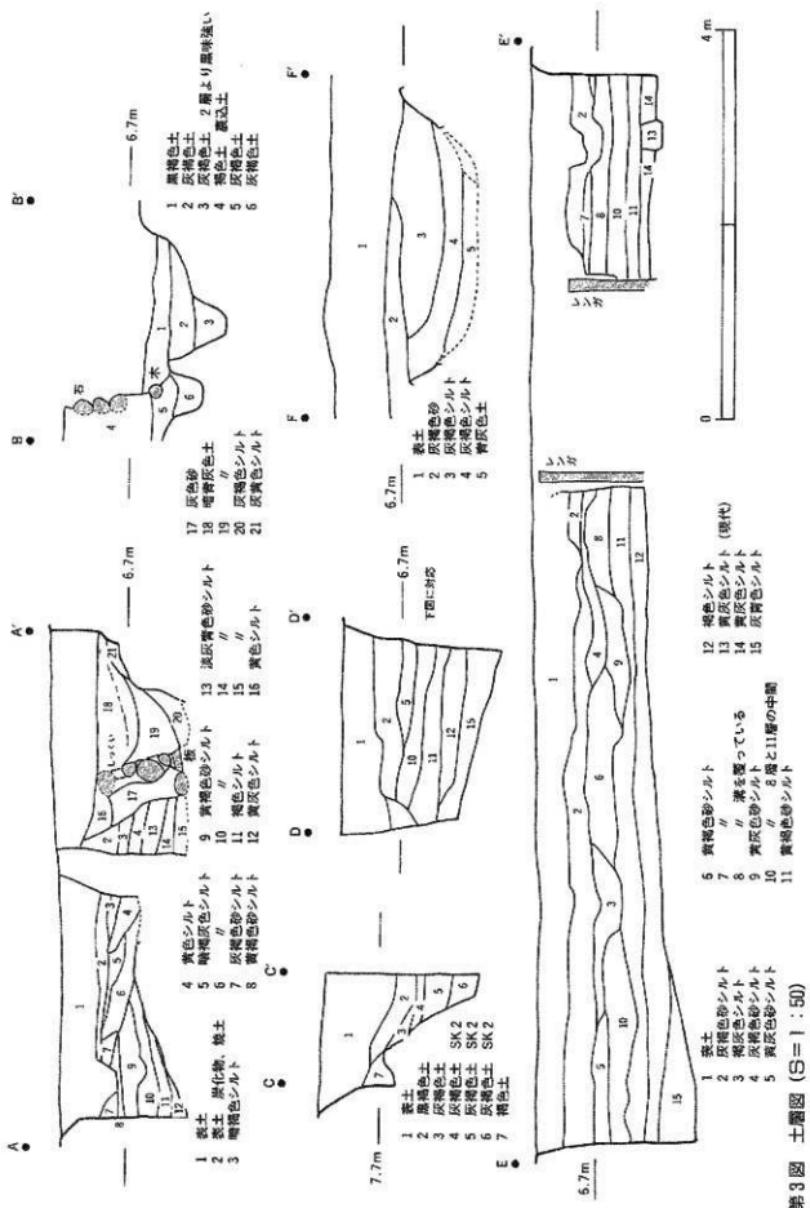


第2図 遺構図(2) ( $S=1:80$ )

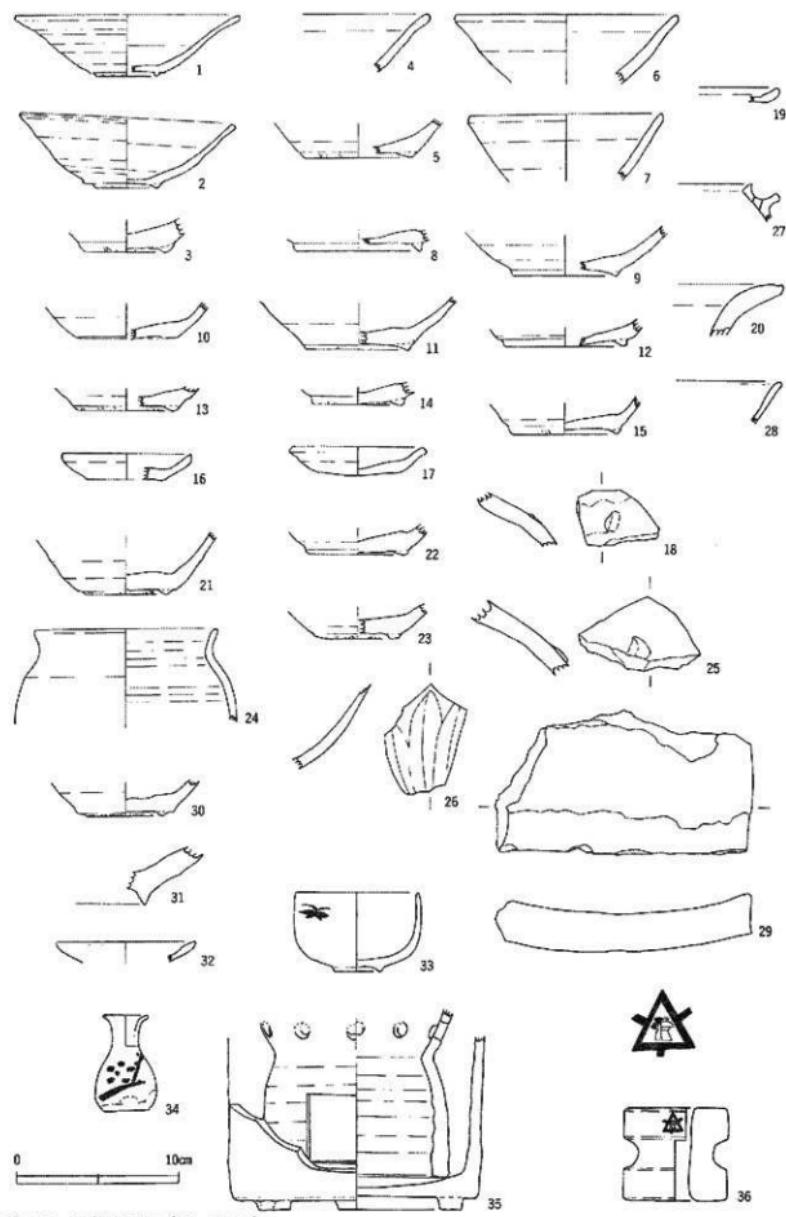
### 第3節まとめ

今回の調査では、中世の土坑1基、溝1条、近世末の土坑もしくは溝2基、近代の溝1条等を検出した。小規模な面積であったが、東半部と西半部では様相を異にし、東半部では中世の遺構を検出したが、西半部は近代以降に南北方向に排水溝が掘られ、西面する玉石垣が組まれていた。この排水溝の底面では近世の土坑が検出された。溝中の遺物は、大正～昭和頃（太平洋戦争中のものを含ます）であった。

周辺での調査は、平成8（1996）年に道路をはさんだ北側の宅地において、第12次、第13次調査が実施されている。この調査では、SD01、SD04と命名された2基の溝から中世陶器、瓦、鉄片及び須恵器、埴輪が出土している。また西側で行なわれた第3次調査でも、土坑SK01から中世陶器、瓦、埴輪等が出土している。この土坑は、以後の調査成果から溝状遺構の一部と推定され、これらは古墳の周溝として掘削され、中世に埋没したものと考えられている。山茶碗以外に瓦や鉄片、白磁碗、青磁碗等が出土し、宗教施設、工房等の存在を伺わせるものとして指摘されている（『埋蔵文化財調査報告書26』1997年）。今回の調査でも、SK01から中国陶磁、瓦が出土しており、これまでの調査事例を補強する資料を得た。



第3図 土壌図 (S=1:50)



第4図 遺物実測図 ( $S=1:3$ )

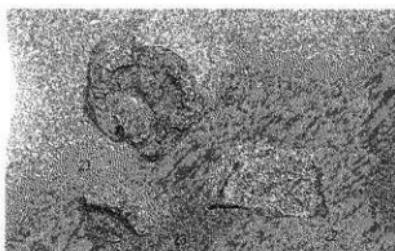


写真6 中世陶器（SK01）

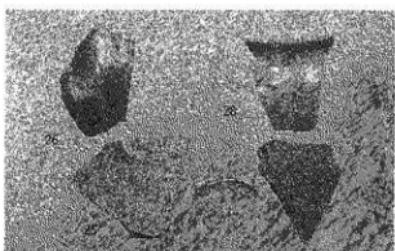


写真7 中世陶磁器（SK01）

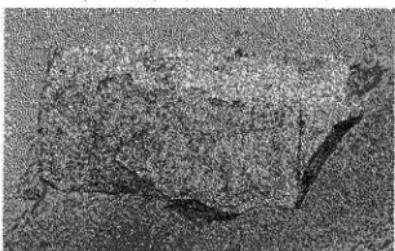


写真8 瓦（SK01）

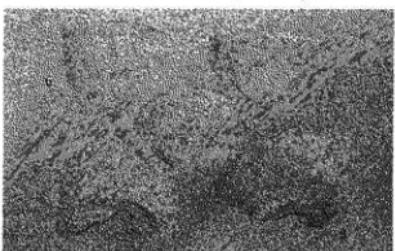


写真9 中世陶器（SK02）



写真10 中世陶器・土師器・瓦（SK02）

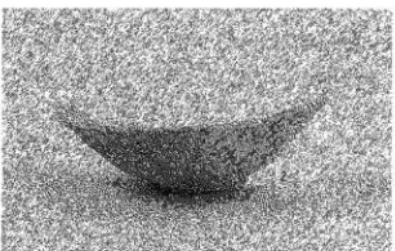


写真11 中世陶器（SD01）

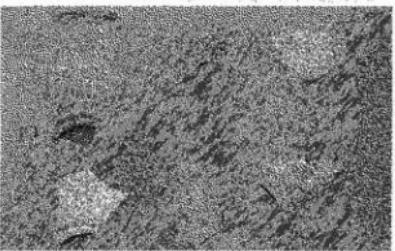


写真12 中世陶器・土師器（SD01）

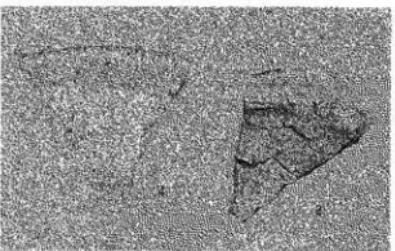


写真13 中世陶器（SD03・SD05）

## 第IV章 高蔵遺跡立会調査報告

### 第1節 調査の経過

名古屋市教育委員会は、平成12（2000）年10月18日～26日に、高蔵遺跡内で工事立会調査を行った。熱田区五本松町地内で行われた東邦ガス㈱のガス管交換工事の状況を確認したもので、対象工区は図1に実線で示した部分である。この区間で確認された掘り込みは、大半が近世以降のものであったが、1か所のみ中世に属する遺構を検出した。この遺構からは、土器（かわらけ）、銅錢、玉類などが特異な出土状況を示したことから、ここに報告する。

工事は、既設の鉄製の管を、ポリエチレン管に交換するものであった。東西方向の道路の北縁から約1m中央寄りを中心とする幅約80cmを、深さ80cm程度まで掘り下げた。掘削部分の南側には、平行して別の管が埋設されていたため、新規に掘削された包含層・地山等は、主に北側の幅（厚さ）5cm前後であった。施工は、管の交換を終えた部分から、順次道路の復旧作業を進めていくものである。

当該遺構については、工事関係者の協力により、断面調査と観察にある程度の時間をかけることができた。施工断面と断面から続く遺物群のみ調査を行ったもので、この遺構は現在も道路下に残存している。当該遺構は、初日に確認したので、以後類似遺構の存在に注意したが、同様な遺構は認められなかった。

出土遺物の一部は、平成12年度に「高蔵遺跡立会調査出土遺物保存処理等業務委託」として、財元興寺文化財研究所に、保存処理および分析を委託した。その成果は付録として収録する。

### 第2節 遺構および調査状況

当該遺構は、現地においてSK1と呼んだ。調査の性格上精密な測量は行っていないが、国土座標第VII系の概略座標値は、X=-96,081、Y=-23,938である。付近の道路面標高は7m前後と推定される。

SK1は、溝状の工事掘削範囲の北壁断面で確認した。図2に示すように、路面（アスファルト面）から約30cmまでの路盤下が、地山（熱田層）の上面となる。地山は、この付近では淡黄白色の粘土であり、通常熱田古地上で見られる遠縫の地山面（茶色～橙褐色の砂シルト）からは、1m前後流失または削平を受けている印象を持つ。SK1の残存

深は約40cmであり、西側では約55度の傾斜をもって立ち上がる。工事の反対側（南壁）断面は、別の既設管で搅乱されていたため、遺構の平面形や大きさは、まったくわからなかった。断面に見える遺構の幅は1.8m以上であるが、東端は別の工事で搅乱されており、やはり規模は不明である。底面は、観察した限りでは、ほぼ平坦である。



図1 調査地点周辺図（1/2,500）

埋土は均質で、径1~2cm程度の地山ブロックを非常に密に含む、粘性の強い明灰色シルトである。埋土が地山と大差ない色調を呈することから、一見したのみでは遺構を認めず、断面に土器片が見えたことから、遺構が確認された。埋土断面では、他には遺物等は認められなかった。

断面の上器片（かわらけ2）は、小片であったが、断面直下に残った埋土から採集したわずかな破片と接合し、この個体が壁面の位置に存在したものと推定した。かわらけ2及び断面を精査するうちに、断面の右側に別個体（かわらけ3）の痕跡を認めた。かわらけ2は、壁の中に統いて、約1/2片を残していた。SK1周辺の埋土中に遺物を探したが、すでに搬出された分もあり、かわらけ2または3の細片と、大窓期の陶器（褐釉丸挽）細片1点を採取したのみであった。陶器片は、本来の出土位置を特定できず、SK1との関係は不明である。

かわらけ2の全体を出すために掘り進めたところ、口縁から3cm前後上の土坑埋土中で白色の小片が出土した。後にこれは、焼けたヒトの歯の一部と鑑定された。かわらけ2の残片は、ほぼ水平に置かれた状況を示していた。奥にはさらに、かわらけ1が、かわらけ2と口縁の高さを揃えて並んでいた。かわらけ3も、土に残った痕跡から、1・2と口縁を接するように並んでいたと推定された。かわらけ1の全形を出す掘削中、口縁から約3cm上の土坑埋土中で、陶丸1点が出土した。かわらけ1は、土圧でヒビが入っているものの完形で、原位置を保っていると考えられた。内面には、5mm程の厚さで、灰色みをおびたやや砂質の土があり、それより上位は土坑埋土のブロック土であった。内面の土は、サンプリングできなかつた。かわらけ1を取り出すと、外側の2か所に銭の付着を認めた。銭1は、底外面に敷かれた状態のもので、銭2は、外傾したかわらけ1の外側に付着していた。いずれも、数枚の銭が重なったものであることわかったが、鏡に覆われて塊状化していた。銭2の取り上げ時に片面の中央付近に木製の玉1点（木玉1）を認めた。銭2およびかわらけ1外側の銭付着痕には、布目状の痕跡が見え、銭2の銭差穴には、紐状の纖維痕があるように思われた。木玉1は、銭2から離れていたが、銭2の鏡に明らかな痕跡を残していた。玉の孔の方向は、銭2の穴と同一方向で重なっていたが、収縮した玉の孔は針穴程度で、纖維などは見えなかつた。玉の付着していた面が、かわらけ1の器面側か逆側かは把握できなかつた。

かわらけ1・2の底面と土坑底面には2~3cmの隙間があり、この部分の埋土は、暗灰色の砂質シルトであった。銭や木玉・纖維（布？）の存在を確認したことから、かわらけの下の土をできるだけ採集した。重量で約820gであった。後にこの土からは、木玉1個と水晶玉6個が発見された。かわらけ1を取り上げたのち、その周囲の埋土を数cm掘り広げたが、遺物は見られなかつた。

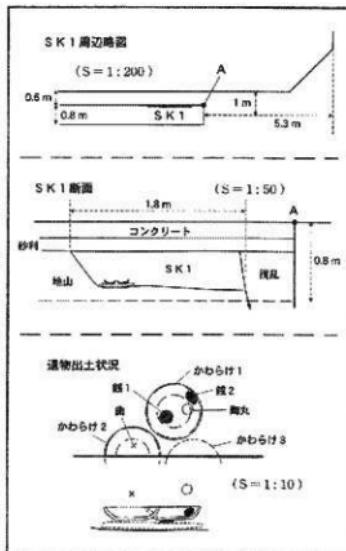


図2 遺構略図（模式図）

### 第3節 遺物

SK 1出土遺物は、底面に並べられたかわらけ 3 点と、これに付着あるいは近接して出土した銅錢計 4 枚、木玉 2 個、水晶玉 6 個、およびやや上部の埋土中で出土したヒトの歯・陶丸各 1 点である。それぞれの観察内容は、表 1 にまとめた。

かわらけ 3 点は、よく似た色調・胎土・調整であり、同じ産地から一括してもたらされたとの印象を持つ。全形がわかるのは 1 のみであるが、平均的な推定数値を示せば、口径 11~12cm、髄高 2.5~3cm、底径 6.5~7cm 程度である。

陶丸は、釉着を剥がしたと思われる痕跡が顕著である。摩滅はまったく見られず、古窯跡出土品かと思う程である。

塊状化した銭 2 点は、外面に纖維痕を残す可能性があったため。一旦は塊状のまま分析・処理をおこなった。分析結果は、付編に示すように纖維の詳細は判明しなかった。このため、銭種の特定が、報告作成に際して有意義であると判断し、塊状の銭の分離をおこなった。この結果、銭 1・2 ともそれぞれ 2 枚を確認し、うち 3 枚の銭種を同定できた。初鋤年は、銭 2 a の人親通寔が西暦 1107 年で最も新しい。銭 1 b は、「元寔」しか読めないが、判読不能の 2 文字については、その書体、画数、出土頻度等から判断して、熙寧である蓋然性が高いように思われる。文字が不鮮明で、厚みが薄い等の特徴からは、悪銭であるのか、模鋤銭であるのか判断できない。

木玉 1 は、出土時点では水気を含んで弾力のある状態であった。発見時に比べると、現状は大きさが 3



写真 1 調査地点近景（東から）

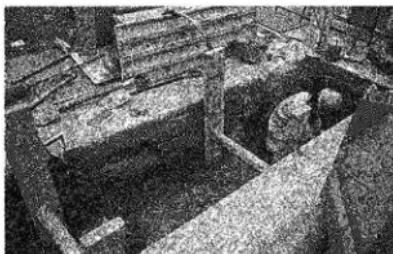


写真 2 遺構検出状況（SK 1 全景）



写真 3 遺物出土状況（かわらけ 1・2、陶丸）

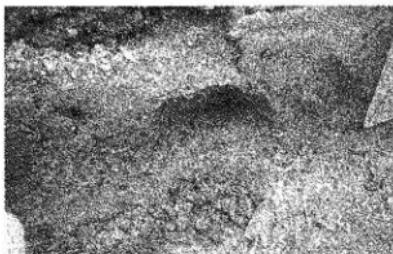


写真 4 かわらけ 1 の出土状況

剖前後縮小した印象を受ける。経通しの穴は、発見時においても、有無を疑うほど小さかった。本来の大きさや形状は不明である。木玉2は、水晶玉1~6とともに、かわらけ下の土壤サンプルから勅元興寺文化財研究所において発見されたものである。

水晶玉1~6は、いずれもややいびつな球形を呈する。同規格を意図して作られたと思われ、平均径5.3mm、同長さ(穿孔方向)4.6mmで、重量は0.2~0.3gである。両側の穿孔の周囲は、剝離して口が広がったような状態である。穿孔は微妙にうねりながら抜けており、穴の径に顕著な変化は見られない。

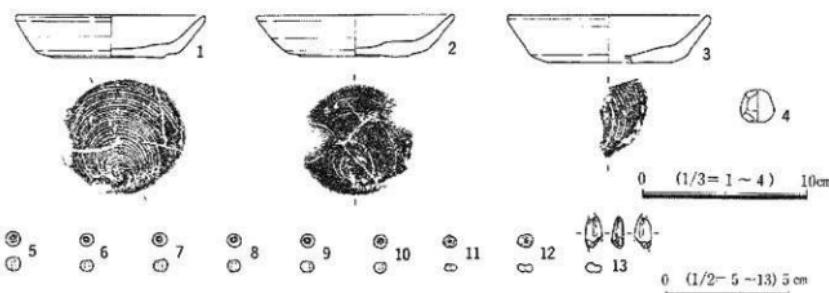


図3 出土遺物実測図

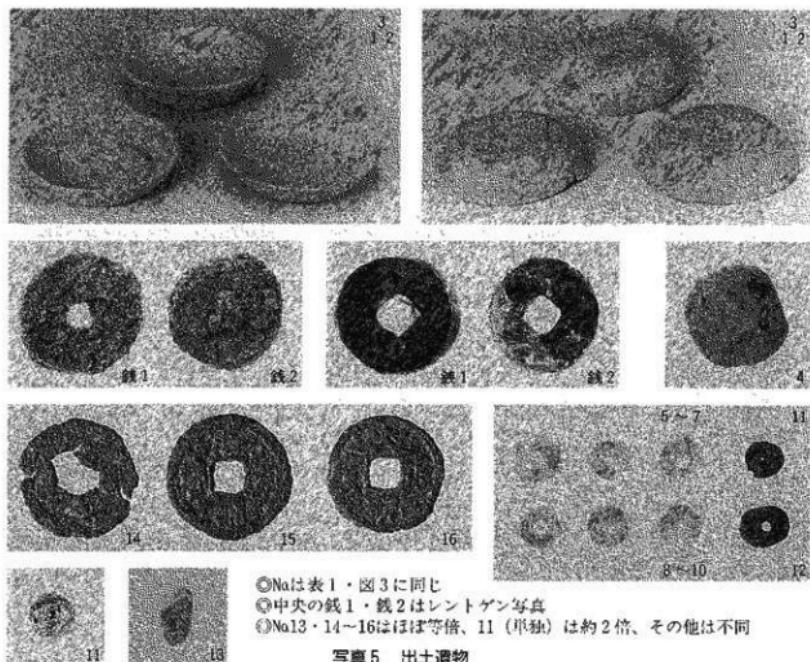


写真5 出土遺物

#### 第4節 小結

SK 1 出土遺物について、現時点での評価をまとめておく。時期について具体的な年代を示すのは、3点の銅鏡のみである。大觀通寶の初鑄年（1107年）が、SK 1 の理論的な上限を示す。陶丸は、13~14世紀のものと考えられ、摩滅が全く見られない状況からは、生産から埋没までが短期間であった可能性を考えさせる。3点のかわらけは、胎土・製作技法・法量等が共通し、同じ生産地のものをまとめて準備した印象を持つ。現状では13~14世紀のものとする考えが一般的である。名古屋古跡における中~近世のかわらけ編年は、情報量の不足から未だ十分整備されたとは言えず、これらの位置付けも確定には至らない。

陶丸が混入ではなく、出土状況の共通する歴とともに意図的に埋置したと捉えれば、かわらけと年代的ににも一致する。SK 1 の年代は、13~14世紀とするのが、現在のところ妥当なようである。ただし、かわらけについて技法・形態のみの比較から類例を探せば、15~16世紀の尾張低地部のかわらけに似るとの指摘もある。かわらけの位置付けがより明確となり、あるいは他の資料・方法による分析で新たな年代観が示されれば、SK 1 自体の年代も見直す余地がある。

SK 1 の機能・目的は何であったのか。年代観と切り離して論ずるべき事項では無いが、いずれにせよ、この問題については結論を示せない。遺構の規模・形状は不明であるが、少なくとも1.8m以上の内法を測る規模である。平らな底面の際には、少なくとも4枚の銅鏡や数珠（木玉・水晶玉）とともに、布で包みあるいは括った1枚を含む、3枚以上のかわらけを敷き並べていた。かわらけ等の埋納時の状況は不明であるが、その上位埋土中から出土したヒトの歯や陶丸も、意図的に置かれた可能性がある。こうした遺構と遺物出土状況の類例は、現在のところ把握できず、その性格は不明である。

調査地点付近には、「法華塚」と呼ぶ塚があったことが知られている。図4は、明治時代の地図等をもとに、法華塚の位置を推定したものである。現在の地図との微妙な対応は不正確だが、調査地点が「法華塚」の推定範囲に含まれることは間違いないであろう。

法華塚については、吉田富夫氏の一連の著述（註）によって概要を知ることができる。幕末の文献『金

No.	名称	法量・類似内容等
1	かわらけ 1	口径11.3cm、器高2.6cm、底径6.6cm、宍形、浅黄褐色、滑、回転ナデ、内面見込みむ、底部糸切り痕(右回転)
2	かわらけ 2	口径(12.0)、器高2.5cm、底径(6.7)、1/3残存、浅黄褐色、砂粒少し含むが滑、回転ナデ、内面見込みむ、底部糸切り痕(右回転)
3	かわらけ 3	口径(12.2)、器高2.9cm、底径(7.2)、1/6残存、浅黄褐色、滑、回転ナデ、内面見込みや凹む、底部糸切り痕(右回転?)
4	陶丸	直径2cm、灰白色、やや粗、手づくり成形、一部自然剥付着、融着剝離痕あり
5	水晶玉 1	最大径6.1mm、最小径5.9mm、厚さ5.5mm、孔径1.5mm、重量0.3g
6	水晶玉 2	最大径6.2mm、最小径5.8mm、厚さ4.5mm、孔径1.8mm、重量0.2g
7	水晶玉 3	最大径5.8mm、最小径5.1mm、厚さ4.2mm、孔径1.8mm、重量0.2g
8	水晶玉 4	最大径5.1mm、最小径5.0mm、厚さ4.4mm、孔径1.9mm、重量0.2g
9	水晶玉 5	最大径5.4mm、最小径5.0mm、厚さ4.7mm、孔径1.7mm、重量0.2g
10	水晶玉 6	最大径5.3mm、最小径5.1mm、厚さ4.5mm、孔径1.5mm、重量0.2g、片面の穴(剝離)の周囲に平坦な研磨面を残す
11	木玉 1	最大径4.9mm、最小径4.5mm、厚さ2.9mm、孔径0.9mm
12	木玉 2	最大径6.3mm、最小径5.2mm、厚さ3.0mm、孔径1.5mm
13	角	残存長1.3cm、残存幅0.65cm、ヒトの歯の歯根部分(付属参照)
14	錢 1 a	元豐通寶、北宋、初鑄=1078年、真書、直徑2.6cm、厚さ1.9mm、重量3.5g
15	錢 1 b	熙寧元宝か?、北宋、初鑄=1068年、真書、直徑2.5cm、厚さ1.1mm、重量1.7g、文字不明、肉薄
16	錢 2 a	大觀通寶、北宋、初鑄=1107年、直徑2.4cm、厚さ1.5mm、重量2.6g

表1 遺物観察表

銅九十九之塚によれば、法華塚の地は、日蓮伝承を持つ貝塚山として知られていたという。享保16年(1736)「南無妙法蓮華經」を刻した石塔の一部が出土し、安永7年(1778)出土地に「法華堂」が建立された。法華堂は、太平洋戦争中に高蔵神社の西に移転し、淨行寺となつた。同寺に残る石塔を見た吉田氏は、室町時代中期以降のものと評価した。昭和40年(1965)頃の吉田氏の聞き取りは、主に以下の内容である。移転前の境内は200坪ほどの広さで、本堂(法華堂)のあった場所は周囲よりかなり高かった。昭和6年(1931)本堂改築の際に、本堂下に大量の貝殻が見られた。本堂下には石の棺が埋めてあり、掘ってはならないと伝えられていた。

吉田氏の記述からは、塚の形状や規模は特定できないが、高さは3m前後であったと思われる。図4に網をかけた範囲は、約600m<sup>2</sup>強である。これは、移転前の境内の広さとはほぼ一致する。網範囲の形は、径30m前後の楕円形に近いが、これが塚そのものであったのか、この内に塚があったのかははっきりしない。規模・範囲は特定できないものの、この付近に室町時代を遡る塚が存在したことは認めてよいと考える。

石棺の存否はともかく、ここにあった塚が古墳として築造された可能性は、高蔵跡範囲内に残る古墳や、古墳跡の調査例を見れば十分考えられる。この塚を古墳と仮定し、「法華塚」と呼ぶ。法華塚には、中世には石塔が置かれるなど、仏教的な施設(地鎮めあるいは墓地)が営まれた可能性がある。法華塚の頂部で見られたという貝が、いつのもので塚とどのように関連するのかは不明である。吉田氏の記録によると、沢上中学内で江戸時代の貝層が見られたという。

法華塚は、太平洋戦争中に削平された。立会調査で確認した地山上面は、かなりの削平を受けた印象であるが、本来の地表高は復元できない。40cmの深さを残すSK1が、法華塚の墳丘に対して、どのような位置にあたるのかで、深さも大幅に変わり、遺構の性格の想定も変わってくるであろう。

SK1と法華塚の関係、SK1と石塔の関係、法華塚(墳丘)の位置など、多くの課題のみが残された。江戸時代以前に築かれた塚あるいはその近辺にあたる立会地点(SK1)において、中世に何らかの仏教儀礼が執り行われた、この点のみが確実に言える。

出土遺物の検討に際しては、尾野善裕・佐藤公保・鈴木正貞の各氏より貴重なご教示をいただいた。末尾ながら、厚くお礼申し上げる。遺物の実測・図版作成は岡本教子が担当した。

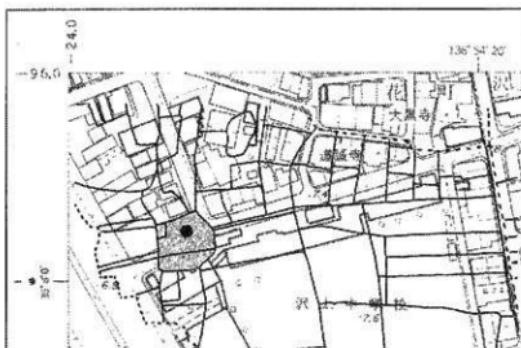


図4 法華塚推定図 (1/2,500)

#### (註)

吉田富夫 1964「江戸時代中期の名古屋における考古学的文献とその学的態度について」『名古屋考古学全報』No.3 名古屋考古学会

吉田富夫 1965「再び「御塚」について」『名古屋考古学全報』No.6 名古屋考古学会

吉田富夫 1969「郷土の考古学入門(7)」『郷土文化』23-3 名古屋郷土文化会

## 付編 高蔵遺跡立会調査出土遺物保存処理等業務委託 分析報告書

この付編は、都元興寺文化財研究所より提出された報告である。掲載にあたって、名古屋市見晴考古資料館が編集し、本編（報告本文）の記載と重複する部分等を省略した。遺物Noは、本編と一致・連続するように訂正した。また、写真・図などの一部は掲載していない。本編に使用した遺物写真の一部（写真5の銭分離前・レントゲン、木玉1・齒）は、当該報告書より引用した。SK1底面付近で採取した土から発見された玉類は、追加報告として作成されたため、報告書は二部構成となっている。提出された構成のままとし、それぞれを報告(1)・(2)と呼んだ。

### 報告(1)

高蔵遺跡出土遺物（契約番号2000-0221）のうち、以下の分析をおこなった。

#### 1. 遺物名および分析内容

- ① No.1 銭付着布の纖維種同定
- ② No.2 小玉の材質同定
- ③ No.3 齒の同定

#### 2. 使用機器および分析条件

- ・実体顕微鏡（株オリンパス SZH-ILLD）
- ・金属顕微鏡（株オリンパス製 BH2 UMA）
- ・走査型電子顕微鏡（㈱日立製作所製 S-415形）

#### 3. 分析方法および結果

- ① No.1 銭付着布の纖維種同定
  - a) 方法

銭2点（1-1=銭1、1-2=銭2）の両面（裏表が不明のため、面1、面2とした）を実体顕微鏡で観察し、写真撮影をおこなった。

繊維がみとめられたものについては、纖維同定を行うためその一部を採取し、電子顕微鏡で観察した。

また、銭に接していたかわらけに付着した纖維様の痕跡を実体顕微鏡で観察した。

- b) 結果

顕微鏡観察で、No.1-1には纖維状物質はみられなかった（写真=略）。

No.1-2の片面（面1）には纖維状物質はみられなかった（写真=略）。

No.1-2の反対面（面2）のほぼ全面に布状の付着がみられた。しかし、纖維が盛り上がり土壤化していたため、ごく一部に絹糸とみられる纖維がみられたものの、布の織り組織は把握できなかった（写真6）。

電子顕微鏡観察では纖維が本来の形状を留めていないため纖維側面および断面の形状を把握することができなかった（写真=略）。

また、孔の銭さしの纖維は細かく崩れ土壤中に分散していたため組織を観察することができなかった。

かわらけの付着痕からは纖維や布の織り組織は確認できなかった（写真=略）。

## ② №2 小玉(木玉1)の材質同定

### a) 方法

直径5mmと小さく脆弱なため、アクリル樹脂(パラロイドB72)のキシレン溶液に浸漬して強化した後、金属顕微鏡で本体部分の観察をおこなった。

(資料が小さく脆弱であるため、樹種鑑定に必要な切片を作成することができなかった)

### b) 結果

小玉の茶色の本体部分を金属顕微鏡観察で観察した結果、木製であることが判った(写真=略)。

鑑定のため木口面を観察したが表面の劣化が著しいため組織を確認することができず樹種の同定はできなかった。

## ③ №3 齒の同定

### a) 方法

バリノ・サーヴェイ㈱に歯の鑑定を依頼した。

### b) 結果

歯はヒトの火熱を受けた上顎前臼歯の歯根部分と同定された(写真=略)。

詳細は、次頁(下記の報告)を参照

## 高藏遺跡出土骨の鑑定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

[略]

### 1. 試料

試料は、SK1から出土した歯1点である。[以下、略]

### 2. 分析方法

試料を肉眼およびルーペ観察により種類・部位の同定を行った。なお、同定は早稲田大学金子浩昌先生の協力を得た。

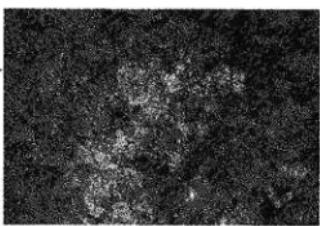
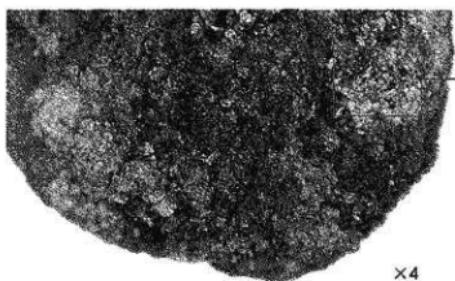
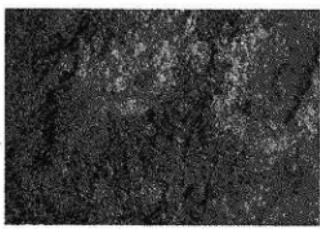
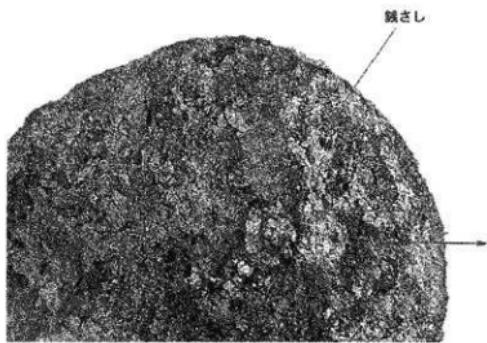
### 3. 結果

出土した歯は、ヒト(Homo sapience)の火熱を受けた上顎前臼歯の歯根部分と同定された。一般に人骨が出土した場合、骨の出土状況・保存状態が良好であれば、骨の形態、骨端の結合状態、骨の長さ、歯の萌出と交代や歯根形成の状態などから、性別・年齢・体躯等の情報を得ることができる。今回の場合、形状および大きさからみて成人の可能性が高いが、遺存状態が悪いことから性別や詳細な年齢などを特定することはできない。また、歯冠部分が脱落していることから咬耗の状況についても不明である。

このように歯の遺存状態は悪かったが、火熱を受けていたことから、本土坑内で火葬されたらだとすれば、他の部位の焼骨も検出されても良いはずである。しかし、今回の調査では土坑内からは他の部位の骨が検出されていないことからみて、火葬人骨の歯のみが埋設されているということになる。このような出土状況は、本遺構が墓壙として利用されていたものだとすれば当時の葬儀禮を検討する上で興味深い結果といえる。



a 全体



b 部分拡大

写真6 銭2の繊維付着状況

## 報告②

高麗赤鉢出土遺物（契約番号2000-0224）のうち、以下の分析をおこなった

### 1. 遺物名および分析内容

土中の遺物取り上げ、および成分分析

### 2. 使用機器および分析条件

- ・走査型電子顕微鏡（㈱日立製作所製 S-3500N）
  - ・エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ㈱製 SEA5230）
- 試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光Xを検出することにより元素を同定する。
- モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ1.8mm、管電圧 15kV

### 3. 分析方法および結果

土中から、木製数珠状遺物1個と無色透明な数珠状遺物6個を取り上げた（写真=略）。

#### ① 木製数珠状遺物（木玉2）

電子顕微鏡で樹種鑑定を試みたところ散孔材であることがわかった（写真=略）。

#### ② 無色透明の数珠状遺物（水晶玉1～6）

ケイ光X線分析装置で元素分析をおこなった。

その結果、ケイ素（Si）を検出した（図=略）。

ガラス玉ではなく水晶玉であることがわかった。

### 4. 保存処理

木製数珠状遺物はエタノールで置換後、溶媒した脂肪酸エステル（12-ヒドロキシメチルエステル）を含浸させた。  
水晶玉はアクリル系樹脂（パラロイドB72）・13%キシレン溶液に浸漬し強化をおこなった。

## 第V章 鳴海城跡立会調査報告

平成13（2001）年1月～3月、名古屋市教育委員会は、緑区鳴海町字城の鳴海城跡において行われた道路拡幅に関する工事の立会調査を行った。鳴海城は、応永年間（1391～1428）頃の築城を伝える中世城郭で、天正18年（1590）頃廃城になったといわれている。過去の調査（文献1）で、江戸時代の絵図に見る繩張りの具体的な造構が把握されてきている。以下、今回の立会調査の経過および成果を概説する。

立会対象となった工事は、図1および写真1～5に示した高さ約4.5mの法面を削り、擁壁を築くというものであった。当初1月初めの施工を予定して、前年12月中旬に伐採までが行われたが、その後一時順延された。教育委員会では、削平される地形が、鳴海城の堀の痕跡を留めている可能性が強いことから、削平前の地形測量をおこなった。測量は、業者委託（鳴海城跡地形測量等業務委託）により、伐採後に実施した。図2に示したのが、その成果図である。E20°Nの方向で西面する法面と、周辺の現況を記録したものである。残存延長20m程の法面の北部は、土取りで切られており、南部も道路拡幅（成海神社敷地造成）の折に切り取られていた。傾斜は、北部で約50°、中央付近で40°強、南部で40°弱である。

削平は3月に施工され、立会調査をおこなった。掘削された法面は、基本的に鳴海丘陵を形成する疊混じり粘性土を主とする層（八事層）であって、部分的に擾乱が見られたものの、中世城郭の構造に伴う盛り

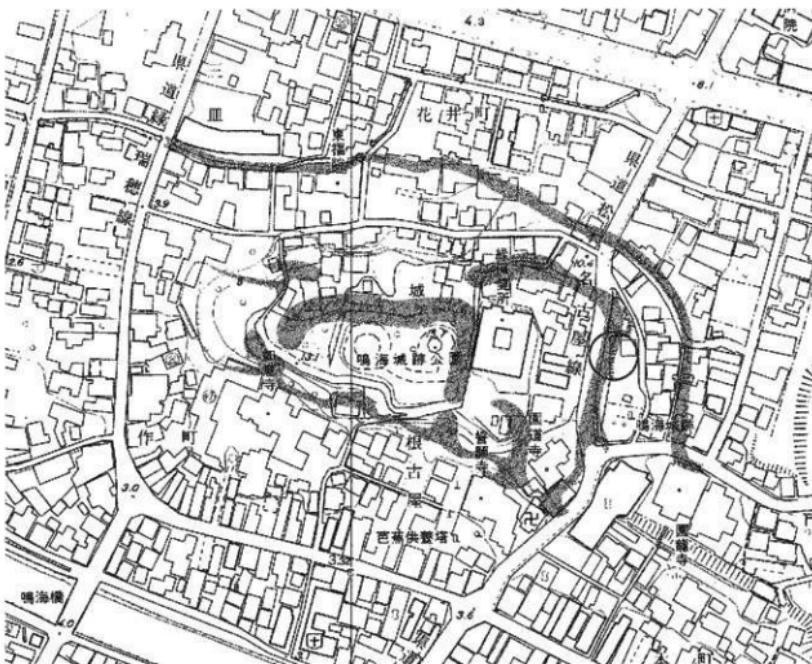


図1 調査地点周辺図（1/2,500）

名古屋市出町画基本図「鳴海」（平成3年）に加筆。○が調査点。△が発見点。アミは鳴海城の推定範囲。

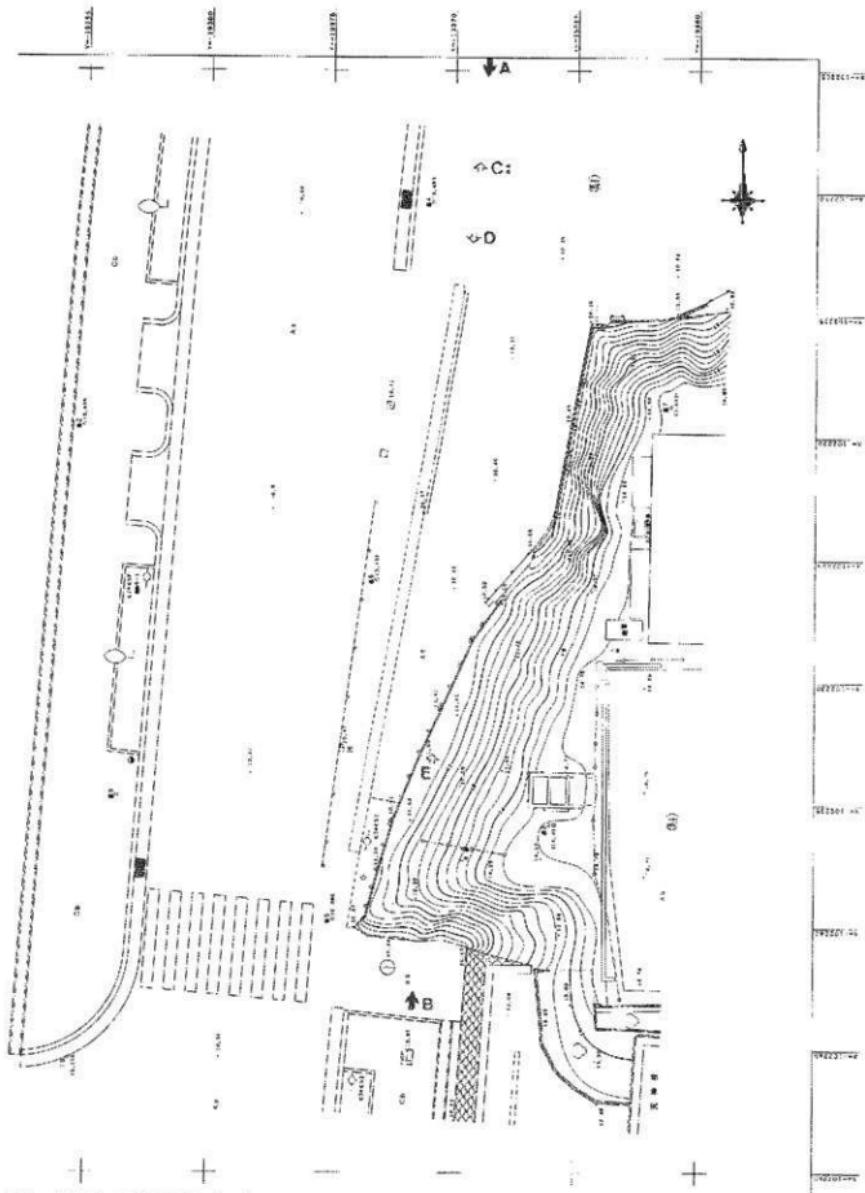
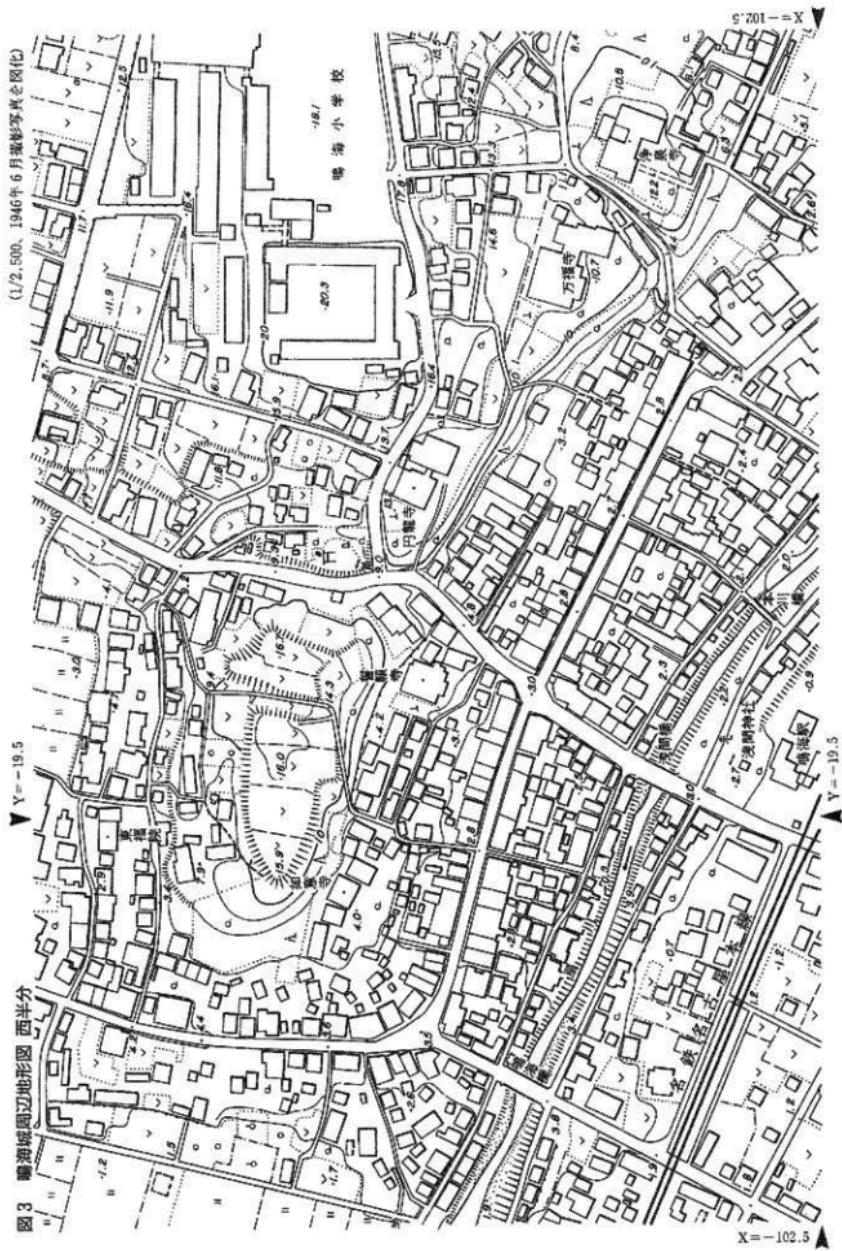


図2 調査地点測量図 (1/200)

圖3 嘴炮城周辺地形図 西半分



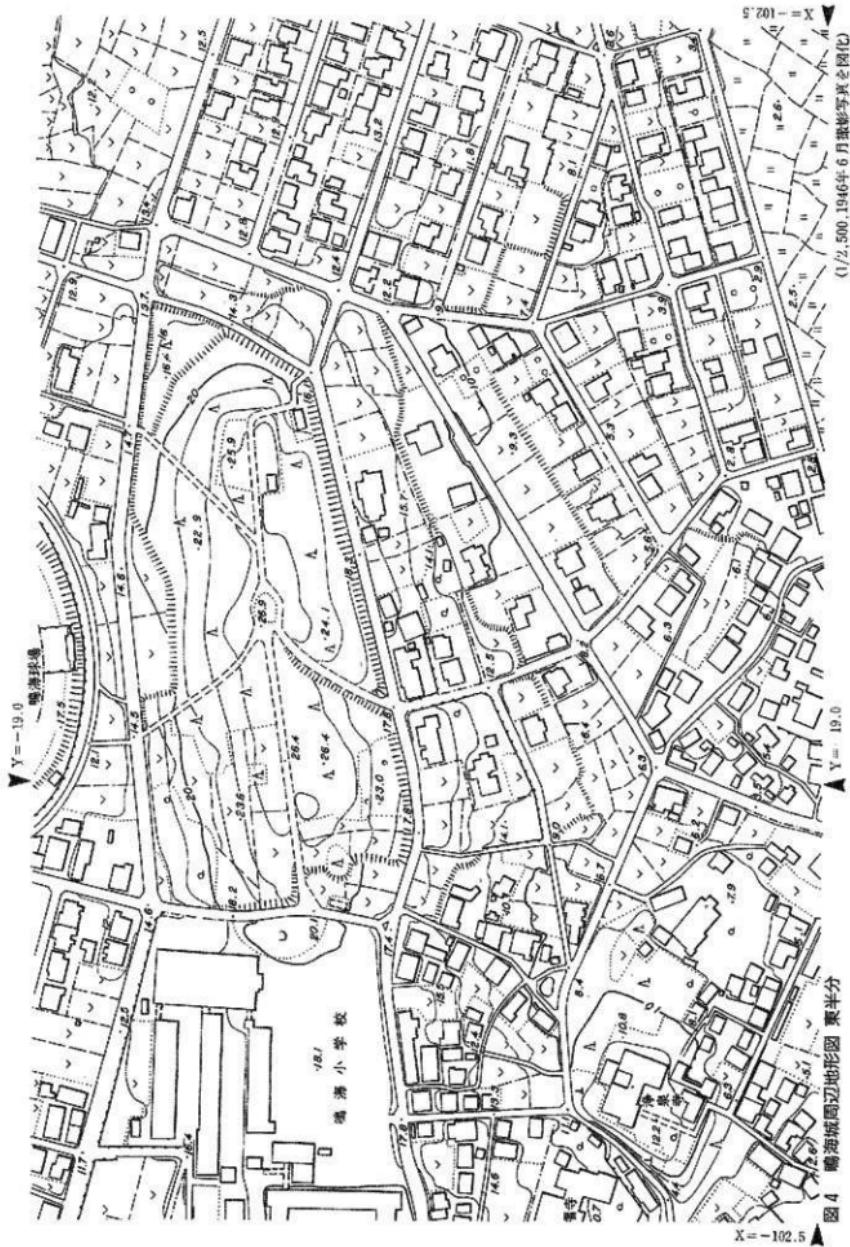


圖4 騰海城周邊地形圖 東半分  
(1/2,500, 1946年 6月撮影写真図)

上や整地の痕跡等は認められなかった（写真6）。

この後、平成13年6月に、上記の工事で削平して歩道となった部分に、名古屋市上下水道局によって水道管が敷設されたため、その掘削際に際して立会をおこなった。施工範囲は、図2に示したA～B間約39mで、幅約70cm、深さ約1.2mであった。掘削深付近までは擾乱も多く、土層の認定に曖昧さはあるが、A～C間は擾乱、C～D間とE～Bは地山、D～E間では地山以外の土が落ち込んでいる様子が見えた。D～E間の土は、鳴海城堀跡の一部である可能性が考えられた。これは、教育委員会がおこなった2・6次発掘調査で確認した堀に統くもので、江戸時代に描かれた絵図から推定されている堀の位置とも、おむね符合する。D点の位置は、削平した法面傾斜の下方への延長と考えて、位置的には矛盾しない。状況からは、今回測量をおこなった部分が、堀の東肩部の形状を伝えていたと考えられる。傾斜の急な北寄り部分は、土取りによって本来の堀が削られているものと思われる。

図3・4は、平成2年に名古屋市教育委員会が作成した「鳴海城周辺地形図」である。昭和21年6月に撮影された航空写真を図化したもので、当時の地形・町並みをそのままに表現している。写真の中で平成2年当時に対応可能な点を、都市計画基本図にあてはめて調整したものである。精度的には限界があるが、1/2500縮尺での誤差は問題ないであろう。図中には、鳴海城および東方の善照寺跡を含んでいる。太平洋戦争中に日本軍が撮影した航空写真では、繩張りをよく留めていた善照寺跡も、この頃にはすでに失われている。鳴海城跡では、本丸・二ノ丸とその間の堀が、良好に認められる。

立会調査地点付近の道路は、図1（平成3年）の地図と図3・5（昭和21年）の地図では、大きな変化は実感できない。しかし、今回の立会工事を含めて近年の工事の進展は、道路が拡幅され景観もかなり様相を変えた。今回の測量図や付載した昭和21年の地図が、今後次第に価値を高めていくものと思う。

文献1 山田鉢一他 1999 名古屋市文化財調査報告42「埋蔵文化財調査報告書32 鳴海城跡（第1～7次）」名古屋市教育委員会



図5 1946年の地図に測量地点を示す（1/5,000、○印が図2の地点）

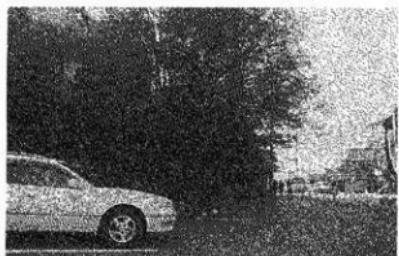


写真1 伐採前の状況（北から）



写真2 伐採後の状況（北から）



写真3 伐採後（西から）



写真4 伐採後（南西から）



写真5 伐採後（南・神社から）



写真6 堀削状況（南からの近景）

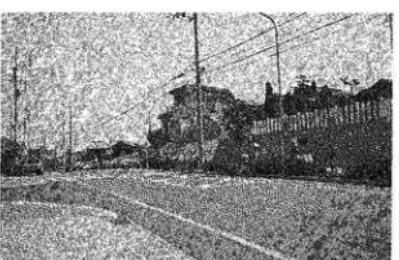


写真7 水道管工事（南西から）



写真8 水道管工事（南から）

# 報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさはうこくしょ						
書名	埋蔵文化財調査報告書						
副書名	高蔵遺跡（第31次・32次・33次・立会）鳴海城跡（立会）						
卷次	42						
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告						
シリーズ番号	55						
編著者名	伊藤厚史・伊藤正人・柳瀬茂・新美倫子・岡本敦子						
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館						
所在地	〒457-0026 名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223						
発行機関	名古屋市教育委員会						
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268						
発行年月日	2002年3月29日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	面積 m <sup>2</sup>	調査原因
	市町村 所 在 地	市町村 遺跡番号	北緯 度	東経 度			
たかくらいせき 高蔵遺跡	あつたくそとどいちょう 熱田区外土居町604	23100	12-2	35° 7' 57"	136° 54' 20"	2000.11.20 ～2001.3.2	720 個人住宅
たかくらいせき 高蔵遺跡	あつたくそとどいちょう 熱田区外土居町110	23100	12-2	35° 8' 2°	136° 54' 30"	2001.2.19 ～2001.3.16	50 個人住宅
たかくらいせき 高蔵遺跡	あつたくごほんまつちょう 熱田区五本松町1004-1	23100	12-2	35° 7' 52"	136° 54' 22"	2001.4.2 ～2001.4.20	60 個人住宅
たかくらいせき 高蔵遺跡	あつなくごほんまつちょう 熱田区五本松町地内	23100	12-2	35° 8' 1°	136° 54' 14"	2000.10.18 ～2000.10.26	一 ガス工事
なるみじょうあと 鳴海城跡	みどりぐるみちょうあさしろ 緑区鳴海町字城	23100	14-95	35° 42"	136° 57' 15"	2001.1.22 ～2001.3.8	一 道路拡幅 関連工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生～古墳	溝	弥生土器・須恵器・土人形型			第31次調査
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生	住居跡・貝層	弥生土器			第32次調査
高蔵遺跡	集落遺跡	中世	土坑				第33次調査
高蔵遺跡	集落遺跡	中世	上坑？	かわらけ・陶丸・水晶玉・木玉・人の骨			立会調査
鳴海城跡	城跡	戦国	堀跡				立会調査

名古屋市文化財調査報告書55

埋蔵文化財調査報告書42

2002年3月29日

編集	名古屋市見晴台考古資料館
発行	名古屋市教育委員会
印刷	名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印刷	西濃印刷株式会社

